

関東学院大学
高等教育研究・開発センター
年 報

第2号



関東学院大学 高等教育研究・開発センター

目 次

研究論文・実践報告

研究論文

「体育会学生の学習意識・行動や協調的問題解決力に関する考察

—カリキュラム開発に向けて— 杉原亨、奈良堂史…………… 5

実践報告

大学間連携による FD 活動の推進を通じた教育の質向上に向けて

—横浜市内 3 大学の連携による取り組み— 曾根健吾 …………… 17

自校史授業開講へ向けて 2 山田昭子、杉原亨、千葉隆行 …………… 23

講習会・講演録

2015 年度全学 FD・SD フォーラム（川那部隆司氏）…………… 33

第 6 回 KGU 高等教育セミナー（佐藤浩章氏）…………… 39

第 7 回 KGU 高等教育セミナー（曾根健吾氏）…………… 48

高等教育研究・開発センター News Letter

Vol. 6 & 7（2015 年 9 月 1 日発行）…………… 67

Vol. 8（2015 年 12 月 10 日発行）…………… 75

研究実績報告

富田茂美 …………… 85

杉原 亨 …………… 87

奈良堂史 …………… 92

山田昭子 …………… 95

高等教育研究・開発センター活動報告、記録

2015 年度 高等教育研究・開発センター 事業報告 …………… 99

高等教育研究・開発センター運営委員会開催記録 …………… 100

高等教育研究・開発センター員会議開催記録 …………… 106

高等教育研究・開発センター作業部会開催記録 …………… 107

Kotoken Coffee Hour 開催記録 …………… 109

高等教育研究・開発センター構成員 …………… 111

高等教育研究・開発センター規程 …………… 112

研究論文・実践報告

Annual Report of Center for Research and Development of Higher Education, Kanto Gakuin University

体育会学生の学習意識・行動や協調的問題解決力に関する考察

－カリキュラム開発に向けて－

杉原 亨 奈良 堂史

(高等教育研究・開発センター専任講師)

概要

入学直後の体育会学生の学びの意識・行動と協調的問題解決力について整理すると次のことが明らかとなった。第一に、学びの意識については、体育会学生は一般学生より大学の学びに価値を感じておらず、学びに打ち込む決意や意思を持ち合わせていない傾向が確認された。これらの傾向は、体育会学生の大学生活における最大のモチベーションが部活動である一方で、大学で学ぶ目的が不明瞭なまま入学していることが影響していると考えられる。第二に、学びへの行動については、体育会学生と一般学生で有意差はみられなかった。第三に、協調的問題解決力については、体育会学生は一般学生より、物事に挑戦する経験や、困難に耐えながら目標を達成するために粘り強く行動する経験を有している傾向がみられた。また、他者とのコミュニケーションやディスカッションを通じて関係性を築く経験や、チームで決定したことを実行する経験を有していることがわかった。高校までの部活経験が上記のような能力を高めていることが伺える。

1. 体育会学生支援の背景

東京オリンピックが2020年に開催されることが決定して以来、これまで以上にスポーツ全般へ熱い視線が注がれている。

スポーツに関する政策的な動向として、文部科学省は2011年にスポーツ立国を目指すために、スポーツによる青少年の健全育成や地域社会への貢献、健康の保持増進などをまとめたスポーツ基本法を制定し、2012年には、スポーツ基本法を踏まえて、今後10年間を見越したスポーツ基本計画を策定した。計画の中で、地域や大学との連携を掲げている。

また、2015年10月に、スポーツ政策を総合的に推進し、スポーツを通じて社会を発展させていくためにスポーツ庁が創設された。

さらに、文部科学省(2016)は、2016年8月

に大学スポーツの振興に関する検討会議で中間とりまとめを発表した。中間とりまとめでは、大学スポーツの意義を示すと共に、大学トップ層の理解の醸成、大学内のスポーツ分野を統括する部局や人材の必要性、大学スポーツ振興のための資金調達力向上、大学体育の充実と学生のスポーツ環境の整備、学生アスリートの学修支援及びキャリア支援の充実などについて方向性を示しており、とりわけ大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版NCAA¹）の在り方について提言している。また、経済産業省(2016)

¹ アメリカでは、大学スポーツを取りまとめる団体としてNCAA（National Collegiate Athletic Association）が存在する。NACCでは様々なルールやガイドラインを制定しており、例えば、学業については単位取得状況やGPAのスコアが低い学生は、競技に参加できなくなる。（<http://www.ncaa.org/>）2016年9月19日アクセス

においても、2016 年 6 月にスポーツ未来開拓会議中間報告にて、アスリート学生の教育の充実やキャリア形成への支援を提言している。

これらの国の動向から、大学スポーツへ大きな期待がかけられており、関連して体育会学生への学修支援やキャリア形成の重要性はさらに高まることが考えられる。

2. 先行事例及び調査

次に、主に大学の体育会²学生支援の事例及び調査を取り上げる。

大学スポーツの振興において先行しているアメリカでは学習支援についても様々な取り組みや検証を実施しており、一例として Whitner (1988) は、学生アスリート向けのスタディスキルプログラムの実証を行っている。

また、長倉 (2011) は、アメリカの 4 大学に対して訪問調査を実施した。その結果、全ての大学がアスリート学生を対象とした学習支援専門の部署を設置し、常駐の専任スタッフが履修や学習方法、キャリアプランなどについてアドバイスしていることを明らかとした。

日本にも体育会学生に向けた支援を実施している大学は多数存在し、中でも早稲田大学の競技スポーツセンターは、2014 年度から体育各部全部員に対して、早稲田アスリートプログラム (WAP) を提供している。人格陶冶のための教育プログラムとして、①アスリートとしての教養プログラム、②キャリア形成支援プログラム、③ボランティア・地域貢献活動支援プログラム、④国際交流支援プログラムを実施している。また、修学支援プログラムとして、①学業情報管理、②アカデミックアドバイザーの配置、③褒賞を実施しており、学業情報管理では、要指導単位や練習や試合制限を定めた最低基準単位を設け、全部員の学業情報を学期ごとに

管理し、部員が学業成績不良者になることを未然に防ぐよう指導をしている (土屋, 2016)。

体育会学生を対象とした研修として、立教大学はテニス部を対象にリーダーシップ研修³を実施している。また関東学院大学では、体育会だけでなく文化会、サークル、ボランティア団体のリーダーを対象とした研修 (リーダーズキャンプ) にて、学習に関する振り返りや、チームワークを醸成するコミュニケーション向上のトレーニングを実施している (ラーニングバリュー, 2015)。

全国大学体育連合 (2015) は、2015 年に全国の大規模大学及び体育系大学、体育系学部を有する大学に調査を実施した。その結果、クラブ活動への大学の期待は、「運動部学生の人的成長やリーダー養成 (96%)」が最も高く、次いで「課外スポーツ全般の活性化 (89%)」「学生生活の充実 (88%)」であった。また、運動部学生への学修支援は約 7 割が必要を感じており、主な支援内容として「試合等で欠席した場合の配慮 (59%)」「運動部向けのクラス編成 (19%)」「練習時間に配慮した時間割編成 (19%)」「運動部学生向けの授業開設 (14%)」であった。さらに、運動部学生が学業不振の場合の指導や参加制限を行っている大学は約 4 割であった。また、同団体が 2015 年に国内の学生競技連盟及び教会に運動部学生の修学に対する調査を実施したところ、学修に関して検討する機関・委員会について 6 連盟 (15%) がある、7 連盟 (17%) が現在はないが、検討している、28 連盟 (68%) が現在もないし、検討もしていないと回答した (伊東他, 2016)。さらに、日本スポーツ振興センター (2014) の調査で、学生アスリートに対する学業支援として、

³ 立教大学テニス部リーダーシップ研修
(<http://cob.rikkyo.ac.jp/blp/2567.html>) 2016 年 9 月 20 日アクセス

²本稿では体育会と運動部を同義として記している。

追試や課題・レポート作成、補習・補講が上位であった。

体育会学生の学業成績の実態として、同志社大学(2015)は、キャンパスライフに関するアンケート調査を実施し、公認体育会へ参加している学生のGPAは無所属と比較して有意に低く、さらに部活・サークルに1週間に21時間以上参加している学生は無参加(0時間)と比較してGPAが有意に低いことを報告している。さらに、清宮・依田(2014)は体育大学生を対象とした調査で、「授業単位」について54.6%の学生が不安要因としてあげている。

これらから、多くの大学は体育会学生に対して学習面での課題を認識しつつも、とりわけリーダーシップやコミュニケーション力など人間的成長に一定の期待をしており、体育会学生に対して様々な支援を検討・実施している状況あることが伺える。

体育会学生の資質・能力について、金森(2016)は体育会学生に向けたアンケート調査で、運動部を通じて得られた力として、「忍耐力・継続力」「精神力・集中力」を獲得したという認識が高いことを示している。また、木内(2012)は、島本・石井(2006)が開発した日常生活スキル尺度による質問紙調査を行った結果、体育会所属者(とりわけ、集団系スポーツ)は、対人スキル・個人的スキル・総合スキルの全てにおいて、無所属者及び文化会所属者よりも有意に高い得点を示したことを明らかにした。上記調査から、体育会学生は部活動を通じて社会で求められている、いわゆる“人間力”のような資質能力を身につけていると考えられる。

さらに、杉原・奈良(2015)は、5大学の学生に対して質問紙調査を実施した結果、体育会学生は一般学生よりキャリア形成に関する意識は高い傾向にあるが、学習動機は一般学生の

ほうが将来を見据え、実社会での役立ちを意識して学びに向かっていることを明らかにした。

また、関東学院大学内での勉強会、第15回 Kotoken Coffee Hour(2016年1月28日開催)では体育会学生について、現職の教職員との意見交換を行い、「体育会学生について日ごろの業務を通じて感じる事」についてアンケートを実施した結果、主な意見として次のような回答を得ている。

【体育会学生をポジティブに捉えている意見】

・学生の履歴書を見る機会がありますが、運動部出身の子の印象は良いことが多いです。(こんなことで失敗した、しかし工夫して乗り越えた等のエピソードがしっかり書けていることが多いです。)

・取材等を通じてのやりとりが多いです。人なつっこい学生が多い印象です。

・何とか伸びしろに期待できると思っています。

【体育会学生をネガティブに捉えている意見】

・ゴールの設定があまりうまくないと感じる。部活、卒業に対して筋道がなく、なんとなく単位を取り、なんとなく部活をしているようなイメージ。その結果、留年や退学になっている子が出ていると思う。スポーツと経済活動のつながりを教えるべきかと思う。選手、スタッフ以外のスポーツの関わり方が知れるといいかと思う。

・体育会学生＝勉強ができない、授業にでない。授業にでても他の人の邪魔をするなどイメージは良くない。

少人数のコメントではあるが、体育会学生について、対人スキルや部活での経験を評価されている一方で、部活と学業に対する取り組み方や授業態度について良くない印象を抱かれていることがわかった。

このような先行事例や調査を踏まえて本研究では入学直後の新生を対象に学びの意識・行動と協調的問題解決力について調査及び検証を行った。

3. 調査概要

3.1. 調査時期・対象

関東地区の私立 A 大学(人文社会系、理工系、医療系を有する総合大学)における 1 年生向けキャリア系科目で、第 2 回授業内(2016 年 4 月)にて 1 年生向けアセスメント「大学生基礎力レポート I」(開発:ベネッセ i-キャリア)を実施した。受検者は 1 年生 2,724 人であった。独自設問での回答不備や無回答などを除いた 2,269 人(一般学生 1,783 人、体育会学生 486 人)を本調査の分析対象とした⁴。

3.2. 質問項目

アセスメントは、主に「能力的評価(基礎学力や批判的思考力など)」「行動的評価(協調的問題解決力など)」「アンケート(進路や学びの意識など)」で構成されている。今回のアセスメント実施では、自分の大学についての知識や誇り、体育会学生向けの独自設問(所属部活の有無、競技歴、入部理由、部活動による能力向上、競技者としてのキャリアなど)を追加した。

4. 入学直後の体育会学生の状況

はじめに体育会学生を対象とした独自設問の結果⁵を報告する。

4.1 所属部活の競技歴

所属部活の競技歴は「15 年以上 (n=41、

10.2%)」「10 年以上 15 年未満 (n=101、25.2%)」「5 年以上 10 年未満 (n=124、30.9%)」「3 年以上 5 年未満 (n=49、12.2%)」「3 年未満 (n=86、21.4%)」であった。ここから、半数以上の体育会学生は中学校くらいから競技を始めていることが伺える。一部学生は幼少期から競技に取り組んでいることがわかる。

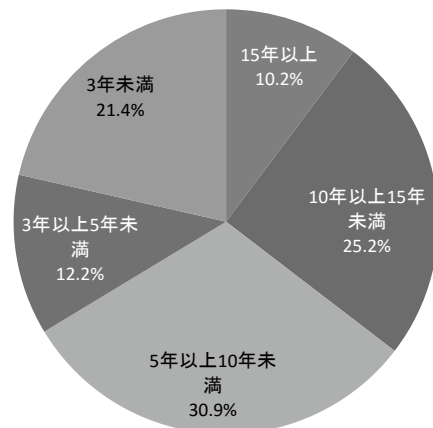


図 1. 所属部活の競技歴

4.2 所属部活の入部理由

最も強い入部理由は、「部活の知名度 (n=35、8.5%)」「指導者(監督・コーチ) (n=35、8.5%)」「部の雰囲気 (n=87、21.1%)」「自分が活躍できそうだから (n=33、8.0%)」「競技を続けたかったから (n=89、21.6%)」「将来、プロの選手になりたいから (n=21、5.1%)」「高校の監督からの推薦 (n=32、7.8%)」「家族、先輩、友人から勧められたから (n=21、5.1%)」「スポーツ推薦で入学したから (n=33、8.0%)」「その他 (n=26、6.3%)」であった。入部理由として、部の雰囲気や競技継続の思いが比較的高いが、様々な要因が影響していると思われる。

⁴ 独自設問の設計上、一部学生の回答で体育会への所属の有無が判別できなかったため、該当する学生は今回の分析対象から除外した。もしくは、全体の回答状況を踏まえて所属の判別を行った。そのため、一部の体育会は今回の分析対象に含まれていない。

⁵ 独自設問は全て最もあてはまるものを 1 つのみ選択させた。回答不備・無回答は集計結果に含んでいない。

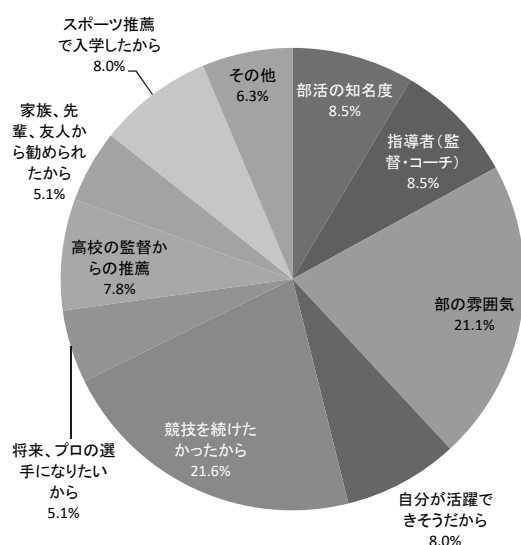


図2. 所属部活の入部理由

4.3 部活動による能力・スキルの向上

部活動により最も向上したと感じる能力・スキルは、「論理的・批判的思考力 (n=40、9.8%)」「数量的・統計的スキル (n=23、5.6%)」「情報リテラシー (n=36、8.8%)」「問題解決力 (n=47、11.5%)」「チームワーク・リーダーシップ (n=147、35.9%)」「プレゼンテーションスキル (n=12、2.9%)」「ディスカッションスキル (n=14、3.4%)」「コミュニケーションスキル (n=66、16.1%)」「文章作成力 (n=11、2.7%)」「語学力 (n=14、3.4%)」であった。ここから、高校までの部活動によりチームワークやリーダーシップ、コミュニケーション力が特に向上したと感じていることがわかる。

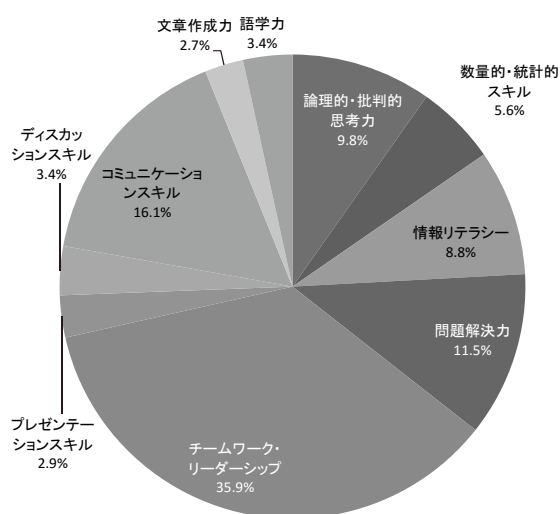


図3. 部活動による能力・スキルの向上

4.4 競技者（アスリート）としてのキャリア

競技者としてのキャリアは、体育会学生全体で見ると「プロを目指している (n=54、14.8%)」「社会人（企業・実業団など）でトップレベルの競技を続ける (n=65、17.9%)」「コーチやチームスタッフとして後進を育成する (n=53、14.6%)」「メーカーやスポーツ用品店などでビジネスとして競技に関わる (n=32、8.8%)」「仕事とは関係なく、趣味・娯楽として競技を続ける (n=130、35.7%)」「大学で引退して完全に競技から離れる (n=30、8.2%)」であった。

但し、学内で選定された3つの特別強化クラブに所属する学生に限定して見れば、「プロを目指している (n=31、27.1%)」「社会人（企業・実業団など）でトップレベルの競技を続ける (n=45、31.5%)」「コーチやチームスタッフとして後進を育成する (n=23、16.1%)」「メーカーやスポーツ用品店などでビジネスとして競技に関わる (n=12、8.4%)」「仕事とは関係なく、趣味・娯楽として競技を続ける (n=20、14.0%)」「大学で引退して完全に競技から離れる (n=12、8.4%)」となり、6割弱の学生はプロ・社会人で競技を継続したい意向を示してい

る。

体育会学生全体としては、入学直後の時点で、大学卒業後でプロもしくは社会人として競技者を続ける意向の学生よりも、趣味娯楽として続ける、もしくは完全に競技から離れる意向を抱く学生が多い状況である。特別強化クラブなど、部活ごとで傾向が異なるので一概にはいえないものの、今後の大学による体育会学生への教育上の支援において留意する必要があるだろう。

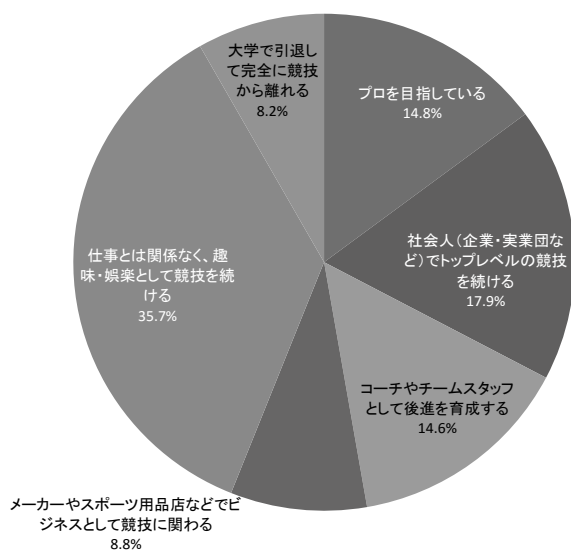


図4. 競技者としてのキャリア（体育会全体）

5. リサーチクエスチョン

本研究では次のリサーチクエスチョン（以下RQ）を設定した。RQ1では、公認体育会（部活）で活動している学生（体育会学生群）と、その他の一般学生（一般学生群）で、「学びへの意識（RQ1-1）」と「学びへの行動（RQ1-2）」について、どのような差があるかを検証した。

RQ2では、同様の枠組みで、「協調的問題解決力」について、どのような差があるかを検証した。

【本研究のリサーチクエスチョン】

RQ1-1：公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で「学びへの意識」に差がある。

RQ1-2：公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で「学びへの行動」に差がある。

RQ2：公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で「協調的問題解決力」に差がある。

6. 検証方法

アセスメントの独自設問で後任体育会の所属に関して確認した上で、「学びへの意識（RQ1-1）」「学びへの行動（RQ1-2）」「協調的問題解決力（RQ2）」にて、体育会学生群（n=486）と一般学生群（n=1783）との有意差をマン・ホイットニ検定で分析した。

学びへの意識については、「大学で学ぶ価値」「学びへのコミット」「学びへの心構え」「学びへの見通し」「学び・経験への積極性」を測定分野としており、各分野は複数設問で構成されている。

表1. 学びへの意識（測定分野）

大学で学ぶ価値	大学の学びにどれだけ価値を感じているか
学びへのコミット	学びに打ち込む決意や意思をどれだけ持っているか
学びへの心構え	主体的に学ぶ心構えがどれだけできているか
学びの見通し	卒業までの見通しや自己の成長イメージが持っているか
学び・経験への積極性	学びや挑戦、周囲との交流に対してどれだけ前向きであるか(知的好奇心など)

学びへの行動については、予習・復習や教員への質問、ノートテイキングなど学習習慣や学習態度がどれだけ身についているかを「学びへの取組み」とし、複数設問で測定している。

表 2. 学びへの行動（測定分野）

学びへの取り組み	学習習慣や学習態度がどれだけ身についているか
----------	------------------------

社会で必要とされる「協調的問題解決力」の行動的評価として、“自己管理（挑戦する経験・続ける経験・ストレスに対処する経験）”、“対人関係（多様性を受容する経験・関係性を築く経験・議論する経験）”、“計画・実行（課題を設定する経験・解決策を立案する経験・実行検証する経験）”という大きく3つの分野をそれぞれ複数設問で測定している。

表 3. 協調的問題解決力（測定分野）

自己管理	目標を掲げ、自分の感情や行動を適切にコントロールしながら、達成に向けて粘り強く行動する	挑戦する経験
		続ける経験
		ストレスに対処する経験
対人関係	自分と異なる意見や価値観、行動のしかたの違いを受け入れ、他者との合意を形成しようとする	多様性を受容する経験
		関係性を築く経験
		議論する経験
計画・実行	問題解決に必要なプロセスを適切に運用する	課題を設定する経験
		解決策を立案する経験
		実行・検証する経験

7. 検証結果

7.1 公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で学びへの意識に差がある。（RQ1-1）

学びの意識について、体育会学生群と一般学生群で有意差があるか分析した結果、「大学で学ぶ価値（ $p<0.01$ ）」及び「学びへのコミット（ $p<0.05$ ）」で有意差がみられ、一般学生群が体育会学生群と比較して高い傾向であった。

すなわち、一般学生のほうが体育会学生より、大学での勉強が将来に役に立つ、大学の授業を通じて自分の資質や能力を高めることができ

るなど、大学の学びに価値を見出しているように思われる。「学びの心構え」「学びの見通し」「学び・経験への積極性」に関して有意差はみられなかった。

表 4. 体育会学生群と一般学生群との比較（学びへの意識）** $p<0.01$, * $p<0.05$,

		体育会学生群	一般学生群	p値	
大学で学ぶ価値	平均順位	1061.0	1148.2	0.0085	**
学びへのコミット	平均順位	1073.0	1143.6	0.0329	*
学びへの心構え	平均順位	1112.2	1128.5	0.6234	
学びの見通し	平均順位	1123.9	1126.6	0.9342	
学び・経験への積極性	平均順位	1142.6	1123.4	0.5625	

7.2 公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で学びへの行動に差がある。（RQ1-2）

学びへの行動について、体育会学生群と一般学生群で有意差があるか分析した結果、有意差はみられなかった。

表 5. 体育会学生群と一般学生群との比較（学びへの行動）** $p<0.01$, * $p<0.05$,

		体育会学生群	一般学生群	p値	
学びへの取り組み	平均順位	1149.0	1115.3	0.3122	

7.3 公認体育会（部活）で活動している学生と一般学生で「協調的問題解決力」に差がある。（RQ2）

協調的問題解決力について、「挑戦する経験

($p<0.05$)」「続ける経験 ($p<0.01$)」「ストレスに対処する経験 ($p<0.05$)」「関係性を築く経験 ($p<0.01$)」「議論する経験 ($p<0.01$)」「実行・検証する経験 ($p<0.01$)」で有意差がみられ、体育会学生群が一般学生群と比較して高い傾向であった。

体育会学生は、目標に向けて粘り強く取り組み、チームの中で自分が何をなすべきかを考えて行動し、練習などにストイックに取り組んだなど、高校までの部活経験が上記の結果に結びついていると考えられる。また、先の独自設問の分析結果でも、部活動で最も身についた力として、チームワーク・リーダーシップ、コミュニケーション力をあげていた学生が多かったことも、この検証結果の補足として触れておきたい。

表 6. 体育会学生群と一般学生群との比較（協調的問題解決力）** $p<0.01$, * $p<0.05$,

		体育会学生群	一般学生群	p値	
挑戦する経験	平均順位	1176.0	1106.0	0.0342	*
続ける経験	平均順位	1205.7	1103.0	0.0020	**
ストレスに対処する経験	平均順位	1179.0	1104.5	0.0241	*
多様性を受容する経験	平均順位	1132.2	1120.5	0.7246	
関係性を築く経験	平均順位	1242.3	1089.6	0.0000	**
議論する経験	平均順位	1215.2	1096.5	0.0003	**
課題を設定する経験	平均順位	1144.5	1124.1	0.5378	
解決策を立案する経験	平均順位	1156.7	1111.9	0.1743	
実行・検証する経験	平均順位	1234.3	1091.4	0.0000	**

8. 考察

入学直後の体育会学生の学びの意識・行動と協調的問題解決力について整理すると次のこ

とが明らかとなった。

第一に、学びの意識については、体育会学生は一般学生より大学の学びに価値を感じておらず、学びに打ち込む決意や意思を持ち合わせていない傾向が確認された。これらの傾向は、体育会学生の大学生活における最大のモチベーションが部活動である一方で、大学で学ぶ目的が不明瞭なままで入学していることが影響していると考えられる。また、卒業後にプロや社会人で競技を続けず、一般学生と同じような進路を検討している学生が半数程度占めている状況からも、部活動と大学での学びのモチベーションをつないでいくプログラムの実施やカリキュラム開発が求められよう。なお、主体的に学ぶ心構えや、卒業までの学びの見通しや自己の成長イメージ、新しいことへの学びの積極性、周囲との交流への意欲について有意差はみられなかった。

第二に、学びへの行動については、体育会学生と一般学生で有意差はみられなかった。予習復習や興味関心をもって自主的に学習することなど、望ましい学習習慣や学習態度の育成については、体育会学生を対象というより、全学的な対応や別の視点での施策が必要であるように思える。

第三に、協調的問題解決力については、体育会学生は一般学生より、物事に挑戦する経験や、困難に耐えながら目標を達成するために粘り強く行動する経験を有している傾向がみられた。また、他者とのコミュニケーションやディスカッションを通じて関係性を築く経験や、チームで決定したことを実行する経験を有していることがわかった。先行調査や先の集計結果からも部活動によりチームワークや対人スキルが身についたということが判明しており、入学直後においても高校までの部活経験が上記のような能力を高めていることが伺える。

なお、本研究は単一大学かつ単年度で、入学直後の新入生を対象とした調査であり、所属部活により傾向が異なることが考えられるため、今後はより多面的な分析が必要である。

9. 体育会学生のカリキュラム開発に向けて

杉原・奈良（2015）と今回の調査結果を踏まえて、体育会学生の傾向として将来に向けたキャリア形成や、部活動経験によるチームワークやコミュニケーションスキルなど優れた資質を有しているが、大学の学びのモチベーションや行動に結びついていないことが確認された。

また、第22回 Kotoken Coffee Hour（2016年8月25日開催）では体育会学生の支援について、現職の教職員との意見交換を行い、アンケートを実施した結果、主な意見として次のような回答を得ている。

- ・体育会学生向けの全学的な教育課程の構築。（スポーツインスティテュートなど）
- ・学習にかける時間の確保が難しいのは明確なので、大学としてどうマネジメントするか。枠をつくらないといけないと思う。
- ・各教学窓口での個別指導支援。（入学直後のオリエンテーション時）
- ・競技技術だけでなく、競技知識やトレーナーとして活かせる教育が施せるようなプログラムが必要。
- ・総合大学の強みを活かして看護学部や栄養学部などとの連携も視野に入れたらどうか。
- ・入試や募集活動との兼ね合いを考えて議論をすべき。

このように体育会学生向けの教育支援の必要性が見られる一方で、入試や募集活動などにも配慮が必要という意見もあり、取り組まなければならないことは多いように思える。

大学スポーツを取り巻く環境が急速に変化している状況で、体育会学生への支援の重要性はより高まることが想定される。その中で、体育会学生が大学の学びに価値を見出し、積極的な学習行動に向かわせるために、体育会学生に焦点をあわせたカリキュラム開発が必要となるであろう。そのためには、大学で学ぶことで体育会学生がどのような人材に育ってほしいかをポリシーとして定め、学習到達目標を明確にすることが重要であろう。また、部活動など正課外活動においても PBL（Problem Based Learning）のような教育効果が見込まれる設計を意識することが求められよう。体育会学生のカリキュラム開発については引き続き検討を進めていきたい。

文献

- 伊東克・北徹朗・高橋宗良・西垣景太・重藤誠市朗・小林勝法, 2016, 運動部学生の修学に対する学生競技連盟の取り組みに関する調査報告, 大学体育 No106, pp60-63
- 木内敦詞, 2012, 大学期に所属する課外活動団体の種類とライフスキルの関係(ラウンドテーブル 学生アスリートのライフスキルと学業・学習支援), 大学教育学会誌第34巻第2号, pp77-78
- 清宮孝文・依田充代, 2014, 体育大学生の大学生生活不安に関する研究: 大学の学生に対するマネジメントに着目して, 日本スポーツマネジメント学会第7回大会号, pp39-40
- 経済産業省, 2016, スポーツ未来開拓会議中間報告～スポーツ産業ビジョンの策定に向けて～
- 島本好平・石井源信, 2006, 大学生における日常生活スキル尺度の開発, 教育心理学研究 54, pp211-221
- 杉原亨・奈良堂史, 2015, 体育会学生の学習動機

- とキャリア形成に関する一考察, 関東学院大学高等教育研究・開発センター年報第1号, pp19-29
- 全国大学体育会連合, 2015, スポーツ・クラブ統括組織と学修支援・キャリア支援に関する調査結果ダイジェスト
- 同志社大学学習支援・教育開発センターレポート, 2015, FD 支援部会活動報告, 2015. 3 vol. 22
- 土屋純, 2016, 大学スポーツに対する早稲田大学の取り組み-早稲田アスリートプログラム(WAP) -, 大学スポーツの振興に関する検討会議(第1回)配布資料
- 長倉富貴, 2011, 学生アスリートの学習支援について～山梨学院大学とアメリカの大学の事例～, 山梨学院大学経営情報学論集 17, pp109-112
- 日本スポーツ振興センター, 2014, 「デュアルキャリアに関する調査研究」報告書, 平成 25 年度文部科学省委託事業
- 文部科学省, 2011, スポーツ基本法
- 文部科学省, 2012, スポーツ基本計画
- 文部科学省, 2016, 大学スポーツの振興に関する検討会議中間取りまとめ～大学のスポーツの価値の向上に向けて～
- ラーニングバリュー, 2015, 2014 年度関東学院大学リーダーズキャンプアンケート集計結果報告書
- Whiter, Phillip A, Evaluation of a Study Skills Program for Student-Athletes, paper presented at the Annual Meeting of the National Association of Academic Advisors for Athletes(Nashville, TN, January6-9, 1988)

体育会学生の学習意識・行動や協調的問題解決力に関する考察
-カリキュラム開発に向けて-

杉原 亨 奈良 堂史

Learning Motivation and Performance, and Collaborative Problem Solving Skills of
College Students Participating in Sports

Toru Sugihara Takashi Nara

【実践報告】大学間連携による FD 活動の推進を通じた教育の質向上に向けて ー横浜市内 3 大学の連携による取り組みー

曾根 健吾

(横浜国立大学高大接続・全学教育推進センター)

1. はじめに

2008 年の大学設置基準の改訂によって FD (Faculty Development) 活動の実施が各大学で義務化されて以降、各大学において教育の質向上に向けて様々な取り組みが行われている。具体的には、教員を対象にした研修会の開催、教員同士の授業の相互参観、授業評価アンケートの実施などが挙げられる。一部の大学では、学生の声、意見をより反映させようと学生を FD 活動に参加させ教員、学生、職員の協働による取り組みを進めている大学も見られている。FD 活動の実施が義務化され、多くの大学が教育の質向上、その為の教学改革に取り組む中で、2012 年 8 月には、中央教育審議会より「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」(以下、質的転換答申)を発表された。この質的転換答申では、学士課程答申に挙げられている学士力の育成が重要課題であると言及し、そのために学生の思考力や判断力を引き出し、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育の保証という、学士課程の質的転換の必要性、主体的な学びの確立の重要性に言及している。大学教育がユニバーサル・アクセス時代にある今日、さらなる FD 活動の充実を通して学生の主体的な学びの確立、学生の学修意欲の喚起に向けた教育改善に取り組むことが急務になっていると言えよう。

FD 活動そのものは各大学における授業、教育の質向上をめざして行われる活動であるが、FD 活動の範疇は拡大しており、大学間で連携して FD 活動の進化、拡充に取り組んでいる事例も見られる。具体的には、比較的規模の大きなものとして中規模以上の私立大学が加盟し実践的な FD プロ

グラムを共同で開発し実施している「全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF)」, FD に関する地域連携拠点をめざす互助組織である「関西地区 FD 連絡協議会」, 東日本広域圏の国公立の大学等が連携する「FD ネットワーク"つばさ"」などが挙げられる。また、規模の小さなものとしては法政大学、立教大学、青山学院大学、東洋大学、國學院大学の 5 校が連携し FD 活動の発展を図る「関東圏 FD 連絡会」が挙げられる。FD 活動の範疇が拡大する中で、1 大学だけでは解決できない課題も増えており、大学間で FD 活動において連携することは、教職員の視野を広げ相互刺激の機会として有益な機会になると考えられる。

こうした中で、横浜市内にメインキャンパスを置く神奈川大学、関東学院大学、横浜国立大学(以下、横浜市内 3 大学)の FD 活動を担当する各センター(神奈川大学教育支援センター、関東学院大学高等教育研究・開発センター、横浜国立大学大学教育総合センター(現高大接続・全学教育推進センター))は、平成 26 年度より担当教職員間の情報交換をはじめており、平成 27 年 12 月には FD 活動の連携に関する包括協定を締結し、連携して FD 活動の充実を通して教育の質向上に取り組んでいくこととなった。本稿においては、横浜市内 3 大学における FD 活動の連携の目的、概要を紹介し、今後の展望を報告する。

2. 連携の経緯と目的

横浜市内 3 大学の FD 活動の連携は、平成 26 年 7 月に神奈川大学からの呼びかけで情報交換会を開催したところから大きく発展してきた。翌年の平成 27 年 7 月にも横浜国立大学を会場として「平成 27 年度 FD 活動状況連絡会」を開催し、各大学における FD 活動の状況報告や意見、情報交換の

場を設けた。同年 12 月には「第 1 回 3 大学合同 FD 懇談会」を各大学教職員を対象として開催し、横浜市内 3 大学がそれぞれテーマを設定してグループディスカッション形式で意見交換を行っている。また、FD 活動王道状況連絡会や合同 FD 懇談会といった、横浜市内 3 大学の関係者が集う場を設けることだけでなく、横浜市内 3 大学の各センターが開催する研修会への相互参加も行っている。このような取り組みと並行して、FD 活動における包括協定における準備を進めてきており、平成 27 年 12 月に調印式を開催して包括協定書の調印に至っている。包括協定の締結にあたっては、協定書の文面を協議し連携の目的を FD 活動について、それぞれの大学のリソースを活用しあい相互に協力、連携することで、教育・研究の質向上及び学生の学びの質向上に資することとした。そしてこの目的を達成するために、それぞれの大学の特色を生かして相互の連携を図ること、連携の目的を達成するために定期的な意見、情報交換を行うこと、それぞれの大学の FD 活動の活性化に向けて積極的な協力を行うこととした。また、具体的な連携による取り組みの内容は、三者の協議において決定することとした。

平成 28 年度は、平成 26 年度、27 年度に引き続き、会場を関東学院大学として 6 月に「平成 28 年度 FD 活動合同連絡会」を開催しており、平成 27 年度の取り組みをベースとして共同主催事業ヨコハマ FD フォーラムの開催、各大学で開催する研修会への相互参加、積極的な情報発信を行う予定としている。なお、連携における毎年度の取り

組みは、これまでの取り組み、各大学からの提案を踏まえて協議の上決定することとしている。

3. 共同主催事業「ヨコハマ FD フォーラム」の開催

これまで述べてきた通り、横浜市内 3 大学の FD 活動を担当する教職員間で各大学における取り組みや状況などの情報交換、交流を積極的に行ってきたが、平成 28 年 2 月に横浜市内 3 大学の共同主催事業として「ヨコハマ FD フォーラム'16」（以下、フォーラム）を、神奈川大学横浜キャンパスを会場として開催した。共同主催事業としての、横浜市内 3 大学関係者以外も対象としたフォーラムの開催は初めての試みである。

フォーラムの特徴としては、次の 3 点挙げられる。

1 点目として、フォーラムの会場は神奈川大学横浜キャンパスであったが、フォーラム自体は 3 大学が共同主催であり、共同でフォーラムの企画、準備、運営にあたったことである。これには、各大学から FD 活動や教育改革において現状の抱えている課題や扱いたい内容を踏まえてアイディアをもちより、フォーラムの企画内容の質を高めることを大きなねらいとしたものである。なお大学コンソーシアム京都が毎年開催している「FD フォーラム」の運営と企画検討を参考として、表 1 の通り企画検討ワーキンググループを立ち上げ、横浜市内 3 大学の各センターから委員を選出し企画内容について調整と議論を行った。

表 1 ヨコハマ FD フォーラム'16 企画検討ワーキンググループ委員（※所属・役職は開催当時のもの）

委員長	齋藤 隆弘	神奈川大学副学長・教育支援センター所長
副委員長	上野 誠也	横浜国立大学大学教育総合センターFD 推進部門長
委員	旭 馨	神奈川大学教育支援センター事務部次長
委員	杉原 亨	関東学院大学高等教育研究・開発センター講師
委員	千葉 隆行	関東学院大学高等教育研究・開発センター企画課課長
委員	曾根 健吾	横浜国立大学大学教育総合センター助手

特徴の 2 点目として、フォーラムの名称に「ヨコハマ」と入っている通り、3 大学がメインキャン

パスを置く横浜という立地を打ち出して企画内容にも取り入れたことである。横浜という地は、

開港都市であり、文明開化の地であり、長い歴史を持つ都市である。人口も多く、横浜に本拠地を置くプロスポーツチームも多い。その横浜に位置するというロケーションを、フォーラムの企画に取り入れ、横浜市内、そして神奈川県内大学のFD活動の活性化と教職員の交流促進を促そうとした。

3点目に、教員、学生、職員の三者連携を意識し取り入れた企画内容としたことである。近年、教職協働という概念が拡大し、学生参画型FD活動による取り組みなど教員・職員・学生の三者協働の取り組みも見られるようになっている。横浜市内3大学においても、神奈川大学では、学生有志によって構成される学生UD委員会が存在し、大学を活性化させる活動に教職員と連携しながら取り組んでいる。横浜国立大学においては、大学教育総合センターFD推進部（現 高大接続・全学教育推進センター）の下部組織として教育改善学生スタッフ（学生FDスタッフ）制度が設けられており、教育改善学生スタッフは学生目線による教育改善に教職員と連携しながら取り組んでいる。関東学院大学においても、教員、職員、学生の連携について検討が始まる動きが見られ、フォーラムの開催前には筆者が関東学院大学 KGU 高等教育セミナーにて、「大学を活性化させる学生の参加と協働—学生の学び、学生生活の充実のために—」をテーマに講演を行っている。こうした背景を活かして、教員、職員、学生の3者による協働について理解を深め、学びの主役である学生の視点を反映させようと、フォーラムのパネルディスカッションでは、筆者がモデレーターを務め、横浜市内3大学の教員、学生、職員の3者が登壇した。

なお第1回のフォーラムのテーマは、「学生の学びのモチベーションを高める大学教育—学びのやる気スイッチの入るとき—」とした。これは、企画検討ワーキンググループにおいてテーマを検討した際、横浜市内3大学共通の課題、フォーラムに学生も参加しやすいテーマを検討したところ、学生の学びのモチベーションをどう高めて

いくかが課題であるということになり、今回のテーマとすることとなった。当日は、73名（学生10名・教員26名・職員25名・その他（企業等）12名）の参加があった。プログラムは三部構成となっており、流れは以下の通りである。

第Ⅰ部の基調講演には、横浜マリノス株式会社チーム統括本部育成ダイレクターの小池直文氏を招聘し「選手が伸びる瞬間—サッカー指導の現場から—」というタイトルで講演をいただいた。これまで、高等教育、FDに関するフォーラムでは多くの場合、著名な高等教育研究者が基調講演をするケースが多かったが、ヨコハマFDフォーラムでは文字通り横浜という地を活かして大学とも積極的に連携されている横浜Fマリノスに協力をいただき、視点を変えてスポーツ選手育成の現場から示唆をいただいた。

第Ⅱ部のパネルディスカッションでは、「学びのやる気スイッチが入るとき—学生、教員、職員それぞれの立場から—」をテーマに横浜市内3大学から教員1名、職員1名、学生3名が登壇し、参加者同士のペアワークも挟みつつ、学びのやる気スイッチが入るときはどのような時か、学びのやる気スイッチを入れるために教職員がすべきことは何かについて意見表明を行った。

最後の第Ⅲ部では、教員、職員、学生、一般の参加者混合のグループを編成し、「学びのやる気スイッチを入れるために—私たちからの提案—」をテーマにグループワークを行った。

終了後の参加者からのアンケートでは、おおむね好評であった。特にパネルディスカッションでは、「学生さんが登壇されていたのがとても良かった」、「教職学協働、良いパネルだった」という声が多く聞かれ、教員、職員、学生の3者の登壇が好評であったことが窺えた。また、全体的な感想として「近隣大学かつ国私立混合で共催なのが面白かった」「定期的にこのようなFDフォーラムがあるとありがたい」といった声もあった。次回開催に向けては、さらなる周知に努め横浜市内、神奈川県内大学からの参加教職員、学生を増やし、特に学生の視点をさらに反映させていくことが

課題である。

4. 今後の展望

本報告においては、横浜市内3大学におけるFD活動の連携の経緯と目的、共同主催事業ヨコハマFDフォーラムの開催といったこれまでの取り組みを述べてきた。

横浜市内3大学のFD活動における連携は平成26年度から本格的に始まったものであり、平成28年度で3年目となり発展途上の段階にある。今後、更なる深化と発展が望まれるが本稿のまとめとして、連携の意義と今後に向けての課題を以下に整理する。

この連携の意義としては、次の点が挙げられる。

1 点目は、各大学のセンターの教職員間の交流によって、教職員を元気づけることである。各センターが抱える業務は、FD活動やIR (Institutional Research)、学生の学修支援、教学改革支援など多岐にわたる。多岐にわたり、全学に関わる業務であるが故に苦心することや大変なことも多い。同じ業務に向き合う関係者の交流を通して、悩みや課題を共有し明日からまた頑張っていこうと元気づけ合うことに大きな意義があると考えられる。

2 点目は、相互リソースの活用である。各大学のセンターともに、所掌する業務は多岐にわたるがヒューマンパワーや予算は限られている。研修会の相互参加や講師派遣といった連携は行っているが、それぞれの大学のニーズに合わせて各大学がもつリソースを活用しあうことも大きな意義の一つである。

一方、今後の課題としては次の点が挙げられる。

1 点目として、本連携による取り組みを担当する各センターの教職員の異動や転出によって停

滞することのないように、属人的な連携としないことである。現状、連携における活動は横浜市内3大学各センターの担当教職員の熱意と尽力があって成立している部分が多い。しかしそれでは、担当教職員が異動や転出した際に継続性に不安が残る。継続的かつ連携を深化させていく上でも、各大学において連携の意義と目的がより理解され、学内にフィードバックできるよう、ヨコハマFDフォーラムなどの連携の取り組みに多くの教職員を巻き込むことが重要であると考えられる。

2 点目として、連携の成果を各大学にフィードバックし、活用することである。連携の目的は、教育・研究の質向上及び学生の学びの質向上に資することである。本連携で得られた知見を、各大学で活用し学内関係者にフィードバックすることが目的達成のために重要なことであり、連携の理解促進にも繋がると思われる。

3 点目は、横浜市内、そして神奈川県内にキャンパスを置く大学との連携である。包括連携はそれぞれの大学のリソースを活用しあい相互に協力、連携することで、教育・研究の質向上及び学生の学びの質向上に資することを目的としているが、神奈川県内の大学のFD活動は総合的に見て盛んであるとは言いがたい状況であると思われる。西高東低と言われ西日本の大学が比較的盛んであると言われることがあるが、神奈川県内の各大学との連携を通して、FD活動の活性化に努めることも今後の検討課題である。

謝辞

横浜市内3大学の各センターにおいて、FD活動の連携に尽力いただいている関係各位に心から感謝の意を表したい。

【実践報告】大学間連携による FD 活動の推進を通じた教育の質向上に向けて
— 横浜市内 3 大学の連携による取り組み —

曾根 健吾

(横浜国立大学高大接続・全学教育推進センター)

Enhancing the quality of education via Faculty Development taken
through university collaboration

: Collaboration underway by three universities in Yokohama

自校史授業開講へ向けて 2

山田昭子¹ 杉原亨² 千葉隆行³

概要

前回の年報では「自校史授業開講へ向けて 1」と題し、2014年度より開始した自校史教育プログラムの研究・開発の報告と今後の展望について述べた。本年は引き続き、自校史授業開講へ向けた取り組みの進捗状況を報告するとともに、「KGU キャリアデザイン基礎 I」内で行った自校史にまつわるアンケートをもとに、在学生の本学に対する意識について考察していきたい。

1. 2016年の取り組み

本年度は、他大学訪問として、1月21日に関西学院大学を、22日に追手門学院大学を訪問し、自校史教育の取材を行った。そこでは「授業で使用している教材」「授業の展開(内容)」「学生の反応」の三方面から取材を行い、6月に入ってからには実際に授業を見学するため再び両大学を訪問した。

関西学院大学では(6月20日訪問)、『「関学」学1』<1960年代後半-1980年「廃校か否か」から再生へ>という回の授業を見学、追手門学院大学では(7月8日に訪問)、追手門UI論「これぞ私の追手門3～写メで語ろう、追手門」という回の授業を見学した。

いずれの大学も大規模での授業展開、一方は同じくキリスト教系大学という点でいくつかの共通点があり、取材のみではわからない細かな気付きがいくつもあった。

これら両大学授業見学のほか、学外での活動としては、6月8日に早稲田大学で行われ

た「早稲田大学大学史セミナー」に参加した。講演者は寺崎昌男氏(東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授)、「大学アイデンティティーの確認とアーカイブズの充実、そして沿革史の編纂」という演題である。

以前より本学において引き続き行っている自校史教育授業テキスト制作については、目次をほぼ確定し、複数名の執筆者に執筆依頼をし、準備を進めている段階であるが、もともと本学では一年生春学期登録必須科目

「KGU キャリアデザイン入門」全15回のうち2回分を「建学の精神・自校史」として自校史教育に充てていた。そこで共通して使用するテキストがなかったことから共通テキスト作成の話が出されたわけであるが、本学に通う学生達は現在、どのような意識を持って学生生活を送っているのだろうか。そもそも自校史教育というものに対し、学生達はどの程度関心を抱き、必要性を感じているのか、そうしたことを把握しておくことは、今後の自校史授業開講に大きく役立ち、また開講後

¹ 本学高等教育研究・開発センター研究員

² 同センター専任講師

³ 同センター企画課長

の学生の意識調査の際にも実体を知る一助となることだろう。本稿では、以下アンケートデータに基づき、学生の自校史教育に関する意識調査について考察していきたい。

2. 調査概要

今回考察に用いたデータは、本学実施の選択科目「KGU キャリアデザイン基礎Ⅰ」(秋学期開講)を受講する学生 100 名(一年生 78 人、二年生 22 人)を対象としたアンケートによるものである。実施時期は 2015 年 12 月、「大学生基礎力レポートⅡ」(ベネッセ i キャリア開発)の自由設問のうち五問を自校史教育に関する設問に充てている。

設問内容は以下の五問である。

- ①自分の大学の歴史を知ることが大切だと思いますか。
- ②以下の中で知っている人名の数を 1～5 の番号の中から選んでください(名前を聞いたことがある、も含む)。
- ③自分の大学に対して誇りや愛着を抱いていますか。
- ④あなたにとって「誇れる大学」とはどのような大学ですか。
- ⑤あなたの考える「愛校心を表現する方法」を選んでください。

以下、これら五問に関し単純集計による分析結果を考察していく。

3. 単純集計による分析結果

- ①自分の大学の歴史を知ることが大切だと思いますか。最もあてはまるものを 1 つ選んでください。

1. 大切であると思うし、興味がある(11 名、11.0%)
2. 大切ではないと思うが、興味はある(8

名、8.0%)

3. 大切であると思うが、興味はない(64 名、64.0%)
4. 大切ではないと思うし、興味もない(15 名、15.0%)

これは自校史教育(授業)という名称になじみがない学生に、自校史教育で多く取り上げられる内容である「自分の大学の歴史」を学ぶことの必要性を問うものである。

最も多かった回答は「大切であると思うが、興味はない」で、64%であった。この設問は自校教育(授業)の重要性と興味の二方面から学生の意識を探るものであるが、重要性に関しては 75%近くの学生が感じていることがわかる。しかし一方でその興味に関しては二割近くの学生しか関心を抱いておらず、興味がある、ないに関わらずその重要性は認めている学生が多いことがわかる。

- ②以下の中で知っている人名の数を 1～5 の番号の中から選んでください(名前を聞いたことがある、も含む)。

A.A.ベンネット、ネイサン・ブラウン、渡瀬寅次郎、アーネスト・W・クレメント、ヘンリー・タッピング、チャールズ・B・テンネー、坂田祐、ヘンリー・C・メービー

1. 0 人(26 名、26.0%)
2. 1～2 人(53 名、53.0%)
3. 3～4 人(17 名、17.0%)
4. 5～6 人(1 名、1.0%)
5. 7～8 人(0 名、0.0%)

本問では、大学の創設または歴史に関わった人物を挙げ、知っている人数を問うという

ものである。最も多い回答数が1～2人を選んだ学生であった。約半数である。前述の通り、「KGU キャリアデザイン入門」の中の見学の精神・自校史回(二時間)でこれらの名前を聞いた学生もいるであろうし、中には小学校、中学校から関東学院に在籍している学生もいるため、聞きなじみがあり人数としては妥当であるといえるだろう。しかし、本学内には「ベンネットホール」や図書館の創設者にまつわる資料を集めた「学院史コーナー」などがあり、日常的に名前を目にする機会はあるはずである。そう考えると知っている人数が0人であると選んだ26人(26%)の学生の割合は少なくないと言ってもよいだろう。

③自分の大学に対して誇りや愛着を抱いていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

1. とても抱いている(8名、8.0%)
2. やや抱いている(34名、34.0%)
3. あまり抱いていない(40名、40.0%)
4. まったく抱いていない(16名、16.0%)

本問は自分の大学について誇りや愛着を抱いているかどうかを問うものである。自校史教育で自分の大学について学び、知ることには、学生の大学に対する誇りや愛着を育むことにつながるといえる。現に、多くの大学の事例を見てもわかる通り、自校史授業を行っている大学が実施したアンケートによると、自分の大学について知ったことで、愛着が生まれた例も少なくない⁴。しかし、本格的な自校史授業が開始していない現時点において学生達は自分達の大学に対しどの程度親しみを

抱いているのだろうか。この問いについて考えることは、のちに自校史授業が開始した際、授業の前後で効果を見るうえで有効になると考えられる。

その結果として、大きく分けて「抱いている」グループと「抱いていない」グループとに分けて見た場合、「抱いていない」グループが半数を超えるという結果になった。誇りや愛着が、在学中の帰属意識につながることはもちろん、それらの低下が大学生活へのモチベーションの低下につながる可能性もあり、これらは決して見逃すことのできない数値である。この結果の背景には、自分の大学について十分な知識を得ることをしないまま、大学生活を送る学生の姿も見え隠れする。そうした学生たちに広く大学について知ってもらうという意味でも自校史授業の開講意義があるわけであるが、では、そもそも学生たちが誇りや愛着を抱くに至るような「誇れる大学」の姿とはどのような大学であろうか。次の問いの結果を見てみたい。

④あなたにとって「誇れる大学」とはどのような大学ですか。最もあてはまるものを1つ選んでください。※「選択肢にない」「わからない」場合は空欄にしてください。

1. カリキュラムや学び方に魅力、特色がある(少人数教育・語学教育・実学重視など)(20名、20.0%)
2. 魅力的な教職員がいる(7名、7.0%)
3. クラブ、サークル活動、部活動が盛んである(13名、13.0%)
4. 就職に有利、就職支援が充実している(22名、22.0%)

⁴小宮山道夫「大学生の自校史教育受講に対する期待と需要に関する考察」(「広島大学文書館紀要」2011年3月)他。

5. 歴史、伝統がある(7名、7.0%)
6. キャンパスの立地や周辺の環境がよい(7名、7.0%)
7. 著名な卒業生がいる(2名、2.0%)
8. 偏差値が高い(19名、19.0%)
9. 宗教に基づいた大学である(0名、0.0%)
(無回答3名、3.0%)

学生にとっての「誇れる大学」についていくつかの項目に分けて調査した結果、最も上位であったのが「就職に有利、就職支援が充実している」(22%)であり、僅差で「カリキュラムや学び方に魅力、特色がある(少人数教育・語学教育・実学重視など)」(20%)、「偏差値が高い」(19%)が挙げられた。「クラブ、サークル活動、部活動が盛んである」も13.0%を占め、歴史や伝統(7%)、著名な卒業生(2%)は主要な要因ではなかった。

では「誇り」や「愛着」「愛校心」といった抽象的な概念を、学生たちはどのような行動と結びつけて考えているのか。次の問いを見てみることにする。

⑤あなたの考える「愛校心を表現する方法」として、最もあてはまるものを1つ選んでください。※「選択肢にない」「わからない」場合は空欄にしてください。

1. スポーツなどの試合の応援に行く(10名、10.0%)
2. 校歌を歌う(4名、4.0%)
3. 学祭などの大学行事に参加する(42名、42.0%)
4. 大学が主催する宗教行事に参加する(4名、4.0%)
5. 卒業後、同窓会やホームカミングデーなどの集まりに参加する(10名、10.0%)

6. 学校の公認グッズを身に付ける(3名、3.0%)
7. 子供や兄弟姉妹などに入学を勧める(1名、1.0%)
8. 寄附をする(0名、0.0%)
9. 自分の活動により大学の名を広める(14名、14.0%)
10. 大学関連のフェイスブック、ツイッターなどに参加、登録する(1名、1.0%)
(無回答11名、11.0%)

これは「愛校心」と具体的な行為がどのように結びついているのかを見るための設問であるが、結果、最も多く割合を占めたのは「学祭などの大学行事に参加する」(42%)であった。次いで「自分の活動により大学の名を広める」といった在学中のみならず卒業後の活動をも視野に入れた行為が挙げられる。一割にしか満たなかったが、「無回答」が占める割合も見逃すことはできない。そもそも「愛校心」というものについて考えたことがなかったり、その言葉の意味を図りかねたりしている学生が含まれることが予想されるからだ。自校史授業のすべての目的が「誇り」や「愛校心」の育成でないことはもちろんだが、多くの部分を占めることが想像でき、そもそも「誇り」や「愛校心」を解することのない学生たちにとって自校史授業がどのような効果をもたらすか、ということは今後の検討課題でもあるだろう。

4. クロス集計による分析結果

前項では、単純集計による、自校史授業と「誇り」や「愛校心」にまつわる調査についてみてきた。次は以下の三つのパターンにわけて学生の意識を細分化し、分析していきたい。

⑤誇りや愛着と歴史を知ることの重要性との関係性

表1 「誇りや愛着」と「歴史を知ることの重要性」とのクロス集計

(人)

自分の大学の歴史を知ることが大切だと思いますか(1つ選択)。					
自分 の大学 の歴史 を知 るこ とが 大 切 だ と 思 い ま す か (1 つ 選 択)	1.大切である と思う、興 味がある	2.大切ではな いと思うが、 興味はある	3.大切である と思うが、興 味はない	4.大切ではな いと思うし、 興味もない	合 計
1.とても抱いて いる	4	2	2	0	8
2.やや抱いて いる	4	1	24	5	34
3.あまり抱いて いない	1	3	31	5	40
4.まったく抱い ていない	2	2	7	5	16
合 計	11	8	64	15	98

表1の中で最も多かったのが、自分の大学に対する「誇りや愛着」を「あまり抱いていない」学生で、自分の大学の歴史を知ることに対し「大切であると思うが、興味はない」学生である。このことから自分たちの中で大学に対する愛着や誇りはそれほど抱いておらず、歴史に関しても興味がない。しかし歴史を知る重要性については認めている学生がもっとも多いといえる。

この中でもっとも積極性が感じられるのは「とても抱いている」かつ「大切であると思うし、興味がある」と回答している学生(4名)であるが、一方で「まったく抱いていない」かつ「大切ではないと思うし興味もない」と回答している学生もそれとほぼ同数(5名)存在することがわかった。

大学に対する誇りや愛着は学生生活のモチベーションを向上させ、ひいては学生の再受験・退学の検討を抑制する可能性が考えられる。次の結果は誇りや愛着と再受験・退学の

検討の関係性を見るものである。

⑥誇りや愛着と再受験・退学の検討

表2 「誇りや愛着」と「再受験・退学の検討」とのクロス集計1

(人)

再受験・退学の検討				
再 受 験 ・ 退 学 の 検 討	1.検討した ことはない	2.以前検討 していたが今 は考えてい ない	3.現在、検討 している	合 計
1.とても抱 いてい る	5	2	0	7
2.やや抱 いてい る	26	6	1	33
3.あまり抱 いてい ない	21	12	3	36
4.まったく抱 いてい ない	4	8	2	14
合 計	56	28	6	90

表3 「誇りや愛着」と「再受験・退学の検討」とのクロス集計2

	再受験・退学 を現在検討し ていない	再受験・退学 を検討してい たが今は考 えていない	再受験・退学 を現在検討し ている
誇りや愛着を 抱いている	31	8	1
誇りや愛着を 抱いていない	25	20	5

大学に対する「誇り」や「愛着」の高さはそれが高ければ高いほど、再受験・退学の検討に結びついていないという結果が出た。「やや抱いている」「あまり抱いていない」学生で、「検討したことはない」学生が全体の半数近くを占めているが、実際のところ、大学に対する愛着の強度とは別のところに再受験・退学のきっかけとなる要素が存在するであろ

うことが予測できる。だが、「再受験・退学を現在検討している」学生6名のうち5名は「誇りや愛校心を抱いていない」グループの学生であり、そう考えると誇りや愛校心の度合いが再受験・退学の検討に結びつく可能性も否定できない。

⑦歴史を知ることの重要性和再受験・退学の検討

表4 「歴史を知ることの重要性」と「再受験・退学の検討」とのクロス集計

(人)

と自分の まです かの へ歴 1史 つを 選 択 し こ と は 大 切 だ	再受験・退学の検討			
	1.検討したことはない	2.以前検討していたが今は考えていない	3.現在、検討している	合 計
1.大切であると思う、興味がある。	6	4	0	10
2.大切ではないと思うが、興味はある	2	4	0	6
3.大切であると思うが、興味はない	42	15	5	62
4.大切ではないと思う、興味もない	6	5	1	12
合 計	56	28	6	90

本問は大学の歴史を知ること、つまり自分の大学に関する興味関心の度合いと再受験・退学の検討がどう関係するかを見るものである。ここで注目すべきは、現在再受験・退学の検討をしている学生は皆歴史を知ることに対し興味がないということである。これは再受験・退学を考えているから興味がないのか、興味がなくなった結果再受験・退学を検討しはじめたのかは不明だが、いずれにせよこれまで授業として一定期間歴史を学ぶ機会がなかったこうした学生たちにこそ自校教育の効果がどう現れるかが注目されよう。

5. 考察結果

以上、五つの問いを用いて学生の本学に対する意識調査の結果を考察してきた。単純集計からは自分の大学の歴史を知ることについては「大切であると思うが、興味はない」学生が大半であることがわかった。実際、本学の歴史に関わる人物名の認知度を調べた結果を見ても興味関心の低さが伺えるだろう。愛着や誇りに対しては大きく分けて「抱いている」グループと「抱いていない」グループとに分けて見た場合、「抱いていない」グループが半数を超えるという結果になった。

学生達を考える誇れる大学の姿とは「就職に有利、就職支援が充実している」、「カリキュラムや学び方に魅力、特色がある(少人数教育・語学教育・実学重視など)」などが挙げた。「愛校心」を表す行為に関する設問では、「学祭などの大学行事に参加する」といったような参加型の行為を「愛校心」に読み替えていると同時に「自分の活動により大学の名を広める」といった、帰属していた団体に帰属員の一人である自分がどのように寄与できるかを示す行いも「愛校心」に読み替えていることがわかった。

クロス集計の結果からは自分たちの中で大学に対する親しみはそれほど抱いていないながらも、歴史を知る重要性については認めている学生が多いということがわかったが、同時に、大学に対する愛着の強度とは別のところに再受験・退学のきっかけとなる要素が存在するであろうことも可能性として浮かび上がってきた。興味の有無と再受験・退学の検討の関係については、興味の有無というよりも、自分の大学の歴史を知るといふ行為の大切さを認識しているかどうかのほうが再受験・退学の検討有無に影響しているといえよう。

以上、一年生を対象に本学に対する意識について考察してきた。本サンプルは限られた人数、

範囲内の限定的なデータではあるが、これらの結果は自校史授業を開始するにあたって、開始前の学生達の意識について把握するうえで非常に重要なデータとなるであろう。今後は自校史授業開講に向けてテキスト完成に努め、併せて経年データを蓄積し、引き続き学生の意識について考察を続けていきたい。

自校史授業開講へ向けて

山田昭子 杉原亨 千葉隆行

Setting Up the Course, “The Chronicles of Kanto Gakuin University” :Progress Report
Vol.1

Akiko Yamada Toru Sugihara Takayuki Chiba

講演会・講演録

アクティブラーニングの実質化に向けて

立命館大学教育開発推進機構
川那部隆司

本日の流れ

1. アクティブラーニングとは？
 - ・ アクティブラーニングの定義
 - ・ なぜアクティブラーニングか？
2. 授業にアクティブラーニングを取り入れる
 - ・ 双方向性を高める工夫
 - ・ 評価の方法
3. アクティブラーニング型授業の質を高める

アクティブラーニングという言葉聞いて、何を思い浮かべますか？

思い浮かんだもの5つを書き出して、隣の人と共有してください。

1	
2	
3	
4	
5	

「聴く」以外の学習活動

ディスカッション

- ・ 聴く＋考える＋説明する＋質問する

PBL等のグループ活動

- ・ 聴く＋考える＋説明する＋質問する＋調べる＋発表する

能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う（溝上, 2014）

自己紹介

2011年～ 立命館大学教育開発推進機構 講師

2013年～ " 准教授

専門：教育心理学、発達心理学、認知心理学

教育開発推進機構での業務

- ・ 各学部の自己点検・評価、教育改善の支援（特にデータに基づく点検・評価と改善支援のためのFD・SD）
- ・ 学習支援（初年次の導入、ライティング）
- ・ ピア・サポート団体への研修等

1. アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングの定義

一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと（溝上, 2014）

他にもさまざまな定義（Bonwell & Eison, 1991; Fink, 2003; 中央教育審議会答申, 2012など）

大雑把に言えば・・・

「聴く」あるいは「聴いて考える」以外の活動のある学習のこと

なぜアクティブラーニングか？

きっかけは、大学進学率の向上＝多様な学力を持った学生の出現

大学における教育の再重視

- ・ 大学は教育・研究機関である
- ・ 大学教員は研究者であると同時に教育者でもある

→「学生を成長させること」にも、しっかりと取り組まなければならない

なぜアクティブラーニングか？

社会からの要請

- ・ 変化の激しい現代社会に適応できる人間の育成

現代＝検索型の知識基盤社会（吉見, 2011）

- ・ ICTの発展に伴い、「知識」の位置づけが変化
- 「知識を持っていること」だけではなく、知識を活用したり、創出したりすることが重要

9

アクティブラーニングとは？

「聴く」以外の活動を含んでいる

- ・ 特に、自らの思考の外化を伴っていることが必要
- ・ 書く、話す、発表するなど

これらの活動を通じて、知識を獲得し、さらには得られた知識を活用し、新たな知識を創出する力を学生が身につける

10

2. 授業にアクティブラーニングを取り入れる

11

学生の学習活動の分類

個人の活動	
教室外活動 ・ 読む（教科書/文献/資料/史料） ・ 課題/レポート ・ 情報収集/調べ学習	教室内活動 ・ 知識の習得（講義を聴く） ・ 書く（コメントシート/ワークシート） ・ 読む ・ 問題を解く（演習） ・ 振り返る
集団の活動	
・ グループ学習 ・ フィールドワーク/体験/観察/訪問	・ 話す・聞く（ディスカッション/プレゼンテーション/ディベート） ・ 実験 ・ グループ学習 ・ ピアアセスメント

12

アクティブラーニングの例

一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと

授業終わりの時間を用いたコメントシートの作成や小テストへの解答もアクティブラーニングの一つと言える

13

双方向性を高める実践例

授業の終わりに意見や疑問、感想等を書く

- ・ 大福帳（織田, 1991, 1995）
- ・ 何でも帳（田中, 1997）
- ・ 質問書（田中一, 1999）
- ・ 授業通信（藤田・溝上, 2001）

14

大福帳の例（織田, 1991, 1995）

大福帳

- ・ 授業内容・授業の進め方などに関する感想・要望を書く受講カード
- ・ 授業の終わり5～10分で記入し、授業時間内に提出することを求める
- ・ 回収した一人一人の大福帳に教員が朱書きでコメントをつける
- ・ 次回授業開始時に返却し、内容を確認させる

15

お返事、あるいは、授業のよい悪いを必ず

大 福 帳 199 年度(前期 後期) A

名前:	授業:	曜日:	教室: A B C D E F G H
学年(科室):	期(年):	番 氏名:	
月/日	書きたいこと、聞きたいこと、なんでもあり、の一言板。 おまけの一言板		
No. 1			
No. 2			
No. 3			

織田（1995）, p.11より抜粋

16

授業通信の例（藤田・溝上, 2001）

授業通信：藤の便り

- ・ 授業内容に対する学生からの質問・意見・要望などへの教員の回答を記載した配布用紙
- ・ 授業終了時に記入し、提出を求める
- ・ 代表的な質問・意見・要望とそれらへの回答に加え、授業の出席率、連絡事項、補足説明、アドバイスなどを用紙にまとめる
- ・ 次回授業時に学生に配布する

17

教育心理学		年 月 日	講師名	評価
学 科	生 徒	学 生 番 号	姓 名	
今日の授業について、質問をします。それぞれの質問について、「得意により＝5」、「よい＝4」、「ふつう＝3」、「悪い＝2」、「非常に悪い＝1」として、数字を記入して下さい。				
1.	今日の授業に対する、あなたの参加態度の自己評価			
2.	今日の授業の準備（手紙）の程度の自己評価			
3.	今日の授業に対する、あなたの理解度の自己評価			
4.	今日の授業に関する、あなた自身の総合自己評価			
5.	今日の授業での、僕の話し方			
6.	今日の授業での、僕の気持ち			
7.	今日の授業の、内容（質）			
8.	今日の授業の、情報量（多いか少ないかではなく、面白いという点で）			
9.	今日の授業の、分かりやすさ			
10.	今日の授業内容が、授業役に立つかどうか			
11.	授業内容に興味を持ったか、刺激を受けたか			
12.	その他			
13.	今日の僕の授業の仕方に対する総合評価			
感想・意見・質問など				

藤田・溝上（2001）, p.87より抜粋

18

藤のたより 第5号 教育心理 2001.8.1. 藤田製也

・ 前期（5/25）の出席状況

	A学科	B学科	C学科	D学科	E学科
1期生	17(18)	48(50)	37(42)	17(17)	18(21)
2期生	9(9)	12(12)	7(7)	3(3)	
3期生	1(1)	3(3)	1(1)		

・ 期末試験の予定

今のところ、7月（金）のこの授業時間内に、期試験を行う予定です。場所もこの教室です。その後、13日は授業を行いますので、勝手に休まないように。この日に絶対に試験できないことが分かっている人は、早めに申し出て下さい。試験で欠席した場合は、対応のしようがありません。

「勉強中心ではなく、理解と応用が中心」です。試験形式を予定してあります。一度だけでは対応し切れないので、復習を怠らぬようにして下さい。また、7月（金）の日に欠席などで絶対に試験できないことが分かっている人は、早めに申し出て下さい。連絡先は藤田さん、溝上さん、または各課から相談して下さい。

・ 前期の授業の中で「モリトリアム」という用語を知らないという質問を頂きました。実は結構、思い切った言葉なんです。というは、そう言っても結構そう聞こえるかもしれませんが、みなさんは大学生であり、卒業すれば学生という立場を捨てることになります。卒業生であることの1つの目安です。もちろん、現代では大学は高校の延長のようになってしまっているという意見もありますが、だからといってそれでいいとは思いません。別に、以下に述べるようなことを感じています。もしかしらば感想を聞かぬ。と思いたいながらも、思い切って言いました。

そこで教育心理学の先生、ということばに僕がみなさんに入学の覚悟を促したいのは、「もっ

藤田・溝上（2001）, p.83より抜粋

19

大福帳と授業通信の効果

1. 授業への出席促進
2. 積極的な受講態度の形成
3. 教員と学生との信頼関係の形成
4. 授業内容の理解と学習の定着促進
5. 自己努力・自己変容の過程の確認
6. 授業内容の充実・促進

目指されているのは、授業の双方向性の向上による学生の授業に対する主体的参加

20

主体的な学習者へ

授業の双方向性を高め、学生の授業への主体的な参加を促す

さらに、知識の理解や定着、自己変容の過程の可視化にも効果がある

学生の意見や質問に、教員が回答する？

→自ら調べ、考え、答えを出す主体的な学習者になってもらう必要があるのでは？

21

川那部の実践例

『現代の教育』受講生200～400名

- ・ 2011年度 経営学部
- ・ 2012年度 理工学部、スポーツ健康科学部
- ・ 2013年度 理工学部、スポーツ健康科学部
- ・ 2015年度 経済学部、生命科学部、薬学部

全学年対象の一般教養科目

学生の間では、レポートを出せば単位がもらえる「楽単」として認識されている

22

授業の概要（シラバスより）

本講義では、現代の教育の諸問題について学校・家庭・社会についても視野に入れながら解説を行います。また、一般的な解説だけでなく、実際に教育現場で生じている諸問題についても具体的に取りあげ、理解を深めていくことを目指します。一連の講義を通じて、現代教育における諸問題を他人事としてではなく、自分に関連付けながら理解し、各自の問題意識を高めてもらいたいと思います。

23

授業の到達目標

1. 現代の教育の諸問題について、その背景や原因、検討すべき課題を指摘できる。（知識・理解）
2. 現代の教育の諸問題について、教育学的な視点に基づき、解決策や対処すべき課題に関して自らの意見を述べるができる。（思考・判断）
3. 教育に関して興味関心を持ち、自ら調べ、考える態度を持つ。（関心・意欲・態度）

24

授業での実践

Kノート

- 基本は大福帳等と同じA4判の用紙
- 授業に対する意見・感想・質問等を記入する欄など
- **+授業外での学習成果を記入する欄**
 - 資料や文献にあたり、自分の意見や感想を深めたり、質問の答えを見つける
- 毎回提出ではなく、**複数回の授業（3～4回）に1回提出を求める**

25

講義名	現代の教育				整理番号		QRコード
学部		学科		学年			
学籍番号				名前			
6/13	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
6/20	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
その他何でも						※教員記入欄	

26

講義名	現代の教育				整理番号		QRコード
学部		学科		学年			
学籍番号				名前			
6/13	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
6/20	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
その他何でも						※教員記入欄	

27

講義名	現代の教育				整理番号		QRコード
学部		学科		学年			
学籍番号				名前			
6/13	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
6/20	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
その他何でも						※教員記入欄	

28

講義名	現代の教育				整理番号		QRコード
学部		学科		学年			
学籍番号				名前			
6/13	授業態度	← 悪い	4	3	2	1	自主学習の方法
	興味・関心、疑問を持った点						自主学習の成果 (新たに分かったこと、など)
その他何でも						※教員記入欄	

29

Kノートの活用

成績評価の配分は極めて低く設定

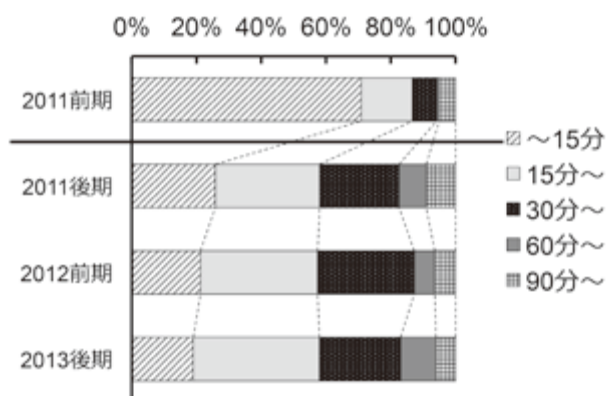
- 1枚のKノートを5点満点で評価
- 全3回提出（満点でも全体の15%）

授業通信等のねらいを付加

- 他の受講生の視点の獲得のために、代表的な意見等を授業者が別紙に要約して配布
- 授業時間内にKノートを回覧・ディスカッションの時間を設ける

30

授業外学習時間の変化



31

学生のコメントから

学習意欲の高まり

- コメント付きで返ってきて嬉しかった
- #### 「考える」姿勢の定着
- 今までの大学生活の中で一番「考える」ということをした気がします。
 - 勉強に関係のないことでも興味を持ったことについては調べ物をしたり、考えるようになりました。

大学での学び方の習得

- 1回生のときに受講したかったです。

32

アクティブラーニングの評価

文章等の形で提出されるものであれば、これまで行われてきた評価方法で対応可能

- ・ 必要な情報が記されているか
- ・ 導き出した回答が正しいかどうか
- ・ 情報同士が正しく（論理的に）関連付けられているか
- ・ 文献が正しく引用されているか など

では、プレゼンテーションやディスカッションはどのように評価するか？

33

ルーブリックへの注目

ルーブリック rubric とは？

- ・ 成果物に求めるものを複数の観点に分け、観点ごとに到達度の段階的な水準を設け、マトリクスで表現したもの
- ・ 成果物の質的な到達度を量的に点数化してアセスメントするためのツール

長期プロジェクトやレポート、研究論文、パフォーマンス課題で使用されることが多い

34

チームワークのルーブリック例

	4	3	2	1
チームの話し合いへの貢献	別の考えや提案の長所を示すことでチームの話し合いを前に進める	他者の考えに基づく解決策や行動計画を提案する	チームの作業を進めるための新たな提案を行う	考えを共有するが、チームの作業は前に進まない
対立への対応	決定的な対立に直接的かつ建設的に取り組み、チーム全体のまとまりや将来的な成功を強化するやり方で、対処あるいは解決する	対立を同定、把握し、その問題に取り組む	共通点や当面の課題に注意を向けなおす（対立からは遠ざかる）	別の視点、考え、意見を消極的に受け入れる

AAC&U Teamwork VALUE Rubricを抜粋して翻訳

35

3. アクティブラーニング型授業の質を高める

36

アクティブラーニングを取り入れる

アクティブラーニングを授業に取り入れる

- ・ 教員に相当の準備や技術が求められるものもあれば、コメントシート等を用いた比較的容易なものもある

どのようなアクティブラーニングをどの程度、どのように取り入れるのかは、授業の目的次第で異なる

37

グループワーク

アクティブラーニングを取り入れた授業を行い、その効果を発揮させるには、解決すべきさまざまな課題を克服する必要がある

2つのよくある事例について、グループで話し合って解決策を考えてください

38

事例1：学生の学習意欲の差

「演習」の授業で・・・

受講生は4～5人で1グループに分かれる。選んだテーマについて調べ学習を行い、最終的にプレゼンテーションを実施する。

グループ内の学生間の学習意欲の差が大きい。そのため、調べ学習やディスカッション、さらにはプレゼンテーションも一部の学生だけが行っており、ほとんど何もしない学生が出てきてしまう。

39

事例2：議論ができない

100名以下の講義中心の授業で・・・

知識を覚えるだけでなく、学生が自分なりの意見を持ち、それを他者に伝えたり、他者の意見を聞く力も身につけさせたい。

授業時間内にペアやグループでのディスカッションの時間を設けてみたところ、学生たちは不真面目なわけではないが、活発な話し合いが行われない。

40

それぞれの事例の解決策を考える

どのような解決策が考えられるか？

- ・ 授業内での工夫
- ・ 当該授業外での支援（ほかの授業や課外プログラム、人的サポート等）

各事例について、問題が生じている原因とその解消方法についてグループで意見を出し合ってください

41

話し合いの進め方（例）

1. （初対面の場合）お互いに自己紹介をして、話し合いの進行役を決める
2. 話し合うべき内容を、グループ全員が理解できているかを確認する
3. 時間を区切り、各自で考える
4. 考えた内容を順番に発表していき、質疑応答を行った上で、もっとも良い意見を選んだり、複数の考えを組み合わせたりして結論を出す

42

アクティブラーニングの質を高める

カリキュラムレベルでアクティブラーニングを取り入れる

特定の事例について、解決策の見出す活動をグループで行わせる（PBLなど）

- ・ 学年進行に伴い、事例をより複雑にしていく
- ・ 他の科目で学んだ知識の活用を必須とするような事例を用意する など

43

アクティブラーニングを促進する

環境の充実

- ・ アクティブラーニング・スタジオやラーニング・コモンズの充実
- ・ ICT環境の整備

人的支援の充実

- ・ 議論のファシリテーションをはじめとする授業内外での相談対応
- ・ 特に、支援を行う学生の育成

44

Chickering & Gamson (1987) p.5

学習とは、観客席に座ってスポーツを見るようなものではない。学生は、授業中ただ座って教員の話聴き、あらかじめパッケージ化された宿題をやって暗記し、質問に答えるだけでは、多くのことを学ばない。学生は学んでいることについて話をし、書き、過去の経験と関連づけ、そして日常に応用しなければならない。さらには、そうしたことを通して、自分自身を学ぶというようにならないといけない。

45

ご清聴ありがとうございました

46

第6回 KGU 高等教育セミナー

「カリキュラムを“可視化”する方法

—マップ・フローチャート・ナンバリング等の一体的理解へ—

講師：佐藤 浩章 氏（大阪大学教育学習支援センター副センター長）

日時：2015 年 11 月 14 日（土）13:00～16:30

会場：金沢八景キャンパス フォーサイト 21 10 階 大会議室

1. カリキュラム・マップとは

今日は最初に、前回のテーマ「三つのポリシー」の話を簡単に振り返ります。今日のメインは約 2 時間の作業になりますが、その作業内容をどのように進めていけばいいのか、併せてご説明したいと思います。マップ作成作業が終わった段階で、教室の中でポスターセッションを行います。他の学部・学科の方がどのようなマップを作られたのかを確認していただきます。最後に振り返りを行い、今後どのようにしていくかを考える形で進めていきたいと思います。

前回は、カリキュラム・マップをなぜ作らなければいけないのか、なぜ外部評価が必要かということで、学士課程教育を体系化させ、質保証をきちんとするために三つのポリシーをつくらうという話が出ていたわけです。

最初にしなければならないのは、関東学院大学がどのような人材を育成するのかという理念や、人材育成の目的を決めることです。これが三角形の頂点であります。しかし 4 年間でここに到達することはできません。

次にディプロマ・ポリシー（DP）の策定です。頂点まで行けないにしても、4 年間でここまでの能力を身につけさせたいと皆さんが考えている能力が幾つか示されたと思いますが、それが DP でした。

真ん中を飛ばして、次はアドミッション・ポリシー（AP）です。4 年間でここまで到達するためには、入り口の段階でこれだけの能力を持たなければならないというのが AP でした。ですから、AP と DP は対応していることになります。

三角形の底辺から中腹部分のラインまで、どのように引き上げていくのか。ここにギャップがあるわけですが、これが学生にとって 4 年間の学びと成長であり、どのようにしてここまで引き上げていくかという設計図を書くことがカリキュラム・ポリシー（CP）です。われわれはこのようなポリシーに基づいてカリキュラムを組み、AP から DP まで引き上げることになります。

ただ、カリキュラムは非常に情報量が多く、AP や DP は文章で書けますが、書くと膨大な量になって、分かりにくくなるので、ここにマップを挟み込んで、より分かりやすくしていきます。今日はこの辺で終わるのですが、その後にもステップがあり、これらが本当にうまくいっているか、学生は力をつけて卒業しているかどうかを確かめるカリキュラム評価のステップが最後に来ます。あとはこれをぐるぐる回していけばカリキュラム上の質保証が完了することになります。

カリキュラム・マップが持っている機能をあらためて理解することは、作業の質にも影

響を与えると思います。実際は、保護者を含めた受験生や高校教員に向けてのプレゼンや、マーケティングツールとして活用することができます。カリキュラムを言語だけで説明することは非常に難しく、しかも高校生にそれを伝えることは難しいわけですが、これが図示化されていることによって、非常に分かりやすく伝えることができます。

しかし、その分、そぎ落とされる情報もたくさんあります。今日マップを作っていたければ分かると思いますが、全てを表現することはできませんから、どこかで表現し切れていないもやもや感が必ず残ることになると思います。従って、誰向けのツールなのかということを作業の中で少し念頭に置いてもいいと思います。受験生、保護者、高校教員に向けて相応しい表現も必要になってくると思います。

学科教員にとっては、カリキュラムの現状と課題を把握するためのマネジメントツールになります。カリキュラムがどのような状態にあるのか、例えば自分の学科でどのような科目が何科目開講されているのか、ご存じの方がどのくらいいるかということです。ワークショップを行うと、わかりますが教員の方はほとんど把握していません。

皆さんのテーブルには、束になった科目シールがあると思います。これが皆さんの学科で開講されている全科目数です。職員の方たちが用意していただきましたが、印刷するのは大変手間だったと思うので、本当に頭の下がる思いです。この後、これを並べていただきますが、恐らく「こんなに科目があったのか」とびっくりすると思います。まず、現状をしっかりと把握するということです。

また、このマップは現役学生にとっても非常に有効なツールとなります。今日学んでいる科目がカリキュラム全体の中でどの位置を占めているのかということが分からないと、今日与えられた課題は分かっている、先生の話していることもよく分かるけれど、何のためにこれを学んでいるのかがよく分からず、テストが終わってしまえばすっかり忘れてしまうことも起きます。

もちろん外部評価者もこれを見るので、その点でも大事なのですが、目の前にいる学生、受験生、そして皆さん自身のためのツールであり、それがきちんと示されているかどうかを外部評価の人は見るわけですから、外部評価ありきでスタートすると、大変つまらない作業になります。

カリキュラムは非常に要素が複雑なので、いろいろな研究者がいろいろな取り組みをしています。東京大学や徳島大学などでは、オンライン上で一つの科目をクリックすると、その科目に関係するものが立体的に出てくるようなシステムを開発しています。面白いツールではありますが、私は使いにくいと思っている面があります。実際に高校生に説明するときに使うのはなかなか難しいと思います。1人で見る分にはいいのですが、複数の人で俯瞰するのは難しいと思います。

私がいろいろな大学で普及させているのは、非常にアナログなものですが、模造紙の上に付箋紙を使って科目名を貼り付けていく方法です。

1-1. 作成手順

今日は次のような手順でやっていただこうと思います。印字は終わっていますので、貼

り付けの作業を最初にしていただきます。今日は付箋の色が4種類あり、色も一つの情報になりますので、必修科目、選択科目の色なども決めてください。これには人手が必要になるので、職員の方もぜひ参加していただければと思います。

その後は模造紙上に科目を並べていきます。付箋なので、何度でも剥がすことができます。どのような構造になっているのかを考えながら並べるのですが、既に履修系統図を持っている建築学部や理工学部はそれを見ながらやってもいいですが、見ながら並べると大抵同じものになってしまいます。せっかくの機会ですので、いったん忘れてゼロからもう一度組み立ててみてください。看護科などは全国的なものがあると思いますが、それを見て行くとそれに引っ張られてしまうので、せっかくの機会を有効に活用していただければと思います。

そのとき、大事なのは科目と科目の関係です。フローチャート型の特徴として時系列を表現することができますし、科目の優先順位なども説明できますので、矢印や囲みを使って図示すると思います。この作業には約2時間かかると思います。その後、ポスター発表をして他の学科の先生たちからフィードバックを受けることになります。

カリキュラム・マップにぜひ入れていただきたい共通要素が三つあります。最初に「〇〇学科カリキュラム・マップ」というタイトルを付けていただき、作成年月日、「第1版」「初版」などの版数を入れて、中身は全てフリーで作ってください。

カリキュラム・マップでは、例えば必修・選択などについて、言葉で説明するのではなく色を使えば、シンプルで上手に図示化して表現することができます。

履修時期は、私の経験では順次性にこだわると結構つまらないものになります。つまり、1年生のときに何を取り、2年生のときに何を取るかということですので、事実を淡々と表現するマップになります。今回はDPとの関係をどのように示せるかということを議論していただければと思います。また、DPとも近いのですが、想定される進路や学習の手引きとなるメッセージなど、学生が見てためになると思うような情報も盛り込んでいただくといいと思います。

1-2. カリキュラム・マップの例

幾つか事例をご紹介します。チェックリスト型というのは、私の前任校の愛媛大学や山口大学が使っていたものです。カリキュラム・マップは一般的にチェックリスト型を想定する先生が多いのですが、縦軸に科目があり、横軸にはDPが並んでいて、どれだけの対応関係になっているのかを示しており、チェックリストの中でも非常にシンプルなものです。

もう少し複雑なものは、それぞれの科目の後ろに科目の到達目標がさらに書かれていて、到達目標ごとにDPとの関係をチェックしていく非常に精度の高いチェックリストもあります。愛媛大学で使っていたのは、到達目標を入れたもので、到達目標ごとにチェックしています。

科目とDPとの関係は、フローチャートで比較的うまく示せる学科と、どうしても示し

にくい学科があります。従って、トライして駄目であれば2枚にする手もあります。DPと科目の到達目標に関してはチェックリストのものを左側に置き、フローチャートはそれ以外の部分を掲げておいて、セットでマップにする方法もあります。この点についてはセンターで方針が検討されているようですが、皆さんも議論されるといいと思います。

愛媛大学理学部の数学科は、学年進行は分かれています、数学や物理は科目数が非常に少なく、多分長い間来変わっていないのではないかと話もあります。ゆえにマップは作りやすく、多くの大学の数学科で大きな違いはないだろうといわれています。

特徴は、当時の理学部は大きく分けると三つのDPを立てていたので、それと色を連動させている点です。上に行けば行くほど高度なDPに対応しています。それから、ゼミ形式の授業では、「発表の仕方を学ぼう」とか、「いろいろな分野を幅広く学びます」と書いてあります。高校生や現役学生に対するメッセージとして読み取ることができます。

このようにするとナンバリングを全く恐れる必要がなく、後で数字をつけていくだけです。マップがない中でナンバリングをすると、ただ持て余しているような形になると思います。

工学部情報工学科は、プロなのでさっと書かれたようえす。皆さんは、この中でどれをそぎ落として、どこに色を付けて強調するかという、情報の取捨選択をする必要があると思います。

左側に学年進行があり、下の方にはソフトウェア、情報システムなどのテーマが並んでいます。理工系の場合はこのような形で説明することもできると思います。

学校教育教員養成課程の中学部のカリキュラム・マップでは、DPが上に掲げられています。最もダイレクトに関係しているのは卒業研究ですが、群ごとに矢印が引かれています。科目とDPの対応関係を一つ一つ示していくことは先ほどのチェックリスト型でやっているの、ここでは群との対応関係を示しています。これぐらいなら皆さんにもできるかもしれません。

法文学部総合政策学科のカリキュラム・マップです。名前に「総合」が付くと、体系的とはほど遠い感じになってしまいましたが、文系にはよくあります。経済系、法律系など、いわば出店方式で、先生方がお店を出して、学生は好きなものを好きなだけ取るような形です。学生によって履修のパターンが違えば、公務員を目指す学生はこのパターン、民間企業を目指す学生はこのパターンなど何種類かのマップが横に並び、学生の履修パターンによって随分変わってくるようなマップになるのではないかと思います。

大阪大学歯学部のカリキュラム・マップは、細かいところは説明しませんが、かなりアクロバティックなことをしています。左側の部分にカリキュラム・マップのチェックリスト型を入れていて、DPとカリキュラムをたくさん掲げて具体的に説明しているのですが、それに対応する科目を右側にフローチャートで書いていて、合体させた形になっています。ナンバリングはマップがきちんと書いていけば難しいことはなく、学年進行でナンバーを

振っていくことになります。

今日はナンバリングの話はしませんが、もともとはアメリカで生まれました。アメリカの学生は短大から四大に編入したりして、どんどん大学を変わっていきます。そのときにナンバリングしておけば、前の大学で学んでいたことがどのレベルのものなのかを事務担当者や教員などが比較しやすくなります。だから、もし関東学院大学の学生があまり他大学に移らなかったり、留学生がほとんど来なかったりすれば、ナンバリングはあまり意味がないと思います。

今後そのような戦略や可能性があるのであればナンバリングをしておけばいいわけですが、マップがきちんとできていれば問題なくできるでしょう。日本もナンバリングするときに、各大学が自分たちオリジナルのシステムをつくってしまうと、あまり意味がありません。恐らく全国で標準の番号の振り方ができてくると思います。

1-3. さまざまなグラフィック表現

パターン①、②などがありますが、皆さんのカリキュラムの形態は学科によって相当違います。「蜂の巣型」「ツリー型」などを雛形として示しているので、見えそうなものがあれば使ってください。

1-4. 構成原理

お絵描きしているだけではないかと思うかもしれませんが、カリキュラム論の大家であるタイラーは「われわれは学習理論に基づいてカリキュラムを作らなければいけない」と言っています。例えば卒業要件が4年間で124単位だとすると、それをコントロールすることになります。それが皆さんのマップ上で示されていることなのです。時間数で言えば5580時間ですが、学生の非常に重要な時間を費やしていることになります。

良いカリキュラム・デザインとは、DPで示された学習目標が達成しやすいデザインだと思います。例えば認知的領域に必要な能力を掲げた学科は、理解しにくい、記憶に残らない、思考が深まらないようなデザインではまずいのです。精神運動的領域では、技能が身につかないデザインになる場合がありますし、情意的領域では、動機が高まらない、学習意欲が沸かないデザインになっている可能性もあります。これは今日、皆さんがマップを作る上で考えていただきたいと思います。

教育学でいわれている学習順序の原理は、出来上がったカリキュラムを見ながら、自分たちのカリキュラムの根底に流れている思想は何かを発見する上で参考になると思います。

カリキュラムは、学科設置の段階で先輩教員の誰かが作って、絵を描いてきたわけです。そのとき適当にさいころを振って決めたわけではないはずで、何らかの思想があって、このような配置になっていると思います。その背景にある思想を見いだせると、「そういうことだったのか」と分かることもあると思います。

私はマップの話をするとき、居酒屋の壁に貼ってあるお品書きをサンプルとしてよく使います。これが学生にとっての履修要項であり、科目が並んでいるのと同じです。

しかし、これには構造があります。このようなお品書きは見たことがないと思いますが、店主の頭の中ではこれが想像されていると思います。時々いきなりおにぎりを頼む人もいますが、あまりそのような頼み方はしません。これは締めであり、最初は刺身などでしょう。初心者は「揚げ物ばかり食ってんじゃないよ」と怒られたりもします。このような構造を頭の中に置きながら、先ほどのお品書きを見て注文するわけです。これはプロフェッショナルな人ならできることですが、全く違う国から来た留学生は、右からずっと頼んでしまったり、安いものだけを頼んでしまったりするわけです。

学生でも全く同じことが起きています。皆さんは学問のプロですから頭の中に入っていますが、履修要項をお品書きのように示してあると、学生はどの科目が重要で、どのようにとっていいのかが分かりません。ですから、もし構造があれば示してあげてください。それがマップです。「履修要項があればいい」と言う人には、そのように説明します。

富士山もサンプルとしてよく使います。地図を持って登ればいいと言う人がいますが、分かりにくい地図を見て登るのは大変です。

一方、地図が分かりやすいと、登ってみようという気になります。今までの大学のカリキュラムは、登りたい人は登って、途中でいなくなる人はいなくなっても仕方がない、迷ったら迷ったままというものでした。しかし、丁寧に説明することで、ドロップアウトする人を少しでも減らしたいわけです。頂上には「日本一の頂に到着！ 夢に見たご来光は最高です」とあります。これが DP や就職先に当たると思います。いろいろな意見があると思いますが、このようなものを示してあげると非常にいいと思います。

2. カリキュラム・マップの作成

それでは、これから作業に移っていただこうと思います。2 時間としますので、適宜休憩を取りながらやっていただければと思います。どうぞ始めてください。

—マップ作成作業—

3. カリキュラム・マップ・ギャラリーツアー

回るときは1人で回らず、同じ学科の同僚2~3人で回ると、自分たちと比較して話ができるので、そのようにツアーを組んで回っていただければと思います。どこのマップを見ても構いませんので、付箋紙とペンを持って、ギャラリーツアーを10分間行ってください。

—ギャラリーツアー—

良いインフォグラフィックの条件は全て受け入れる必要はなくて、ご自身で判断して必要だと思うものは取り入れたらいいと思いますが、これは誤解だというものもあるかもしれないので、その判断もお任せします。

皆さんが考えたマップでどれが一番良いか、私が決めるのを依頼されることもあります。が、全てお断りしています。何が良いカリキュラムかという視点から考えると、何点かチェックできる場所があると思うので説明します。

まず、科目間の内容面での関係性です。カリキュラムの用語で scope といいいます。今回皆さん、DP との関係を努力して表現しようとしたと思いますが、それが明確に表現できているかどうかです。また、目標を達成するに当たり、科目で教える内容が不足していたり欠如していたり、中には「この科目があった方がいいのではないか」と思ったものもあったかもしれません。逆に重複している場合もあり、一緒にしている科目もあったと思います。それから、科目はいろいろなことをばらばらに学んでいるわけではなく、学年が進行するにつれて内容が統合されていくものです。その際たるものが卒業論文や卒業制作などです。最初はばらばらに感じますが、1 年生から学んできたことが全てつながって、最終的にはまとまっていくマップになっているかどうかです。

次に、科目間の縦の関係 (sequence) です。なぜ 1 年生でこの科目を学び、4 年生でこの科目を学ぶのかということにきちんと意味がなければならないのですが、理解・記憶の促進、思考・判断力の深化、反復学習することによる技能の定着、意欲の持続などの目標達成に当たって、効果的な順序になっているかどうかが重要です。場合によっては、入れ替えた方がいいという発見もあったかもしれません。

それから、科目数の適性です。こちらの大学は他大学に比べ、概して科目数が多いと思います。いろいろな理由があると思いますが、カリキュラムは放っておくと自己増殖していきます。他大学でも問題になっているのですが、どんどん増えていくので、教室が足りなくなったり、非常勤講師の数が増えて経費が掛かったりして、どこかで歯止めをかける必要があります。学生がこれだけの科目を自分の中で 4 年間統合するのはかなり大変ですから、もしかしたらそぎ落としてシンプルに絞り込んでいこうと思われた方もいるかもしれません。

また、複雑過ぎる構造は、学習者にとって迷路に入っているような状況になってしまいます。卒業して振り返ったときに、何を学んだのかよく思い出せないような状態にもなります。細かく複雑な構造をもう少し骨太でシンプルな構造にできないかというのも考えてほしいと思います。

最後に、特色・魅力です。今までの部分できちんとできていればいいのですが、さらにこれがあると売りになるというものです。学科としての特徴、カリキュラムの特徴の強みがマップの中に表現できているでしょうか。うまくいけば、『〇〇型教育』『関東学院〇〇学科メソッド』『オリジナル〇〇方式』で育てている」と言えるかもしれません。そこまで持っていければ素晴らしいと思いますが、特徴・魅力の点も考えていただきたいと思います。

お示ししているニュースは、金沢工業大学がカリキュラムを輸出したという記事です。金沢工業大学は、日本でも非常に先進的な教育改革の取り組みをしています。個々の先生の授業の素晴らしさや、学長のマネジメント力の高さもさることながら、カリキュラムが非常に素晴らしいのです。それがベトナムの新設大学にそのまま採用されました。特徴あ

るカリキュラムを作ることができれば、ビジネスにもなるという話です。

4. 振り返り

10分ほど時間を取りますので、今日作業してみて、先ほど他の方から頂いたコメントも踏まえて、ご自身の学科のカリキュラムの強み・課題・問題点はどのようなものがあるか、それから現状のカリキュラムを改定するときにはどのようなことをすべきか、さらに知りたいことやセンターにこのような研修をしてほしいという要望があれば、そのようなことも議論していただきたいと思います。また、学科レベルだけではどうにもならず、学部全体や全学で取り組まなければならないことがあれば、そのことについても話し合っていたいただければと思います。

申し訳ありませんが、各テーブルで1人、書記の役割を果たしていただけると助かります。簡単なメモで構いませんので、議論した内容を記述してください。それでは、この二つの点について話し合いを進めてみてください。

—振り返り—

今日ずっと作業しながら、何かもやもやしてスッキリしないところや、全学的にこのようなことをした方がいいのではないかということ話し合っていました。皆さんの方から何かご質問、ご意見はありますか。

あまり質問が出ないようですので、他の大学のマップを紹介します。作業をすると、大体2パターンに分かれ、予算のある大学は外注してデザイナーに頼んだりします。

予算のある大学の事例としては、とある大学の物理学科はデザイナーに入ってやっています。物理に苦手意識を持った学生が多いので、難しいイメージを弱めるために、少しハードルを低くして楽しそうな雰囲気で作ることにしました。男性の学生が多く、ゲームが好きな学生も多いだろうということで、ロールプレイングゲームのようなイメージで作りました。最初は皆さんと同じ感じでしたが、デザイナーといろいろ話をしながら、ラフスケッチを描いて、最後はこのような感じになりました。

経済学部では木のモチーフが使われています。木のモチーフはよく使われるもので、最終的にリンゴやオレンジといった果実に結びつくイメージですが、土台の幹の部分があり、葉の部分があります。経済学部では、最初から「経済の木」という形にしたいということだったので、それをベースに、一度解体もしながら、デザイナーによってこのような形になりました。

一方、予算のない大学はどうするかというと、これから教員に作業が待っているわけです。とある大学の工学部機械工学科は、非常に面白いのですが、最終的には卒業研究があります。「工学と社会」という科目があり、工学が社会にどのように生かされているかを知った上で研究します。そして、実験、実技、設計科目があり、ガソリンスタンドにたとえられています。一番下に自動車の絵が出ていますが、このように既に学生の頭の中に入っ

ているものにマップをくっつけると、記憶に残ります。タイヤの設計は物理ですし、エンジンは熱力学・伝熱学です。車体の屋根のあたりには流体力学・材料力学なども入っています。なぜかランプのところに英語があるのは、コミュニケーションによって先を照らす道具として語学を重視しているからです。

このような説明書きがあり、通常のマップはこの後にきますから、マップは何段階にも分かれていて、恐らく読者によって違ってくるのでしょう。先ほどの自動車の絵などは高校生向けであり、こちらは外部評価などに出すという使い分けをしていると思います。従って、1枚では全てを表現することはできないので、対象によって使い分けていくことになると思います。工学部は結構発想が豊かで、船舶が背景になっています。

多くの大学はマップ化したものをホームページに載せて公開するなどして活用しているので、成果としてご活用いただければと思います。

(Q1) 理工と建築で現在作っている履修の系統図がありますが、あれは客観的に見てどうでしょうか。改善するポイントがあれば教えてください。

(佐藤) 拝見させていただいた限り、よくできていると思います。外部評価の方のマップだと思いますので、高校生が見て魅力的に思うかどうかはよく分かりませんが、外向けの評価対応としてはいいと思います。あとはアレンジして在学生向け、高校生向けに活用されるといいと思います。

理工系、建築系は比較的作りやすい方だと思います。ご苦労されているのは文系の学科で、どの大学でも非常に苦労されていて、今まであまりカリキュラムの構造を気にせずにやってきているところは、この作業がかなり大変だったのではないかと思います。次の改定の際の参考になると思います。

それでは長時間の研修でしたが、最後までご参加いただきありがとうございました。

第7回 KGU 高等教育セミナー

「大学を活性化させる学生のチカラ

—学生の潜在能力と教職員との協働が、大学を変革させる—

講師：曾根 健吾 氏（横浜国立大学大学教育総合センター助手・元関東圏 FD 学生連絡会
学生代表）

日時：2016 年 2 月 19 日（金）15:00～16:30

会場：金沢八景キャンパス 5 号館 101 ホール

1. はじめに

本日は、私の拙い経験を基に、どうしたら学生の力で大学が活性化できるのかということと、学生の力を生かすためには「協働」が大きなキーワードになるので、いろいろと失敗もしましたが、関東学院大学の皆さま方がこれから活動する上でお役に立てる話をしたいと思います。

話しの前段として自己紹介をさせていただいた後、現在関心が高まっている学生参加・参画、教員・職員・学生の協働について少しお話しさせていただきます。その後、実際にどのような協働や学生参加が行われているか、私や後輩、友人たち、教職員の方々が取り組んできた具体的な事例を紹介させていただきます。最後にまとめとして、どうすれば学生と教職員が円滑な協働を推進でき、学生の参加によって大学を活性化させていけるか、私見を述べたいと思います。

2. 自己紹介

初めに、僭越ながら簡単に自己紹介させていただきます。私は横浜国立大学で FD、教育改善を担当しています。出身大学は東京にあるマンモス私立の東洋大学で、学内で学生参加による教育改善活動、いわゆる学生参加型 FD 活動を学生が主体となって立ち上げ、推進してきた経緯があります。現在は横浜国立大学で職を得て、高等教育論を専攻しているほか、学生 FD スタッフの担当として、学生と一緒に教育の質向上に取り組んでいます。

私はもともと中学校の先生になりたくて大学に入ったのですが、東洋大学に入りたくて入ったわけではありません。大学で学生参加型 FD 活動をしようと思ったのは、自分の思っていた大学のイメージとのギャップがかなり大きかったからです。

例えばシラバスと関係のない自分の研究内容を延々と語り続ける教員がいて、それで 90 分の授業が終わり、学生は後ろの方で寝ていることがあったり、1 年生の頃から一生懸命手探りでいろいろとレポートを書いて提出したのに、結果が全く返却されなかったりしました。

それから、大規模私立大学の特徴だと思うのですが、ゼミや演習以外の授業はほとんど数百人もいる大人数の授業で、教員がマイクを使って大きなホールで一生懸命話しているのに、後ろの席では私語をしているので声が聞こえず全く授業にならなかったり、大学生なのに教室で寝ていたりスマホをいじっていたりして、大学の授業は本当にこれでいいのかという思いがありました。せっかく大学に入ったのに、このままでいいのかという漠然

とした気持ちが1年生の終わり頃に生まれたことが出発点となり、現在に至っています。

教室の環境もすごいと思います。定員が400名ぐらいの教室で、机と椅子が固定され、教室に窓はなくて、満員だと息切れするような環境では、自分で選んで入ったのだから仕方がないと思いつつも、どうなのだろうと思うところもありました。

あるきっかけから、大学の学びをもう少しよいものにするために、他の学生と一緒に学生参加によって教育を良くする活動に取り組み始め、その過程で大学の教職員の方々と協働しながら、学生参加のFD活動を推進してきました。

最近ではFD活動に学生を巻き込む動きが盛んになっています。東洋大学の周辺にも立教大学、青山学院大学、法政大学など早い段階から学生と教職員が一緒に取り組んでいた大学もあったので、それらの大学と一緒に学生連絡会を作り、合同で授業について考えたり、共にスキルアップするための研修会を、学生が主体となって教職員との協働や支援を頂いて開催したりしてきました。

私は、本当は東洋大学ではなく横浜国立大学に進学したかったのですが、横浜国立大学に入試で落ちたため、東洋大学に進学したことが、今に至る原点となっています。

3. 学生参加・協働への着目

この話の中における学生参加・参画とは、大学での教育をより良くするための活動への参加・参画です。教・職・学の協働は、学生の参加を始点に生まれると考えており、学生の主体的な参加が生まれなければ協働そのものが生まれないと思います。ですので、学生の参加を始点にした学生・教員・職員の協働（以下、協働）という形で、今回の話題提供を進めさせていただきます。

学生参加や協働の意義には人それぞれの考えがあって、皆さんが考える意義や重要とする点はそれぞれ違うと思いますが、私見として学生参加や協働の大きな意義は、学生の力を生かした学生の意識改革にあります。教職員が言っても変わらないこともありますが、同じコミュニティにいる学生の働きかけや力が、学生同士の意識改革につながる面がかなりあると思います。教職員にはできなくても学生ならできること、学生ができなくても教職員にはできることは当然あるわけで、その相互作用は重要です。

また、学生自身が参加・協働することで、学生自身にかなり大きな成長をもたらします。私の後輩も、自分自身も、周りの友達もそうですが、このような活動に携わってきた学生は本当にすごく成長します。最初はメールの書き方もメモの取り方も議題書の作り方も分かりませんでしたが、同じ学生や教職員と協働することで大きく成長する思います。

学生同士の働きかけや参加で学生が元気になれば、教職員の意識改革にもつながります。FD活動をしていると、大人数の授業を担当しているため、「いくら授業を一生懸命頑張っても学生は変わらない」と教員に言われることがありました。そう言わずに、一緒によい授業をすることは教員の責務だと思いますが、学生が元気になって学生の目が輝き始めれば、おのずと教職員の目つきも変わってくると思うので、教職員の意識変化にもかなり関わってくる部分があると思います。

学習意欲も目的もばらばらな学生が存在する時代だからこそ、いろいろな考えや視点を持つ学生が参加・協働することで、より良い大学教育につながりそれは大事な点ではないかと思います。

学生はアルバイトやサークルなどの楽しい時間も多のですが、大学での勉強に集中できなかったり、なかなか自分から学びに行かなかったりする時代の中で、授業には結構真面目に出ているというデータもあります。

しかし、現実問題として授業に関心を持てない学生が全体として半数近くいるのも事実です。入学時の目的意識も関係すると思いますが、理工系や社会系を問わず、せっかく大学に入ったのに多くの学生が大学での学びに関心を持てないのはとてももったいないと思います。

もちろん、サークルや課外活動でのコミュニティーなどでの成長は大事で、自分自身も楽しかったですし、大学でのかけがえのない財産になると思いますが、一日の大半を占めるのは授業など大学で学んでいる時間です。学ぶことが最大の目的である中で、学びを充実させることが課外活動も含めた大学生活トータルの充実となり、結局は自分自身の成長につながると考えています。課外活動やアルバイトも楽しいですが、本分である学びがより楽しくなって充実することで、さらなる大学生活の充実につながると 생각합니다。学生参加や協働の大事なポイントは、正課外もそうですが、どうすれば学生参加や協働で正課の教育がより良くなるかということだと思います。

学生がこれからいろいろな嵐に立ち向かっていく中で、大学において多くの時間を占める「学び」の成長を何より重視したいと思います。

その中で大事ななのは、「生徒」から「学生」になることです。いろいろなイベントや学生の研修会で話をさせてもらって、FD 活動に関わる学生スタッフやピア・サポーターの中にも、自分のことを「生徒」と呼ぶ学生が結構います。「生徒」から「学生」へ意識を変え、大学での生活を変えることが必要です。しかし、教職員の力だけで変えるのは限界があるので、学生の参加、教・職・学の協働によってみんなの意識を高め、変化を続けていくことが求められます。

私は学生参加による教育の質保証や協働について研究していますが、最近では日本でも学生参加や協働が注目されていると感じます。1960年代の大学紛争以降、アメリカでは教育の質保証に対して先駆的な取り組みが行われており、学生参加という面では学生調査や IR を中心とした取り組みがあります。

ヨーロッパでは、学生の自主組織として学生ユニオンが大学執行部や運営母体と協力関係を築き、学生が大学の運営に参加、協働している国があります。一方、第三者評価（日本でいう認証評価）においては、イギリスではア Krediteーション団体に学生オフィサーや学生メンバーが参加しているところもあります。

ヨーロッパでは一般的な概念として、学生は教育の質保証と一緒に取り組むファクターであることが欧州高等教育質保証協会（ENQA）のガイドラインに明記され、学生が大学の運営や教育の質保証に取り組むのは当たり前と捉えられています。残念ながら日本では、学生を教育の質保証において協働するパートナーとして捉える動きは、まだわずかだと思っています。最近になって、いろいろなところから学生参加への注目が少しずつ集まっているところだと思っています。

大学教育の質に関する保証に学生が参加することについてはかつては議論自体もなく、多くの大学では自治会そのものが衰退してしまっています。自治会そのものが大学と敵対する組織だと年配の人たちは思っているところがあるのか、自治会そのものの機能が失われてきた大学が多くあります。

その後、平成 12 年に文部省から出された「廣中レポート」は、学生参加の萌芽といわれています。本来は「大学における学生生活の充実方策について」という長いタイトルで、現在はウェブにしか載っていませんが、このとき初めて文部省（当時）が政策的に高等教育のレポートとして、真に教育改革を実行するためには学生の立場に立って教育を考える必要があり、学生参加が重要だということに言及したといわれています。

近年、日本において学生参加の活動に徐々に注目が集まってきているのは、いわゆる大学教育の質的変換の流れがあると思います。

FD 活動そのものの概念や範疇が広がってきて、もっと学生と一緒に巻き込んで教育を良くしようとする動きに対する理解・関心が徐々に高まっています。FD 活動に携わる学生・教職員が集まる「学生 FD サミット」には、全国から 400～500 人の学生、教職員が集まるようになりました。

そして、学生の学修意欲や学力の多様化に対応するため、ピア・サポートの取り組みが広がりを見せています。

また、最近では大学運営に学生を主体的に参加させる動きが政策的誘導として若干見え隠れしています。特にスーパー・グローバル大学創成支援事業（SGU）など文部科学省の補助金事業の調書に、どれだけ学生を主体的運営に参加させているか、意見を聞いているかなどの項目もあり、そのような政策的誘導はどうかと思いますが、政策的にも学生参加への注目が集まっています。

なお学生 FD サミットは 2009 年に立命館大学を会場として初めて行われ、そのときは全国から 100 人程度の参加者でしたが、2012 年に 480 人となり、大阪で開催された昨年は 500 人を超えました。このように、全国の大学で FD や教育改善への学生参加、ピア・サポーター的な学生の参加が増えています。

4. 協働による大学の活性化

具体的にはさまざまな事例があります。関東学院大学でも行われているところがあるかもしれませんが、学内のいろいろな学生同士で集まって、ピア・サポーターコミュニティをつくる動きがあったり、学生自身が主体的に授業を作ったり提案したりしている例もあります。また、学生が授業や学び、学生生活についての声を集めて、教職員に改善や整

備を提案している例や、ピア・サポートとして学生同士でお互いの学びや学生生活の悩みを支援する例、あるいは教職員と学生が協働して授業や大学全体の教育システムのあり方・行動を考え、提案する事例もあります。

立命館大学の沖裕貴先生のモデルは、日本の現状を踏まえると、このように分類されると考えられるものです。大学における学生スタッフは、FD のような教育改善に特化して取り組む学生 FD スタッフ、大学や学部から委託された業務や調査研究、例えば図書館の貸し出し業務のように報酬を受けて行う学生業務スタッフ、同じ学生同士が教職員の支援・指導の下、お互いを支援し合うピア・サポーターに分類されるというものです。

学生同士のコミュニティ構築の具体例としては、法政大学が学生同士のピア・サポーターやボランティアの学生たちのコミュニティである「ピア・ネット」をつくっています。そのコミュニティの中で、「面白そう」「一緒にやってみたい」という人がいれば、いろいろなサポーターを掛け持ちしたり、応援してくれたりする学生もいると聞いています。大学がピア・ネットという制度を用いて、大学の部署として担当している課があります。大学がこのようなコミュニティの重要性を理解して推進している一例です。

ピア・サポーターがかなり早い段階から大勢いる立命館大学では、新たな取り組みとして Assembly for Peer Supporters というものがあります。学内に多数存在するピア・サポーターや学生スタッフの横のつながりがなく、他のスタッフの活動内容が分からないという学生の声を受け、みんなで集まって一緒に考え、お互いのことを知る場をつくるイベントです。ピア・サポーターは周りの学生を支援するという同じ目的を持っているわけですから、同じ目的を持ったピア・サポーター同士の研修や活動、相互刺激の交流の場として開催しています。FD に取り組む立命館大学の学生 FD スタッフが内容・企画・運営を行い、学生だけではできないところもあるので、学生の主体性を中心としながら、教職員の協働によって開催されたと伺っています。このようにイベント的につながりを作る例もあります。

学生が授業を作ったり提案したりするものとしては、「学生発案型授業」があります。横浜国立大学でも教養科目として一昨年開講されました。岡山大学、札幌大学など幾つかの大学では、学生が自分たちでシラバスを作り、先生にお願いして、単位も認定される授業として学生が授業を作る取り組みも行われています。単位認定は教員が行うわけですが、どのように授業を進めていくか、どのような中身にするか、どのように成績評価をするかは、まず学生が主体的に企画を作り、シラバスの内容を考え、教員と一緒に取り組む例であり、新聞にも掲載されました。

関西大学では、科目提案学生委員会という科目を提案するための学生委員会があります。学生が学びたい、やってみたいことを自分から提案できる面はいいのですが、教員との調整や慣れない授業を考えることなどかなり大変なところもあるので、教職員の支援も当然必要ですが、注目を集めた取り組みでもあります。

学生の授業・学びについての声や思いを集めるために、「しゃべり場」という取り組みが

いろいろな大学で行われています。しゃべり場とは教・職・学の三者が参加し、テーマについて輪になって語り合うものです。学生や教職員、副学長、教務部長などの役職者が参加して、共通するテーマについてみんなで意見交換する場をつくり、お互いの思いを共有し合う取り組みです。これを行うと、新入生などからは「友達がいない」「なかなか大学に慣れない」など本音を聞くことができ、教職員も本音をフランクに言い合えるので、結構面白かったです。

一方参加した教職員からは、「学生の声や視点を聞けてよかった」「これを生かしていきたい」「大学の授業での対話はあるけれど、授業以外のトピックや自分の学部以外のこと、大学全体のシステム、学生生活のことについて話す機会はあまりなかった」といった声が聞かれ、教職員にとっても学生と輪になってしゃべり合うことは一つの刺激になったようです。

学生同士で学生の学びを支援するために、東洋大学では履修相談会を行いました。先輩学生と1年生が履修案内を持ち寄って、「どんな科目を修得すればよいか分からない」「ガイダンスに行ってもよく分からない」という1年生に対し、先輩が経験上「こういう資格を取るためには、この科目の履修が必要」などと、学生目線ならではのアドバイスをします。

学生同士で行うのは先輩学生にとっても結構難しかったようで、東洋大学で開いたときは事前に教務部の職員に協力をいただいて研修のようなこともしました。学生が相談に乗ってあげるわけですから、間違った事実を教えるのは困るので、事前に研修が必要です。職員に協力してもらい、自分が入学したときと仕組みが変わった部分もあるので、それを踏まえながら相談に乗ります。新入生のサポートの面ではかなり重要な取り組みだと思っています。教職員だけでは対応しきれない部分があり、特に新入生は先生や窓口は敷居が高くて行きづらいので、そのようなときに同じ学生である先輩から聞くのは一つのポイントだったと思います。

また、学生と教職員が協働して、学生も講師を務める学生向けセミナーを、私が学生のときに開催したことがあります。授業では学べないけれどもセミナーとしてやりたいことを学生が教職員に相談し、日程や場所取り、人集めなどを教・職・学の三者の協働で行いながら、イベントや新入生向けの支援活動などを展開しました。

学生同士で学びを支援する取り組みの一環として、横浜国立大学、東洋大学、筑波大学などでは最近、学生が後輩に勧めたいと思う授業を紹介し合い、学生目線のシラバスを作る取り組みが行われています。後輩学生に勧めたいと思う授業はどの授業かアンケートを取り、自分たちでまとめ、後輩たちに伝えています。つまり、良い授業を後輩たちに履修してもらうことで、後輩たちの良い学びになるようにする学生ならではの取り組みです。実際のアンケートでは、どの点を勧めたいか、どのような授業だったかなど、シラバスでは分からない情報を集めました。

教職員と学生が協働して学びのあり方を考えるために、私も一緒に取り組んで学生・職

員・教員が輪になり、インタビュー形式でお互いに感じていることや思っていることを言い合いました。

東洋大学での学生 FD 活動の取り組みでは、学生 FD スタッフと授業アンケート担当の先生が輪になって、どうしたらもっと良い授業アンケートになるか、学生と教員と一緒に模造紙に付箋を貼りながらいろいろなアイデアを出し合いました。実際に教員の FD 委員会や教務部に持ち帰って、報告や共有をしていただきました。教職員と学生が協働して、大学の教育システムの改善に取り組んでいます。

最近の新たな学生参加・参画の例として、山口大学では文科省の補助金プログラムである大学教育再生加速プログラムに学生を組み込み、学生と教職員が協働しながらアクティブ・ラーニングの推進などの教育改革を進めています。このように教職員だけでなく学習者である学生も交えてプログラムを進める取り組みを行っている例もあります。

つまり、教職員と学生が一緒になって学び合いながら、共に教育改革を進めていくという、ラーニング・コミュニティを創造する観点から学生の参加・参画を推進する発想の事例です。どこまで広がっていくかは未知数ですが、一つの切り口として、大学が行う教育改革そのものへ学生を巻き込んでいる大学もあります。

ここまで一方的にお話ししましたが、ご質問やご意見はありますか。

(Q1) 大変興味深いお話でした。学生スタッフはFDスタッフと業務スタッフ、ピア・サポーターに分類されるとありましたが、私の学校ではFDに関して、すぐにそこへは行かないと思います。最初の「大学の授業あるある」で出てきた昔の授業のスタイルは、この10年でかなり改善したと思います。すると、学生から授業に対する明らかな不満は出にくくなって、学生には授業中に問題があれば上げてもらうようにしてはいますが、だんだん大した意見が出てこなくなってきました。従って、授業を受けやすい、聞きやすいというレベル以上のステップで、FDとして活動できる場面が何かあればお聞きしたいと思います。

それと並んでピア・サポートは非常に重要だと思っていて、本学の理工学部でも学習支援の学生を置いて、ピア・サポートを進めようとしています。しかし、ピア・サポートをしてくれる学生はある程度いても、サポートされる側の学生はなかなか出てきません。結局、やる気があっても周りがついていけないところがあるので、ピア・サポートを進めるときに周りの学生たちに浸透させる、やる気のある学生だけでなく学生一般に浸透させる方法があれば教えてください。

(曾根) 一つは、ピア・サポートなどその活動をしている学生たちがとても楽しそうだと思うことが大事だと思います。はたから見ていると大変そう、面倒くさそうと思われたら、多分食いついてこないと思います。学生たちがめっちゃくちゃ笑顔で、わいわいやっていて、面白そうだと思うことが、その姿を他の学生が見て、自分も加わってみたいと思わせることです。友達や後輩、今の学生たちと話していても、この活動は楽しいと思わせることが大事だと感じます。そこに新入生を含めた周りの学生をひきつけることが重要

なファクターになると思います。

(Q1) そのときに実際に楽しくなければ、楽しそうにしてくれません。教職員などが楽しくなるように誘導することは必要になってくるのでしょうか。

(曾根) どのような学生が初めに集まったかによりますが、今年4月に学生スタッフとミーティングをしたときにはお菓子やお茶を出して、「みんなでもっとわいわいとやろう」という形にしました。些細な気遣いでいいと思います。

大学の取り組みや学生を支援するというと、どうしてもしっかりやらなければならないという気持ちがあると思うのですが、もっと肩の力を抜いて、わいわいやろうというちょっとした言葉を掛けるだけで、受け止め方が違ってくると思います。あまり参考にならないかもしれませんが、自分の経験上、そのように思います。

5. まとめ

自分自身の経験やこのような活動を研究している立場から、これからの学生参加や学生と教職員の協働を推進していくために大事になってくると思うことを五つにまとめました。

5-1. 学生同士、学生組織のネットワーク形成

先ほどの例にもありましたが、学生スタッフやピア・サポーター同士を含めた学生組織同士のネットワークづくりが大事になってくると思います。各学生スタッフ、組織、ピア・サポーターの活動におけるノウハウや活動の進め方を共有できれば、こういう進め方もあったのかということに気付くことがあります。自分の団体や学生スタッフ、ピア・サポーターだけではできないが、一緒にやればできることもあるということです。

例えば、あるピア・サポーターだけが募集説明会を開いてもなかなか集まりません。しかし、みんなで合同で開けば、いろいろなところに興味のある人たちが来るかもしれません。一緒にやるからこそできることがあり、そこからネットワークが生まれ、コミュニティーが形成されていきます。

また、それぞれが持っている物、金、人などのリソースは限られていると思います。自分は持っていないくても、別のところは持っていることがあるので、お互いに活用し合うことが必要であり、他の学生や教職員との交流によって思いやパッションに触れることで、自分ももっと頑張ろうという思いが生まれてくると思います。

相互交流は大きな励みになりますが、交流というと奥手になってしまう学生も結構います。こちらが交流の場をつくっても、今のままで楽しいという学生もいるので、そうわずに一步踏み出してみようという声掛けも大事になってくると思います。

横浜国立大学の例ですが、学内には私が担当している教育改善学生スタッフ、学生FDスタッフ、図書館ラーニングアドバイザー、学生広報サポーター、留学生のための国際交流ボランティアなど、いろいろなサポーターがいます。それぞれ部署が違うので、ネットワークをつくりたいと思っても、これらを縦につなぐ組織が現状いません。横串のネットワークをつくる時には、組織を横断し、違う部局をつなぐハブが必要です。しかし、他

大学でいろいろな組織で話を聞いて回ったりしていても、これは結構エネルギーが必要で、理想ではありますが、少し大変だというのが大きな悩みになっています。

5-2. 理念、ビジョンの策定・共有

大事になるのは、学生参加や協働そのものを目的としないために、学生参加や学生と教職員の協働によって何をを目指すのか、何を目的として学生の参加を得て、協働するのかということについて、目的やビジョンを学生と教職員で共有することです。教職員もそうですが、学生もベクトルがみんな違い、取りあえず一緒にやろうとしても、みんなばらばらの方を向いていては大変になります。

理念やビジョンが決まれば、具体的にどのようなアクションが必要かも決まってきます。教職員と学生がお互いの理念やビジョンを共有することは、実際にやっていこうとしたときに、ばらばらの方向を向いていたのでうまくいかなかったということにならないためにも大事なステップだと思います。

参考までに、教職員と学生で理念をつくりました。理念というと、やっているうちに忙しくて忘れられてしまうこともあります。スタート地点の思いをみんなで同じくすることで、どのようなことを目指していくのかを共有することは欠かせないと思います。

そのときに何を目指して取り組むかということ、基盤にあるのは自分の大学、一緒に学んでいる学生、みんながいる場所を一人一人にとってより良いものにしていきたい、みんなが笑顔になれるコミュニティにしていきたいという、自分の大学を愛する一人一人の気持ちです。私も滑り止めで大学に入ったので、最初は自分の大学に少しも愛着がなかったのですが、いろいろな経験をしていく中で大学の良さに気づき、この大学はよいなとだんだん思うようになりました。それが、何か行動してみようという気持ちにつながっています。まず自分の大学を好きになることが、学生の主体的な参加を促す前提であり、その気持ちがなければ参加や協働はなかなか生まれないと思います。

5-3. 学生の潜在能力を引き出す

学生参加や協働を進める基盤は、自分の大学を良くしていきたいという学生の主体性であり、潜在能力はそこから引き出されるわけですが、そうは思っている一歩を踏み出せない学生が多いという現実があります。学生の主体性が大事だからといって、学生の主体性に依存し過ぎてはいけないというのが私の経験から思うことです。

教職員が主体的になるきっかけをつくってあげると、そこで一歩を踏み出せます。しかし、一歩踏み出しても、それだけで大丈夫ではありません。もしうまくいかなければモチベーションを喪失してしまうので、学生のモチベーションを保つために「こういう道もある」「こういうアプローチはどうか」といった教職員の適度な助言が欠かせません。助言もなく、あとは主体的に頑張れではモチベーションが急に下がってしまい、一度下がったモチベーションはなかなか上がってきません。だからこそ、適度な助言が欠かせないと思います。

私見ですが、学生参加や協働が活発な大学では、特定の人、熱い人、学内で有名な人がコアとなってコーディネーター的に動いている事例があります。すると、結局は属人的な

ところで終わってしまい、あの人がやっているからよいだろうという感じになってしまいます。その人が異動や退職になって関わらなくなったときに、今までのノウハウや流れの継続性にかなり不安が残りますし、人への依存が生まれてしまいます。すると、これを全学的に拡大していこうとしたときに未知数的なものになります。学生参加や協働のノウハウを継承していくためには、属人的に特定の人が行うのではなく、チームとして支援・協働することが重要になってくると思います。

教職員は忙しいですが、学生が声を掛けやすく、接しやすくしてやるのが大事です。決して言うことを聞いてあげるという意味ではなく、教職員側の論理や事情を学生に一方的に押しつけてしまうと、どうしてもやる気がなくなってしまいます。自分自身の経験ですが、一方的に「お金がないからできない」と言う教職員がいました。そうすると、「私たちが一生懸命頑張っても、お金がないとか忙しいという理由で片付けられてしまうのか」ということにつながってしまいます。一方的に事情や論理を押しつけるのではなく、その立場なりにどうすれば実現できるかを考えてあげたり、きちんと言うべきときには必要に応じて「ここはこうした方がよい」と言ってあげたり、メリハリを持った接し方が必要になると思います。

私自身、最初は教職員との協働がないままに学生FDという活動を始めてしまったので、ノウハウの蓄積や支援、協働がない状態で、学生だけで何ができるか全く分からないという経験もしました。どうすれば周りを巻き込んで成果を出せるのかが見えず、絶えず不安でした。メンバー不足で、一緒にコアとなって活動していただける教職員も少ないので、学生がさまざまなベクトルを向いてうまくまとまらず、挫折間近になってしまった経験もしました。そのようなときに、全てを後押しして言うことを聞いてくれるような支援ではなく、必要に応じてアドバイスや支援をしてくれるような関わり方が大事だと思います。

学生スタッフの研修会では経験上、チームとしての連帯や資質向上を図るためには、学生メンバーがそれぞれのことをよく知り、目標設定だけでなく目標への進捗もみんなで共有し、メンバー各自がどのような目標を持って、どのような経験をして今ここにいるのかを共有しようとよく言っています。

先ほどの履修相談会もそうですが、そのような活動には専門性やコミュニケーション能力といったスキルが求められる場面もあります。そのスキルは、卒業後も役立つことがかなりあると思います。いろいろなスキルを高め、大学そのものがどのような場なのかということに関心を持つことです。高度なスキルをつける必要はありませんが、そのようなものは卒業後も生きるもので、みんなで勉強し合うことも必要だと思います。

このような活動の中では、いろいろと違った成長が学生を待っています。授業やアルバイトにはない成長が、教職員や他の学生との協働の中で生まれてきます。授業やアルバイト、サークルにもそれぞれ学びや成長がありますが、協働の中ではそれとは違う成長が生まれますし、学生への教育の一つでもあると思います。

5-4. 大学としての体制整備

そして、学生参加・参画を進めていく上では、大学全体としての体制整備が重要になってきます。学生スタッフは短期間で入れ替わりますし、学生参加・協働による取り組みに

は予算も必要です。「こうすればもっとよいのに、なぜそれができないのか」と思うときには、粘り強く、一步一步、根気強い支援が大事になってきます。かなり労力が掛かる仕事でもあります。このような形での協働や参加を円滑に進めるためには、これからはコーディネーターや担当職を設けることが必要になると思います。特に、全学的に取り組んでいくときには必要になってくると思いますし、一部の特定の学生や教職員に依存せず、大学として良い協働のコミュニティをつくる意味で大事なポイントだと思います。

5-5. 学生、教職員が楽しく取り組む

最後に、学生も教職員も楽しく取り組むことが重要です。学生はこのような活動を通して自分の大学の良さに気付き、好きになる機会となり、自分の大学が好きになって、楽しくなっていきます。そして、自分自身の成長の機会にもなり、自分の属する学部や友達とは違った交流の機会にもなり、その中で自分の視野や知見を広げることができます。そうした中で楽しさが生まれてくるといいですし、時には失敗したり、うまくいかなかったりすることもあります。しかし、失敗したときには「次はこういうふうにやってみよう」というポジティブな楽しさと勇気が生まれて、実はやってみると楽しい面もあり、いろいろな意味での楽しさが学生の中で生まれてきます。

学生だけでなく教職員も一緒に楽しむことです。教職員は学生参加や学生との協働を堅苦しく考えないようにし、一緒に楽しくやってみようという気持ちで、教職員が個人、チームとして楽しくやっている姿を見せることも大事だと思います。学生が楽しくやっているのもそうですし、教職員が楽しくやっているのを見て、他の教職員が「楽しそうだな」という気持ちになれば、自分も関わってみようと思う人が出てくるかもしれません。その意味で、教職員が楽しくやっている姿を見せることも大事になってくると思います。

自分の大学や他の大学と一緒に頑張っている学生や教職員との交流から明日へのエネルギーが生まれてきます。それがあから、私は今大変でもいろいろ頑張ろうと思えていると思います。

学生、教員、職員の円滑な協働の推進に向けての第一歩は、輪をつくってお互いに向き合うことです。一つになって行動する前に、一緒になって輪をつくり、向き合きましょう。

私が学生時代から一貫して思うことは、「この大学で学んでよかった」、「この大学で生活してきてよかった」と一人でも多くの学生が思い、大学での時間を無駄にしないことです。そのために、理念を共有・理解してみんなで楽しく教・職・学の協働を進めることで、より良い大学教育を生み出す起爆剤になればと思い、頑張っています。ご静聴ありがとうございました。

第7回 K G U 高等教育セミナー（関東学院大学） 平成28（2016）年2月19日（金）

大学を活性化させる学生の参加と協働
— 学生の学び、学生生活の充実のために —

曾根 健吾

横浜国立大学 大学教育総合センター
k-sone@ynu.ac.jp

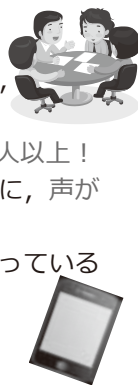
1

1. 僭越ながら自己紹介

3

大学の授業「あるある」

- ★ 教員が、自分の研究内容を語り続ける
- ★ レポートを一生懸命書いて提出したのに、返却されない。
- ★ ゼミ以外は、ほとんど大人数講義！100人以上！
- ★ 教員はマイクを使ってしゃべっているのに、声が聞こえない。
- ★ 教室の後ろは、寝ているかスマホをいじっている学生が多い。
- ★ 教室内の私語がうるさくて集中できない。



6

2. 学生参加・参画，教員・職員・学生の協働への着目

9

アウトライン

1. 僭越ながら少し自己紹介をします

2. 学生参加・参画，学生・教員・職員の協働について，動向等をお話しします。

3. 学生参加・参画，学生・教員・職員の協働による事例を紹介します。

4. 学生と教職員の協働を推進するために

2

僭越ながらちょっと自己紹介

曾根 健吾（そね けんご）

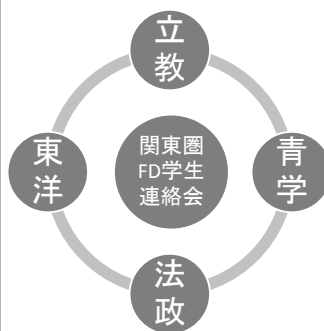
横浜国立大学 大学教育総合センター助手

- ・ 東洋大学教育学科出身
- ・ 学生FDチームを学内で立ち上げ，リーダーを務める
- ・ 2011年9月～2013年3月
関東圏FD学生連絡会学生代表
- ・ 2013年4月～2015年3月
川崎市立中学校講師（社会科）
- ・ 研究領域は高等教育論，学習論，教育工学
- ・ 現在，学内で学生FDスタッフの担当教員



4

2012年より大学間連携の取り組みを推進



- ・ 情報交換を目的として「関東圏FD学生連絡会連絡会」を設立。
- ・ 4大学は同規模の私立総合大学。（学生数2～3万人）
- ・ 大学の授業について考えるフォーラムや，合宿研修会等を学・教・職の協働で開催。

8

学生参加，協働について

本話題提供では・・・

- ・ 学生の参加，参画
→ 大学での取り組み，教育の質保障，向上への取り組みへの参加，参画

学生の参加を始点に，3者の協働が生まれる

- ・ 協働
→ 学生，教員，職員による，協働

10

学生参加，協働の意義をどう考えるか

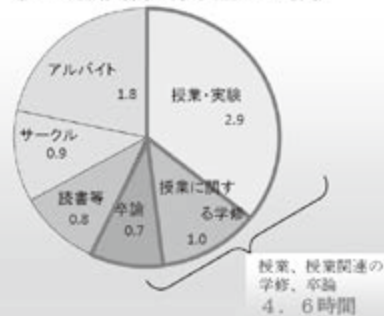
経験に基づく私見ですが・・・

- ・学生の力を活かした学生の意識改革へ
→受け身から，主体へ
- ・参加，協働する学生の大きな成長がある。
- ・教職員の意識改革につながる。
- ・大学がユニバーサル・アクセス時代となり，多様な学生が存在するようになったからこそ，学修者である学生の幅広い参加，協働によってより学生目線にたった教育活動に繋がるのではないかな。

11

近年，学生の学修時間は・・・

学生の活動時間の分布（計8.2時間）

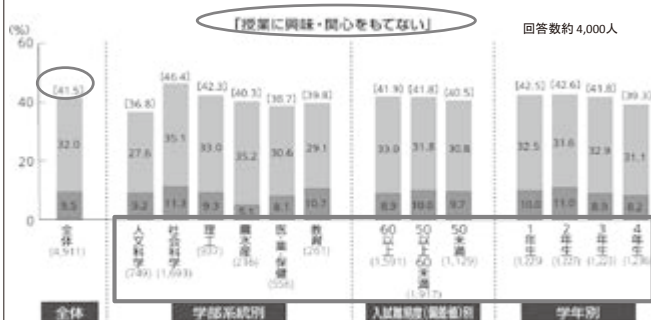


- ・授業時間外学修の時間が短いことが問題になった。
- ・アルバイトの時間の長さが目立つ？
- ・でも授業にはまじめに出ている？

中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」資料より引用（※データは，東京大学教育学研究科大学経営・政策コース「全国大学生調査」（2007年）より）

12

授業に関心をもてない 学生が約半数近くいるという現実がある



注1「興味・関心をもてない」は「授業に興味・関心をもてない」を指している。
注2「興味・関心をもてない」は「授業に興味・関心をもてない」を指している。
ベネッセ教育総合研究所「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書」（2012年）より引用

13

でももったいない！

学生生活の1日の大半
を占めるのは，授業



「学ぶこと」こそ，
大学での大きな目的



学びの充実＝大学生生活の充実→成長

14

そして立ち向かわなければならない

グローバル化の波と国際化

少子高齢化社会

フラック化した労働市場

熾烈な就活戦線

15

学生は「学びの主権者」

学生は大学の主役，学びの主権者として

「生徒」から「学生」へ

- ・学生の意識が変わらなければ，大学での学び，生活は変わらない！
- ・でも教職員だけで意識を変えるにはちょっと限界が・・・
- ・だからこそ，学生の参加，学・教・職の協働が必要→教職員の意識も変わる



16

ところで欧米では・・・

1960年以降の学生紛争以降

- ・アメリカでは，学生に対するアンケート調査が広く行われ，その結果を大学教育の向上に反映させる動き。
- ・ヨーロッパでは，学生の自主組織として学生ユニオンが大学運営母体と協力関係を築き，学生が大学教育の質保証に関わる。第三者評価に学生が参加する例も
- ・欧州では「学生は質保障のファクター」
欧州高等教育質保証協会（ENQA）
→日本では学生をこのように捉える動きは，まだわずか。

17

日本では・・・

- ・日本では1960年の大学紛争以降，学生参加についてはほとんど議論がなされてこなかった。自治会が衰退した大学が多くあった。
- ・その後通称「廣中レポート」（平成12年6月に文部省高等教育局（当時）が出した報告書）が出される。
「（大学の教育改革が）真に実効あるものとなるためには，教育を提供する立場の論理だけではなく，学習する側である学生の立場に立ったものとして進められる必要がある。」

18

YNU YOKOHAMA
National University

近年，学生参加・参画，協働への着目

- ・大学教育の質的転換の流れ
→ティーチングからラーニングへ，教育のパラダイムシフト，学生の学修成果重視の教育へ
- ・FD活動の範囲が拡大，学生参加によるFD活動が活発に
→「学生FDサミット」の参加者数は年々増加傾向
- ・学生の学修意欲，学力の多様化への対応
→ピア・サポート
- ・政策的な誘導が少し見え隠れする（？）
→SGUなど，文科省の補助金調書に学生の主体的な大学運営への参加という項目が…

19

YNU YOKOHAMA
National University

4. 学生の主体性を生かした，教職学の協働による大学の活性化

20

YNU YOKOHAMA
National University

様々な事例があります

- 学生同士のサポーターコミュニティの構築
- 学生が授業をつくる，提案する。
- 学生の授業，学びについての声，思いを集める。教職員に提案する。
- 学生同士でお互いの学びを支援する。
- 教職員と協働して授業，教育システムのあり方を考え，行動する。

21

YNU YOKOHAMA
National University

※学生スタッフの分類

●立命館大学沖先生による学生スタッフの分類

学生スタッフ
その分野における専門性をもち、教職員と協働して大学の様々な業務に従事する学生

学生FDスタッフ
FDに特化した学生スタッフ

学生業務スタッフ
大学や学部から委託された業務や調査研究を行うスタッフ

ピア・サポーター
同じ学生同（peer）が専門性を持つ教職員の指導のもと，仲間同士で援助し，学び合う業務に従事する学生スタッフ

※沖裕典（2015）『「学生スタッフ」の育成の課題』『名古屋大学高等教育研究』第15号，p.20.より引用

22

学生同士のサポーターコミュニティの構築

法政大学ピア・ネット

法政大学「ピア・ネット」

23

学生同士のサポーターコミュニティの構築

立命館大学の取り組み

Assembly for Peer Supporters

（2013年12月12日）

- ・学内に多数存在するピアサポーターの横のつながりの構築をめざす。
- ・同じ目的をもつピア・サポーターの研修，活動内容の共有，交流の場として開催。
- ・学生FDスタッフが内容の企画，当日の運営を行う。
- ・学生を中心にしながら学・教・職の協働により開催する。

24

YNU YOKOHAMA
National University

学びセミナー 2014 春

新入生対象
4月7日(月)4限 14:40～
テーマ：大学での学びを充実させる
※主に講義形式のワークショップ形式
(講師：立命館大学学生)

会場：3号館1階
マルチメディアホール
※事前予約が必要！参加費無料
※詳細は下記ページをご覧ください！
2～4年生対象
4月8日(火) 5限 16:10～
テーマ：大学での学びを充実させる
※主に講義形式のワークショップ形式
(講師：立命館大学学生)

学びを充実させるイベントの開催など（学生企画！）

28

学生同士で学びを支援する

家族社会学 AB

西野 理子 先生

社会学の観点で家族を学ぶ意義

授業科目名 社会学 教員名 西野 理子

授業形態 講義形式 授業形式 ゼミ形式
グループワーク ディベート

授業の特徴 わかりやすい 動きやすい 授業の雰囲気がいい 資料がわかりやすい 授業の雰囲気がいい 学生の良さを引き出してくれる

特徴やオズメの点をさらに詳しく教えてください

29

YNU YOKOHAMA
National University

学・教・職の協働を大学改革へ

山口大学の事例

文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）
テーマⅠ・Ⅱ複合型（アクティブ・ラーニングと
学修成果の可視化）に採択。

- AP事業において、学生スタッフを雇用。
- AP事業を通して学生と教職員が協働し、アクティブ・ラーニングの推進など大学教育改革を推進する。

教職員、学生がともに学び合う、ラーニング・コミュニティの創造という観点から、学生の参加・参画を推進
（→新たな学生参加・参画の発想）

32

YNU YOKOHAMA
National University

学生と教職員の協働を推進に向けて

- ① 学生同士、学生組織のネットワーク形成を
- ② 学生参加と協働によって、どういう展望をめざしたいのか…理念、ビジョンの策定・共有を
- ③ 学生の潜在能力を引き出すために、学生の心に火をつける。
- ④ 大学として学生参加と協働を進めるための体制整備は不可欠！
- ⑤ 学生とともに「楽しく」取り組む気持ちを忘れない→学生も教職員も楽しむ

34

YNU YOKOHAMA
National University

② 理念、ビジョンの策定・共有を

- ・学生の参加、学生との協働によって、何をめざすのか。その目的は？そしてどういう大学にしたいのか。
→みんなベクトルは様々である。
- ・理念、ビジョンが決まれば、具体的に取り組むこと、動き方も決まってくる。
- ・お互いのパッションの共有、理解も欠かせない。

東洋大学学生FDチームの理念（2010）
東洋大生がより主体的に学び行動し、東洋大生であることに誇りをもてる大学をめざして

横浜国立大学教育改善学生グループの理念（2015）
大学教育の価値発見と自発的な学修獲得のために、学生と教職員の架け橋になる。

37

YNU YOKOHAMA
National University

※教職員の支援と学生への関わり方

- ・学生参加、教・職・学の協働が活発な大学では、特定の教職員がコアとなって動いている場合が多い（→属人的な活動）。
→異動、退職となった時に継続性に不安が残る。
→コアとなっている教職員に依存してしまう。
→学生参加、協働の全学的な拡大は未知数。
→ノウハウの継承のためにも、教職員がチームとして学生と協働することが重要であるのではないかな。
- ・学生が教職員に声をかけやすく、接しやすくするためには教職員が明るく接することが大事！そして教職員側の論理、事情を押し付けない。ただし必要なときはびしっと指導する、メリハリを

39

YNU YOKOHAMA
National University

（４）※まとめ 学生の参加、学生と 教職員の協働を推進する ために 学生FD活動推進経験者の立場から

33

YNU YOKOHAMA
National University

① 学生同士、学生組織のネットワーク形成を

- ・各スタッフ、組織における活動のノウハウ、グッドプラクティスの共有。
- ・1団体ではできないことも、一緒にやればできることもある。一緒にやるからできることがある。
Ex：募集説明会を合同で開催する。
- ・互いのリソースを相互に活用する。（どこもリソースは限られている。）
- ・他の学生、教職員との交流を図る。交流によって、他の学生、教職員の思い、パッションに触れる。

➡ 相互交流は大きな刺激と励みに！

35

YNU YOKOHAMA
National University

③ 学生の潜在能力を引き出すために

- ・学生参加、協働を進める基盤は、あくまで大学、学びをよりよくしたいという「学生の主体性」である。そこから潜在能力が引き出せる。
- ・主体性を生むためには、自分の大学が好きになることが重要ではないか。
- ・第一歩として、関わる学生の「主体性」に教職員が依存して、任せきりにしては動かない。教職員が学生の心に火をつける、きっかけをつくる。
- ・また、第一歩の後の学生への任せきりは、結果として学生のモチベーション喪失につながりかねない。
→適度な助言とアドバイスは欠かせない。

38

YNU YOKOHAMA
National University

※参加、協働する学生へ 一チームとしての連帯と資質向上をー

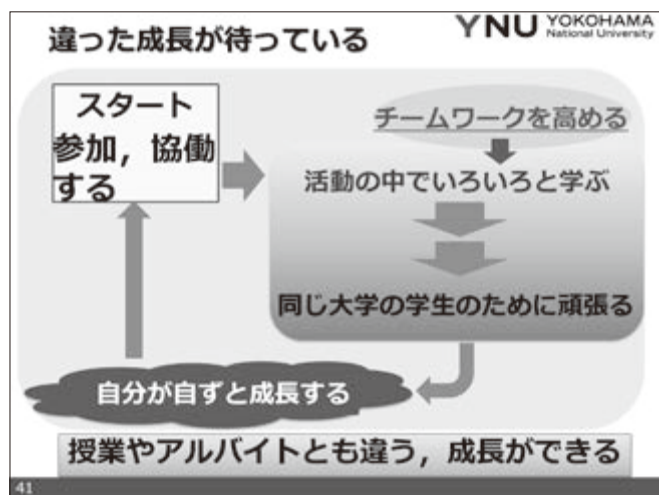
連 帯 ー共に「楽しさ」をつくらうー

- メンバーそれぞれのことをよく知る（相互理解）
- 目標設定だけでなく、目標への進捗管理を。
- メンバー各自の理念、目標、経験、強みの共有を。

資質向上と専門性

- 必要な専門性とは？（高度な専門性は必要ない）
→自分の大学を知る
（大学組織の構成、歴史、カリキュラムなど）
→高等教育の動向、大学授業について
→コミュニケーション力、企画立案力、リーダーシップ 等
- グローバル化など、大学を取り巻く状況への関心を

40



YNU YOKOHAMA National University

④ 大学としての体制整備は不可欠
学生参加, 学生との協働を継続するためには
大学全体としての体制整備は欠かせない。

- ・学生（学生スタッフ）は、短期間で入れ替わる。
- ・学生参加, 協働による取り組みには、予算も必要。
- ・学生参加, 協働は、教職員にとって労力と粘り強さ, 根気強さが必要な仕事である。
 学生の参加, 協働を円滑に進めるためのコーディネーター, 担当職を設けることが必要であると考えられる。
 →一部の学生, 教職員のやる気に依存しないために。

42

YNU YOKOHAMA National University

⑤ 学生は「楽しく」取り組む
学生にとって, 参加と協働は…

- ① 自分の大学の「よさ」を見つめる機会
 →自分の大学が好きになる！楽しくなる。
- ② 自分自身の成長の機会
- ③ 自分の属する学部とは違う方たちとの交流の機会
- ④ 自分の視野, 知見を広げる機会

※ 時には失敗することもある, うまくいかないこともある！
 →失敗を楽しむ勇気とユーモアが必要
 「失敗」したときの振り返り, 自己省察が次の「楽しみ」のエネルギー源
 →実はやってみると楽しい。

43

YNU YOKOHAMA National University

⑤ 教職員も一緒に「楽しむ」
学生参加, 協働を堅苦しく考えない！

- ・教職員が個人, チームとして学生と楽しく協働している姿を見せる。
 →教職員の学生参加, 協働への関心を高めるために
- ・私の考える「楽しい」とは…

44



YNU YOKOHAMA National University

参考文献

- ・ベネッセ教育総合研究所 (2012) 『第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書』
- ・大学評価・学位授与機構 (2013) 『大学評価フォーラム 高等教育の質保証と学生の役割 報告書』
- ・沖裕貴 (2013) 「『学生参加型FD (学生FD活動)』の概念整理について - 『学生FDスタッフ』を正しく理解するために」『中部大学教育研究』No.13, pp.9-19.
- ・沖裕貴 (2015) 「『学生スタッフ』の育成の課題」『名古屋大学高等教育研究』第15号
- ・服部憲児 (2012) 「学生参加型FDの現状と実践上の課題」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第38巻
- ・服部憲児 (2013) 「学生参加型FD・教育改善の盛衰に関する研究」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第39巻
- ・木野茂編著 (2012) 『大学を変える。学生が変わる - 学生FDガイドブック -』, ナカニシヤ出版
- ・清水亮・橋本勝編 (2012) 『学生・職員と創る大学教育』, ナカニシヤ出版
- ・清水亮・橋本勝編 (2013) 『学生と楽しむ大学教育』, ナカニシヤ出版
- ・山本堅一, 吉田博, 服部憲児 (2014) 「FDの実質化に必要な新たな視座 - FDにおける学生関与の現状 -」『第20回大学教育研究フォーラム発表論文集』, pp.184-185.

47

YNU YOKOHAMA National University

ご清聴ありがとうございました。

曽根 健吾
 k-sone@ynu.ac.jp
 (質問等は遠慮なくご連絡下さい！)

48

高等教育研究・開発センター News Letter

Annual Report of Center for Research and Development of Higher Education, Kanto Gakuin University



【Event Report】 全学FD・SD講習会を開催しました！(2015.4.29)

2015年度 全学FD・SD講習会プログラム(抜粋)

開催日 2015年4月29日(水)

時 間 13:00～16:30

場 所 金沢八景キャンパス フォーサイト21 10階
大会議室

1. 開会の挨拶(13:00～13:10)

学長 規 矩 大 義

2. 本学のFD・SDへの取り組み状況(13:10～13:40)

副学長／高等教育研究・開発センター長 出 石 稔

3. 講演(13:40～14:30)

「関東学院大学生に産業界が期待する能力とは

～PROGテスト、人材ニーズ調査の結果を手がかりに～」

(株)リアセック キャリア教育推進グループ

澤 田 辰 雄 氏

酒 井 陽 年 氏

4. グループワーク・成果発表会(14:50～16:20)

「本学が育成すべき人材像は、どのようなものか？」

5. 講評・閉会の挨拶(16:20～16:30)

副学長／高等教育研究・開発センター長 出 石 稔

本学では2012年度より、年度当初に「全学FD・SD講習会」を開催しています。対象は、高等研が企画する他のセミナー等と同様に「全教職員」の方々ですが、特にこの全学FD・SD講習会では、「新任教職員」の方々に越しいただくことを念頭に、毎年企画案を検討しています。本年度は、上記のプログラムの通り実施しました。なお、このプログラムの目的(学習到達目標)は、次の3点です。

- ①新任教職員に対し、本学における「全学FD・SD」の取り組み内容を理解してもらうこと。
- ②建学の精神、校訓、3つのポリシーなどに示される本学の「教育目標」を再認識し、討議を通じて深めてもらうこと。
- ③グループワークを通じて、新任者に対して「同僚(ピア)」として共体験の機会を提供すること。

当日は、規矩学長のご挨拶をいただいた後、出石副学長より「授業改善アンケート」や「公開授業」に代表される本学のさまざまなFD・SDの取り組みについての説明をいただき、日々の授業改善や業務改善の一助として欲しい旨、お話がありました。

続く講演では、「関東学院大学生に産業界が期待する能力とは」という、やや刺激的なタイトルをつけました。「どのような学生を育成するか」は、本来、社会や産業界からの期待ではなく、大学ひいては個々の教職員が信念をもつべきものです。しかし、

敢えてこのようなタイトルにしたのは、社会からの要請や本学生を対象とした調査の結果等を通じて、参加者の思考に“揺さぶり”をかけ、その後のグループ討議を活発にするという狙いがあったためです。紙幅の都合上、ご講演いただいた内容のすべてを紹介することはできませんが、中心的な内容であった「人材ニーズ調査」の結果については、2頁～4頁上にかけて要約版を掲載しておりますので、そちらをご参照ください。

講演に続く、グループワークでは、上述の講演(問題提起)を受け、「本学が育成すべき人材像は、どのようなものか？」について、参加者が6つのグループに分かれ討議を行い、その成果を全体発表の場で共有しました。各グループの発表では、「知識の吸収とその再現」という従来の大学教育が育成してきた能力に加え、「主体性」や「学びと実社会との繋がりをもつ」といった、さまざまな「育成すべき学生像」が提案されました。

受講者アンケートでは、前半部分の講演で9割、後半のグループワークでほぼすべての参加者から「参考になった(「大変参考になった」と「やや参考になった」の合計)」との回答をいただきました。また、自由記述欄では、主にグループワーク実施後の感想として「専門分野の違う他学部の先生方とお話できて刺激になった(教員)」「自分たちが日々の業務の中で学生と接することも、教育の一環であることを実感した(職員)」などの声もいただきました。ご参加いただいた教職員の皆様、ありがとうございました。高等研では、今後も、さまざまなFD・SD企画を行ってまいります。積極的なご参加をお待ち申し上げます。

(奈良堂史)



(写真)グループワーク後の「成果発表会」の様子

2014年度 企業向け人材ニーズ調査について(要約版)

1. 調査の目的と概要

目 的：企業・団体に対して、関東学院大学の新規学卒者への求める能力について郵送アンケート調査

調査時期：2014年5月下旬から6月中旬

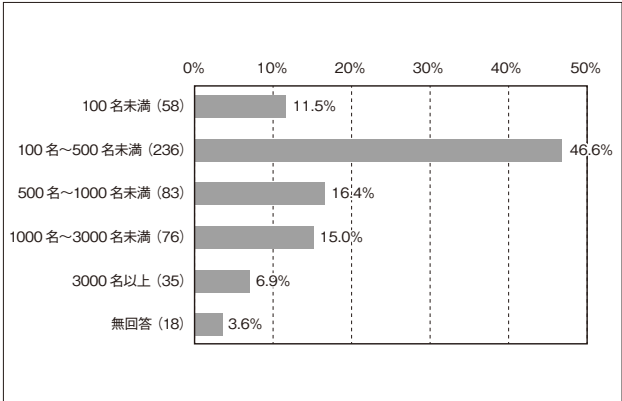
調査対象：東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県の関東学院大学卒業生が在籍している一般企業

発 送 数：約3000社

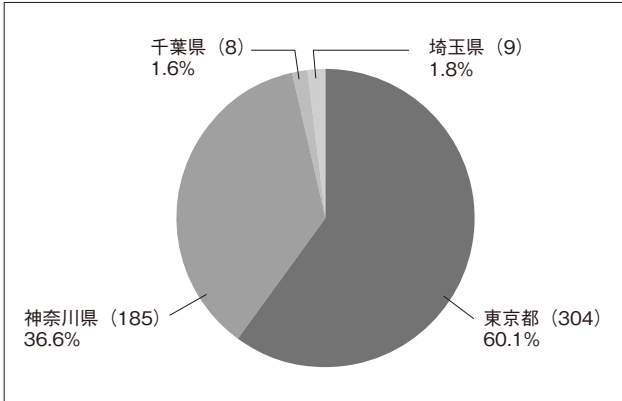
回 答 数：506社

回答者のプロフィール：従業員数／所在地／業種

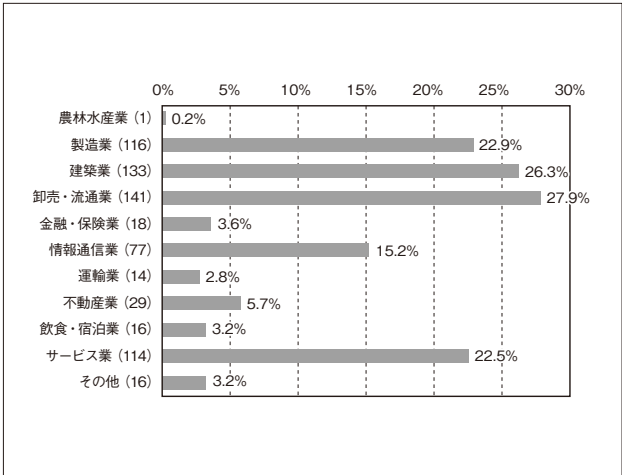
●従業員数



●所在地



●業種



●調査で使った「求めている能力項目」として、以下の3大分類9中分類の能力項目を使用 ※リアセック「PROG」テストの測定項目

対人基礎力	
親和力	円満な人間関係を築く
協働力	協力的に仕事を進める
統率力	場をヨミ、目標に向かって組織を動かす
対自己基礎力	
感情制御力	気持ちの揺れをコントロールする
自信創出力	ポジティブな考え方やモチベーションを維持する
行動持続力	主体的に動き、良い行動を習慣つける学習行動を含む
対課題基礎力	
課題発見力	問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う
計画立案力	問題解決のための効果的な計画を立てる
実践力	効果的な計画に沿った実践行動をとる

2. 調査結果の要約

関東学院大学の新規学卒者に求めている能力について

上記の能力項目に対して、求めている能力を企業に調査。「求めていない」「あまり求めていない」「求めている」「強く求めている」「大変求めている」の5段階で、「強く求めている」「大変求めている」の割合が高いのは、

- ・技術職(理系学部卒)
 - ①行動持続力61.1% ②協働力60.4% ③親和力56.9%
- ・技術職以外(人文系／経済学系／法学系等の学部卒)
 - ①協働力62.7% ②親和力62.6% ③行動持続力61.4%

となっており、この3つの能力は、文理系両方に共通した求められる能力と言える。

関東学院大学の卒業生に対する能力評価について

卒業生が在籍している企業に対し、上記の能力項目について、「物足りなさを感じる」「どちらかと言うと物足りなさを感じる」「普通」「どちらかというと優れている」「優れている」の5段階で評価。「優れている」「どちらかというと優れている」の合計の割合が高いのは、

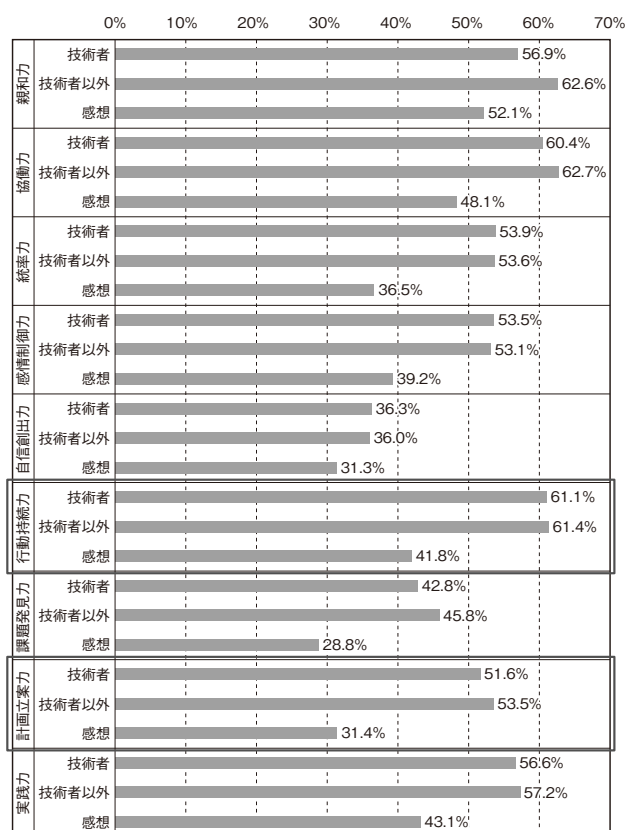
- ①親和力52.1% ②協働力48.1% ③実践力43.1%

となっている。親和力と協働力は、求めている能力であり、評価も高い能力であるが、行動持続力については、求める能力であるが、実際に従事している卒業生への評価としては、低く、在学中に育成すべき能力であると言える。これは文理系両方に共通している。

また、求めている割合は上位ではないが、計画立案力については、「求めている」割合と「優れている」割合が最も乖離がある。次いで、統率力、感情制御力の順で、乖離があり、行動持続力の他にも、育成すべき能力があることが伺える。

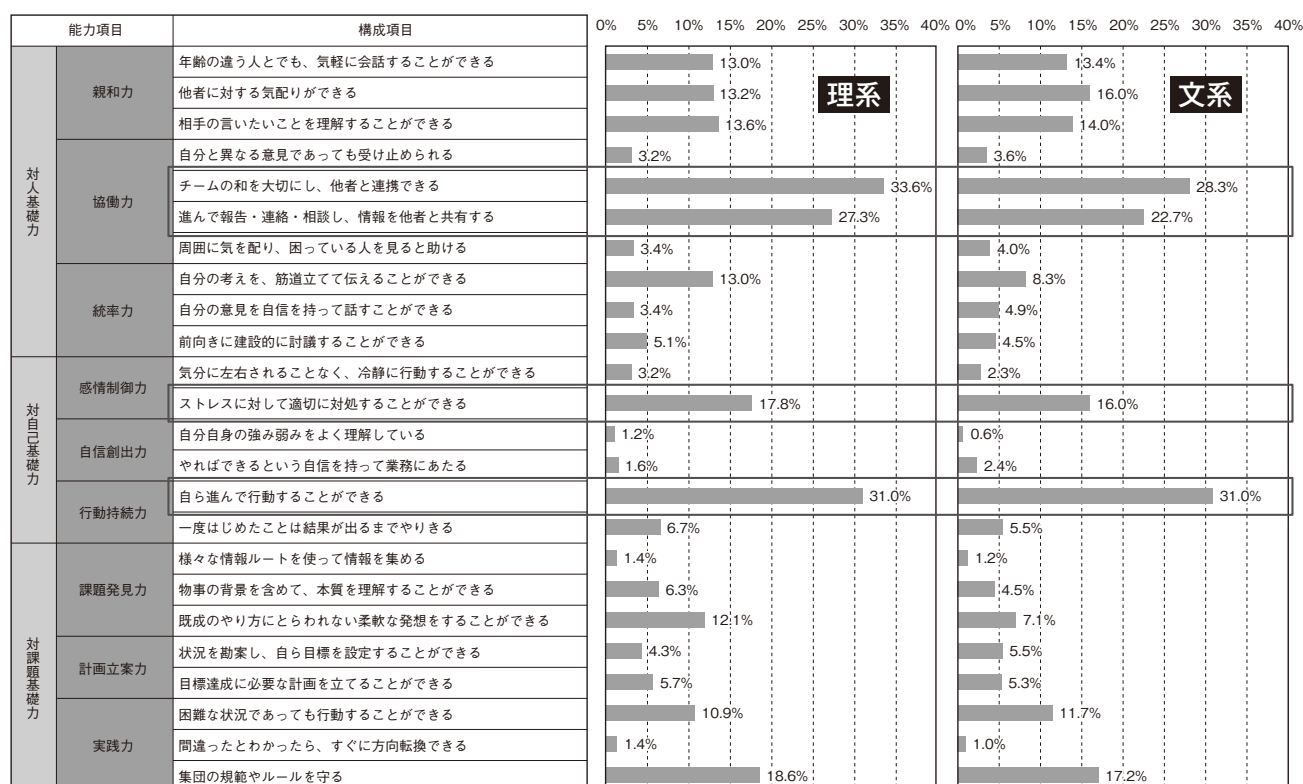
以上のことから、関東学院大学の学生には、

- ①行動持続力 ②計画立案力 ③統率力 ④感情制御力の順で、育成すべき能力があると言える。



詳細な能力の構成要素に求められる傾向について

調査をした能力項目(3大分類9分類)には、24項目の構成要素があり、この24項目の中から、より求めている能力として3つを選択。上位3つの能力項目の構成要素としては、①チームの和を大切にし、他者と連携できる ②進んで報告・連絡・相談し、情報を他者と共有する ③自ら進んで行動することができる 次いで、ストレスに対して適切に対処できる、となっている。



企業から寄せられたフリーコメントについて

調査項目には、フリーコメントの設問があり、多数、企業からの関東学院大学の教育への要請や印象なども頂いた。

■「学生のうちに学んでほしいこと」について

- ・年齢に関係なくコミュニケーションをとること
- ・理系だからというわけではなく、国語力(漢字、文章力)に弱い。もう少し学んできてほしい。また、理系科目も各学部とも広く浅くになっているように思える。もう少し狭くとも深く専門分野を学んできてほしいのではないか。
- ・アルバイト、インターンシップなどの職業体験や部活動・サークル等学業だけでなく、その他活動も積極的に取り組んでほしい。
- ・専門科目は特に勉強してほしい。部活、サークル、アルバイト等で人間関係を学んでほしい。
- ・自分の頭で考えること。Howtoものやwikiに頼らず、原典に当たること。自己本位ではなく、他人の意見をよく聞き、その背景を理解すること。

■「関東学院大学の教育に期待されていること、要望したいこと」について

- ・キリスト教の価値観に基づく人格形成。学生の自己肯定感。
- ・大学のポリシーを身につけてくだされば十分だと思います。
- ・貴学のキリスト教の精神に基づく「人になれ、奉仕せよ」の

校訓をしっかりと自分の軸として持つことのできる教育を期待します。

- ・地域貢献の意識、地元企業でのCSR活動への参画意欲の醸成

■「関東学院大学の3つのポリシーについての意見、ご感想、印象など」について

- ・教訓とアドミッションポリシーがマッチしている。
- ・各学部の違いが分かるので素晴らしいと思う。
- ・アドミッションポリシーに関しては素晴らしい基本方針だと思います。どのように入学時に見極めているのか関心があります。
- ・各学部でしっかりと設定されていることは、学ぶ学生にとっても芯を持って学業、学校生活を充実したものに出来ると思いました。
- ・学部ごとに特色が出ていて良いと思う。「セメスタ(学期制)」 「リフレクション(反映)」等分かりにくい表現は気になる。
- ・各ポリシーに沿った人材育成を期待しております。

企業の人事も、関東学院大学への具体的な期待や、校訓、キリスト教教育、各ポリシーなどについて関心を持ち、地域への参加も期待していることが伺えた。

第3回KGU高等教育セミナー 報告

SD推進部会長 松下倫子

2014年度設置のSD推進部会では7月17日の第1回から継続して「SDとは何か」「学生や学院のために職員として何ができるのか」というテーマで意見交換を重ねてきました。他大学のSD研修会に参加するなど学びの機会を得ることで、最初ぼんやりしていたメンバーひとりひとりの考えは少しずつ明確になり、ひとつの形にまとまってきました。それは、大学などの高等教育機関は人(学生)を成長させることが目的であり、教員と共に職員もその目的のために働いている、というシンプルなものです。

今回の高等教育セミナー企画に際し、自分たちが部会で話し合ってきた経過を他の職員のみなさんにも体験してもらいたいと考えました。まず、同僚のみなさんがどのような問題意識をもっているのかアンケート調査をし、グループディスカッションな

どを通じて問題を共有しようという結論になり、今回のプログラムを構成しました。

アンケートは短期間ながら約180名から回答がありました。結果はOliveOfficeに掲載されています。セミナーの第1部ではSDのイメージや研修委員会との違い、アンケートの分析結果についてパネルディスカッション形式で発表しました。第2部では8人程度の4グループに分かれて、「関東学院大学生と接していて、どのように感じるか」「学生の成長支援SDで自分なら何ができるか」のテーマで話し合い、活発な意見交換ができました。

SD推進部会は、今後も自分たちの目線からのSDについて考え、活動を広げていきたいと考えています。

Kotoken Coffee Hour進行中！

久しぶりに会う友人や知人に『大学で働いている』と伝えると、必ず二段階の反応が返ってきます。最初は『授業しているの！？』と間違われ、職員だと告げると『職員って何をしているの！？』と聞かれます。大学業界に詳しくない人からすると、大学運営は未知の領域であり、通っている学生ですら、どのように管理・運営されているかを知っている人は少ないでしょう。

では、我々職員は所属する部署以外の業務や高等教育の現状

をどれだけ知っているのでしょうか。文部科学省への申請業務と中央教育審議会答申、認証評価機関への報告と認証評価の仕組みなど、日々の業務で頻繁に関わることもないこれらの事柄を、全職員が熟知しているとは言い切れません。しかし、これらは大学人として知っておかなければならない重要事項です。

そして、激動の大学業界においては、日々刻々と状況が変化しているため、常に新しい情報へ耳を傾け続けなければ、一瞬

にして時代遅れになってしまいます。

高等教育研究・開発センターは、このような状況に教職員が
一丸となって立ち向かえるよう、2014年11月から「大学人に必
要な知識共有の場」として『Kotoken Coffee Hour』を毎月1回開

○これまでに議論した主なテーマ

「大学を取り巻く環境について」、「大学改革実行プランについて」、「自校史教育について」、「アクティブラーニングについて」、
「高等教育に関する情報の収集・活用方法」 など

(真山俊介)

【参加報告】昨年度より、横浜市内3大学によるFD・SD連携に参加しています。

昨年度より、横浜市内の3大学(横浜国立大学、神奈川大学、
本学)において、FD・SDに関する連携がスタートしました。
発端は、各地で進む大学間連携を、(連携組織の形態はともか
くとして)横浜の地でも進めていきたいという共通認識のもと、
各大学においてFD・SDを担当する「大学教育センター等組織
(以下、「センター組織」と略称する)」の担当者の呼びかけに呼
応し、賛同したことからです。

現在は、年1回程度の会合(FD活動合同状況連絡会議)を通
じた情報交換に加え、各大学のセンター組織が主催するFD・
SDイベントに相互参加を進めています。本学開催のイベント
においても、2014年9月の「全学教員研修会(FD・SDフォーラ
ム)」を皮切りに、2大学の関係者の皆様に度重なるご参加をい
ただいております。

3大学のセンター組織は、全学FD・SDの推進・支援を行う
という点では共通していますが、それぞれ名称も異なり、学内
における所管業務も微妙に異なります。横浜国大の「大学教育
総合センター」の場合はFD・SD以外にも、入学者選抜、全学
教育、キャリア教育、学生グループによる教育改善(学生FD)
などを担っています。神奈川大の「教育支援センター」の場合は、
学習支援や入学前教育、TA・SA制度の改善と運用などを担っ
ています。このことは、各大学固有の事情や現状の課題もさる
ことながら、FDが取り扱う範囲そのものが多様化・複雑化し
つつあることを示しているように思われます。今後も、高等研
では、各大学の皆様と胸襟を開いたお付き合いを継続し、より
有意義な連携の場となるよう、積極的に参加していく所存です。



写真：当日の様子

(手前右より時計回りに、横浜国立大学、神奈川大学、本学)

催し、多くの教職員と共に研鑽を積んでいます。

2015年8月で10回目を迎える発展途上の会ですが、教員・職員・
上司・部下の垣根なく、気軽な雰囲気の中で熱く語り合いながら、
本学教職員が成熟した大学人になれるよう活動を続けていきます。

■平成27年度FD活動合同状況連絡会議 次第

開催日	平成27(2015)年7月16日(木)	15:30～17:30
会場	横浜国立大学常盤台キャンパス 本部棟(N2-2) 3階 第2会議室	
次第	1. 開会あいさつ (横浜国立大学 長谷部 勇一学長) 2. 趣旨説明 3. 出席者自己紹介 4. 平成26年度～平成27年度春学期FD活動状況 報告(神奈川大学、関東学院大学、横浜国立 大学) 5. 質疑応答等 6. 平成27年度合同FD企画について(提案) 7. その他(意見交換等)	
司会	曾根 健吾	(横浜国立大学大学教育総合センター助手)

■参加者(当日配布資料より引用、掲載順は原文ママ、敬称略)

大学	役職等	氏名
神奈川大学	教育支援センター所長(副学長)、工学部教授	齊藤 隆弘
	教育支援センター副所長、人間科学部教授	杉山 崇
	教育支援センター事務部次長	旭 馨
	教育支援センター課長	柿沼 香奈
	教育支援センター課長補佐	原田千恵美
関東学院大学	高等教育研究・開発センター長(副学長)、法学部教授	出石 稔
	高等教育研究・開発センター専任講師	杉原 亨
	高等教育研究・開発センター専任講師	奈良 堂史
	高等教育研究・開発センター研究員	山田 昭子
	高等教育研究・開発センター企画課長	千葉 隆行
	高等教育研究・開発センター企画課係長	真山 俊介
横浜国立大学	大学教育総合センター長・教養教育主事 大学院工学研究院教授	梅澤 修
	大学教育総合センターFD推進部門長 大学院環境情報研究院教授	上野 誠也
	大学教育総合センターFD推進部担当教員	曾根 健吾
	学務・国際部教務課長	岸 信治
	学務・国際部教務課副課長	関 富士夫
	学務・国際部教務課学務企画係長	栗原 淳
	理工学系大学院等事務部副事務長	馬橋 修一

(奈良堂史)

第4回 KGU高等教育セミナー 外国語による教授法セミナー(入門編)

2015年8月6日(木)、第4回KGU高等教育セミナーとして、「外国語による教授法セミナー(入門編)」を金沢八景キャンパス5号館102「Glocal Area 51」で開催しました。近年、急速に求められている大学におけるグローバル化への対応は、本学においても重要な課題として掲げられています。また、各教職員が、「国際社会で活躍する人材育成とは何か」「本学の学生にとってどのようにグローバル化へ向けた教育が望ましいのか」などについて、様々な意見や想いを持っているのが現状です。

このような状況を踏まえて、本セミナーでは、大学のグローバル化への一つの方策として、「外国語による教授法」を取り上げ、講師として本学の富田茂美先生(宣教師、高等教育研究・開発センター准教授)をお迎えしました。富田先生はカナダでの豊富な教授経験(マクマスター神学大学 教師アシスタ



ント、トゥリニティウェスタン大学 非常勤講師)をお持ちで、且つカナダの大学にて博士号を取得しております。

セミナーは、規矩大義学長の挨拶の後、富田先生からカナダで初めて授業を担当した経験を振り返りつつ、外国語(英語)で教授するために大切なこととして、自分の知っている単語を活用すること、学生の身近な事例を交えること、語句ではなくコンセプトや概念を教えることなどを話して頂きました。

続いて、ICU(国際基督教大学)の事例を基に、どのように外国語での授業を含めたカリキュラムやシラバスを構築していくかについて説明して頂きました。カリキュラムに関しメジャー

(専修分野)では、外国人数員と日本人教員をバランス良く配置していることについて言及し、科目では全て英語で教授するのではなく、授業は英語で行いレポートは日本語でといったように、英語と日本語を組み合わせることで教育効果をあげていく手法などが挙げられました。これらを踏まえて富田先生から、教授するために教員の語学力は一定水準必要であるが、大学として多様なバックグラウンドを有する教員を受け入れることが望ましいという意見を頂きました。多様な世界の現状を、大学に反映することが大切であり、存在すること自体が学生への成長に寄与することでした。また、科目の授業の中で外国語を同時に教える方法もあり、そのためには担当教員の語学力向上のためのトレーニングや、科目担当教員に語学担当教員を組み合わせる方法などがあるとのことでした。

最後に、会場での質疑応答となり、本学の学生の状況を踏まえたグローバル化はどう展開し到達目標をどうするか、留学生や留学を希望する学生への対応、国際学会への発表指導などを話し合いました。夏休み中であり少人数の参加ではありましたが、富田先生のお人柄もあり、知的ながらも和気藹々とした雰囲気でした。今後も高等研では、本学にとって望ましいグローバル人材育成に関して教職員の皆様と一体となって取り組んでいきますので引き続きご協力のほど宜しくお願い申し上げます。(杉原 亨)



FD図書紹介「ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために」

(松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター 編著、勁草書房、2015年)

昨今、文部科学省からの答申などにより、大学の教育現場だけでなく、高等学校以下でも推進が求められているアクティブラーニングについて、本書では基礎的な概念から、様々な学習理論を踏まえた解説、及び授業における導入事例などが丁寧に紹介されています。

本書では「ディープ・アクティブラーニング」という概念を提示しており、それは「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験を結びつけると同時にこれからの人生につなげていける学習」と定義しています。さらにアクティブラーニングにおける能動性を、「内的活動における能動性」と「外

的活動における能動性」の二次元で捉えており、知識の習得や理解も重要な学習であり、アクティブラーニング型授業と対立するものではなく、相補的なものであると指摘しています。

アクティブラーニングは大学教育で求められており、教職員総がかりで取り組むべき手法ではありますが、単純に上辺だけで形式を模倣し、教育効果も検証せずに推進すれば、本末転倒な結果に陥る可能性があります。本書では真に学生の成長に寄与する学修に関して深い洞察が記されています。アクティブラーニングを知るために最もスタンダードな書として強く推薦します。(杉原 亨)

私の授業改善(第1回)

高等教育研究・開発センター 専任講師 杉原 亨

皆様、初めまして。今年度4月に高等教育研究・開発センターに着任しました杉原と申します。今年度の授業として「KGUキャリアデザイン基礎Ⅱ(春学期)」を担当しています。本授業の履修者は76名で、学部は理工、経済、人間環境、建築・環境学部の学生が履修していました。これまでの私は授業のポリシーとして「学生を大人として扱う」ことを掲げており、学生が自ら律して学ぶことを求めつつ、その反面として授業中の座席指定は実施せず、私語の注意なども出来る限り避けていました。しかしながら、一部学生の騒がしい態度で、他の学生の学習を妨げている状況が続いていました。

そんな中、春学期の半ばに、「授業改善アンケート・中間アンケート」をWEB(Olive Class)で実施する機会があり、学生に回答してもらいました。その際、フリーアンサーで複数人の学

生から“騒がしい学生がいるなら座席指定にしてほしい”“先生の注意する時間がもったいない”という意見が挙がりました。私はこの意見を見て、“このままではいけない、授業を真剣に受講している学生に不利益を与えている”と判断し、次の授業からは座席指定を行い、私語が多い学生に対しては成績でマイナス評価をするというルールを共有しました。これ以降、授業は徐々に落ち着きを回復し、ミニッツペーパーの感想にもグループワークなどがやりやすくなった等の意見が出てきました。この経験を踏まえて、今後の授業運営で改善すべき点が多いと感じる一方で、授業がもっと魅力的であれば、学生は集中して受講するように思いました。以上のように、今後も「授業改善アンケート・中間アンケート」を活用していきたいと考えています。

高等教育研究・開発センター専任教員・研究員 自己紹介

准教授

富田茂美

関東学院は131年前にアメリカのパプテストという教会がつくった神学校が種となって始まりました。わたしはそのアメリカンパプテストの協力宣教師です。本大学でキリスト教学などを中心に教えることになりました。キリスト教を高等教育と人間形成の基盤として役立てていただくお手伝いをしたいと思っています。学部の垣根を超えて広く在校生の皆さん、また教職員の方々と親しく交流させていただくことを楽しみにしております。

□ 担当科目

キリスト教学(聖書)／キリスト教学(技術者としての倫理)／
キリスト教と現代社会／キリスト教と現代思想

専任講師

杉原 亨

2015年4月より高等教育研究・開発センターに専任講師として着任しました杉原 亨(スギハラ トオル)と申します。これまで、民間企業で大学生向けのキャリア教育教材の開発や、高等教育機関へのコンサルティング、及び中部地区の学校法人にて経営・教学改革の実務や、キャリア教育の講義などを担当していました。今後、高等研にてFDをはじめとする教学に関する環境整備に取り組んでいきますので宜しくお願いいたします。

□ 担当科目

KGU キャリアデザイン基礎Ⅱ

専任講師

奈良堂史

本年4月より、専任教員として奉職いたしました、奈良堂史(ナラ タカシ)と申します。2013年のセンター開設時より委託研究員として関わらせていただき、本年が3年目になります。専門分野は、経営学、キャリア教育、スポーツ・マネジメント論です。高等研は、全学的な教育施策の開発・企画を行うセクションであると同時に、学内へのアドバイジング機能をもつ研究機関でもあります。学内教職員の皆様と密に連携を図りながら、本学の教育力のさらなる向上に寄与するセンターとなるべく、微力ながら全力を傾注して取り組む所存です。

□ 担当科目

KGU キャリアデザイン基礎Ⅰ・Ⅱ

研究員

山田昭子

2015年4月より高等教育研究・開発センター研究員として参りました山田昭子と申します。専門分野は日本近現代文学です。これまで大学という場所には学ぶ側として長くとどまっておりましたが、今後は高等研にて全学的教育プログラムの企画・開発や教育改善活動を通し、新たに学んだことを活かしていけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

eラーニングシステム「KANTOれ」はじめました！

2012年度より、正課外の補習講座として全学的に実施しておりました「大学生基礎力養成講座」に、eラーニングシステム「関東学院大学 大学生基礎力トレーニングシステム」(愛称「KANTOれ」)を導入しました。

昨年度は、講師による講義と学生・教職員による学習サポーターによる自学自習のサポートを中心とした内容でしたが、対象となった学生の理解度に大きな開きがあり、教材や講義内容のレベルに対して、「難しい」「易しすぎる」と、双方の不満の声が挙がっていました。多様な学生のニーズに応えるため、高等研にて検討を重ねた結果、個々の学生の理解度に対応できるeラーニングシステムを2015年度より教材として採用することとしました。

昨年度、受講学生からも評価の高かった学習サポーター制度による自学自習のサポートの場はPC教室に場を移し、「KANTOれ」での学びのサポートの形で継続します。

今回採用した「KANTOれ」は、PCだけではなく、タブレットやスマートフォンにも対応しており、時間と場所を選ばず学習が可能です。また、大学生基礎力養成講座の対象となる数学と国語の他、英語、社会、理科も用意されています。大学の授業を理解するために必要な基礎学力や就職に必須となった一般常識試験への対策力を身につけることができます。あわせて、SPI対策コースもあり、キャリア教育全般に対応するシステムとなっています。

(千葉隆行)



告知

2015年度全学FD・SDフォーラム

- 主題：『アクティブラーニングの実質化（仮）』
- 講師：立命館大学 教育開発推進機構 准教授 川那部 隆司 氏
- 日時：2015年9月2日（水） 15時00分～17時00分※全学教員研修会（13：00～）の中で開催。
- 会場：フォーサイト 21 F302 教室（金沢八景キャンパス）

【開催主旨】

本フォーラムでは、大学だけでなく、高等学校以下でも推進が求められている「アクティブラーニング」をテーマとし、本課題に係る基礎的事項から具体的な作成方法に至るまで、理論と実務、双方の疑義に応え得る機会としたい。なお、講演では、グループワーク等を行い、実際にアクティブラーニングを体感できる機会を設ける。

第6回 KGU高等教育セミナー

- 主題：『カリキュラムを“可視化”する方法
——マップ、フローチャート、ナンバリング等の一体的理解へ——（仮）』
- 講師：大阪大学 教育学習支援センター 副センター長 佐藤 浩章 氏
- 日時：2015年11月14日（土） 13時00分～16時30分
- 会場：フォーサイト 21 10階大会議室（金沢八景キャンパス）

【開催主旨】

周知の通り、本学における教育の質保証体制の構築は、3ポリシーの再策定（全学・各学部）に続き、カリキュラムマップ等の作成段階に入っています。本セミナーでは、3ポリシーの再策定に続き、上記課題についての第一人者と称される 佐藤 浩章氏にご登壇いただき、講演とワークショップ（カリキュラムマップ等の作成体験）を開催する予定です。貴重な機会となりますので、皆様奮ってご参加ください。



[Top News]

学年暦の抜本的見直しに向けて

学年暦の見直しに関するWG座長 副学長 出石 稔

2016年度の大学学年暦が10月の学部長会議で決定しました。基本的には今年度と大きな変更はありません。しかし、この学年暦が決定するまでは曲折がありました。

現在の学年暦は、定められた学期のなかで、授業回数の確保、試験期間の確保に加えて、集中講義や語学研修、就職活動やインターンシップへの配慮、入試日程などのさまざまな制約を受けているといわざるを得ません。さらに、正課、正課外を問わず大学行事や社会貢献活動などが活発になるにつれて、学年暦の策定・運用は年々難しくなっており、祝日の多くを授業日に設定せざるを得ないほか、新入生に対して十分なオリエンテーション期間を設けることが難しかったり、試験が集中したりするといった問題を常に抱えています。

そこで、学長のリーダーシップの下、教務部において学年暦の改善の余地がないか検討を行い、本学独自方針を打ち立て、9月の学部長会議で新たな学年暦の承認を得たところでした。しかし、講義回数と授業時間、試験実施方法など、解決すべき課題が残り、各学部より運営上の問題の指摘もなされたことから、従来型の学年暦に戻すという結果となりました。

一方、この結果は、学年暦の課題について先送りしたに過ぎません。この本質は、教育の質を保証しつつも、学生の教育

効果がより一層高まり、課外活動や社会活動の時間や他大学との交流機会なども確保することができ、教職員にとっても負担感が少なく、教育・研究に十分な時間を費やすことの出来る学年暦(授業カレンダー)を実現することができるかどうかということです。

そこで、このたび、学部長会議の議を経て、「学年暦の見直しに関するワーキンググループ」を設置しました。このWGの使命は、抜本的な学年暦改革を学長に提案することです。

WGで検討するに当たって、学長からは、①2017年度からの学年暦(授業カレンダー)を検討する、②出来る限り祝日を授業日としない、③春学期のオリエンテーションに十分な時間を確保する、④休業明けの授業開始日について地方出身学生の移動(帰省・帰学)時における交通機関の繁忙期について配慮する、⑤地方出身の学生が地元の成人式に参加できる環境を確保する、といった事項が示された上で、(1)緩やかなクォーター制の模索や、(2)授業回数(15回)、授業時間(90分)などの全ての前提を排除した検討が求められています。

「未来ビジョン」とも重なる取り組みとなりますが、固定観念を排し、制約のない議論を重ね、抜本的な学年暦の見直しを提案できるようにしたいと考えています。

Glocal Area51がオープンしました！ (2015.11.4)

金沢八景キャンパス5号館1階にて、Glocal Area51のオープニングセレモニーが開催されました。当日は学長、各学部長をはじめとし、本学卒業生であり、先ごろ本学と包括協定を締結した葉山町の山梨崇仁町長をお招きし、懇親会では学生も打ち解けての会となりました(左写真)。Glocal

Areaは学生の皆さんがGlobal(国際的)な視点でLocal(地域)に貢献・活躍できる場として開設しました。様々な交流やイベント、ゼミ発表、休憩場所など自由に利用できる多目的なスペースです。積極的な利用をお待ちしています。



[Event Report 1]

第5回 KGU高等教育セミナー 高大接続を考える ―魅力ある大学に必要なSD活動とは―

2015年度 第5回 KGU高等教育セミナープログラム (抜粋)

開催日 2015年8月19日(水)

時 間 14:00～17:00

場 所 金沢八景キャンパス 5号館1階101ホール、
第5会議室

1. 各校挨拶(14:00～14:10)

森下 信氏 (横浜国立大学 理事、副学長)

齊藤 隆弘氏 (神奈川大学 副学長、教育支援センター
所長)出石 稔 (関東学院大学 副学長、高等教育研究・
開発センター長)

2. パネルディスカッション(14:10～15:00)

パネリスト: 岸 信治氏(横浜国立大学教務課長)

旭 馨氏(神奈川大学教育支援センター
次長)

安田智宏 (関東学院大学広報室長)

司 会: 千葉隆行 (関東学院大学高等教育研究・
開発センター企画課長)

3. グループディスカッション(15:20～16:20)

4. グループ発表(16:20～16:50)

5. 閉会挨拶(16:50～17:00)

水越 茂(関東学院大学事務局次長(教学担当))

6. 情報交流会(17:30～19:00)

Global Area 51 (5号館1階)

2015年8月19日(水)、第5回KGU高等教育セミナー「高大接続を考える―魅力ある大学に必要なSD活動とは―」を金沢八景キャンパス5号館1階101ホールにて開催しました。横浜国立大学、神奈川大学、本学はFD・SDに関する3大学連携を昨年度より開始しており、今回は本学を会場に2大学をお招きしての企画開催となりました。

冒頭は各大学副学長の挨拶ではじまりました。森下信副学長(横浜国立大学)からは、ぜひ次回は高校の教員も交えてこのような取り組みを、とのお話がありました。齊藤隆弘副学長(神奈川大学)からは三大学連携の経緯について、出石稔副学長(本学)からは、今回のセミナーが本学の第十回Kotoken Coffee Hourも兼ねているということについて説明がありました。

続くパネルディスカッションでは、後半のグループディスカッションの話題提供という意味も兼ねて、高大接続に関する各大学の取り組み報告がなされました。

旭馨氏(神奈川大学)からは、学内で行われた過去のセミナーや、近隣の住民を招いての勉強会の様子についての報告があり、現在の高校生が大学入学へのイメージを持つ一方、入学後のビジョンに乏しいことや、大学が「開かれる」ことの必要性について言及がありました。安田智宏広報室長(本学)からは「大学の魅力」についての話がありました。入学してくる高校生たちが持つ漠然としたイメージを、いかにして社会が求めている人材像に変えていくか、ということへの問いかけがなされました。

岸信治氏(横浜国立大学)は、3大学の中でも唯一の国立大学としての立場からお話がありました。教員養成大学としての使命についても触れ、授業だけに限らずキャンパス全体で学士課程を支援することの大切さについてのお話でした。

質疑応答では高校生と大学側とのギャップについて話が及び、フロアからは大学の魅力を伝えることだけに特化せず、高校生が大学、更にはその先で何をしたいのか、をフォローしてやる必要があるのではないかと指摘がありました。

セミナー

の後半は場所を移し、パネルディスカッションです。掲げられた2つのテーマ、①職員につくれる



(写真)パネルディスカッションの様子

「大学の魅力」とは? ②魅力ある大学で、職員が果たすべき役割とは? について6つのグループに分かれ、討議ののち、グループ発表に入りました。1つ目のテーマでは、あるグループから大学の魅力を伝えるには具体性、シンプルさが必要であることへの指摘があり、その大学の魅力と就職率が必ずしも一致するわけではない、ということ挙げたグループもありました。それらの意見が出た背景には、大学の価値パターンを限定することなく、多様性を認めることが重要になったこと、一方で学習支援などの細かな目配りが求められるようになったことが挙げられます。

続く2つ目のテーマでは、学生を自発的にさせるきっかけづくりが求められていることが意見として挙げられ



(写真)グループディスカッションの様子

ました。そのためには学生に対する適度な干渉も必要であるといえ、様々な職員との接点を学生たちに持たせることによって、経験を積ませるといふこと、学生が接する身近な社会人としての役割を担うことの重要性が語られました。

その後の情報交流会でも話題は尽きず、セミナーで話し足りなかった内容について会話は弾み、盛況のうちに終了となりました。ご参加いただきました3大学の皆様、ありがとうございました。今後も3大学間の連携がますます強まることを願ってやみません。

(山田昭子)

[Event Report 2]

2015年度 全学FD・SDフォーラム 『アクティブラーニングの実質化に向けて』

2015年度 全学FD・SDフォーラム

『アクティブラーニングの実質化に向けて』

開催日 2015年9月2日(水)

時 間 15:00～17:00

場 所 金沢八景キャンパス フォーサイト21 F302教室

講演・ワークショップ

講 師：川那部 隆司氏

(立命館大学 教育開発推進機構 准教授)

司 会：杉原 亨(高等教育研究・開発センター専任講師)

2015年9月2日(水)、全学教員研修会のプログラムの1つとして、全学FD・SDフォーラムを開催しました。今回のフォーラムでは、国からの様々な答申を踏まえて、大学の教育現場だけでなく、高等学校以下でも意欲的な取り組みが数多く報告されているアクティブラーニングをテーマに取り上げました。

このような背景を踏まえて、本学同様に多数の学部を有する大学の現場で、教学施策の立案・運営などに取り組んでいる川那部隆司先生(立命館大学 教育開発推進機構 准教授)を招聘し、「アクティブラーニングの実質化に向けて」について講演及びワークショップを開催しました。



(写真)川那部先生の講演

講演では、アクティブラーニングの定義に関して、現在の諸説を紹介しつつ、大枠で「聴く」あるいは「聴いて考える」以外の活動のある学習のこと」ということを伝え、「聴く」以外の学習活動として、ディスカッションやPBL(Project-Based Learning 課題解決型学習)を示しました。

次に、現場からのアクティブラーニングの実践事例として、教員と学生との双方向性を高め、コミュニケーションを促進するために、学生が授業終了時に意見や疑問・感想などを書く手法(大福帳、授業通信など)を紹介しました。また、川那部先生のオリジナルメソッド「Kノート」について説明し、特徴として、授業に対する意見・質問などの記入欄に加え、授業外での学習成果(自主学習)の記入欄を設けることで、学生が資料や文献にあたり、調べたことや新たにわかったことを記録できることや、毎回の提出ではなく、複数回の授業(3～4回)に1回提出を求めることなどを挙げていました。



(写真)全体の様子

アクティブラーニングの評価方法について、ルーブリック(rubric)に注目しており、ルーブリックについて2つの特徴に触れた上で(①成果物に求めるものを複数の観点に分け、観点ごとに到達度の段階的な水準を設け、マトリクスで表現したもの。②成果物の質的な到達度を量的に点数化してアセスメントするためのツール)、レポートや研究論文、プロジェクト活動で活用されることが多いと言及していました。

講演の後、グループワークに移り、4～5人の教職員でグループになり、2つの課題に取り組み、いくつかのグループの代表者がグループでまとめた意見を発表しました。

【課題1】学習意欲の差への解決策

(調べ学習の際、グループ間で意欲の差が大きく、一部学生が調べ学習やプレゼンなども全て行っている状況)

【課題2】議論ができない学生への解決策

(授業時間内に、ペアやグループでのディスカッションの時間を設けたところ、学生たちは不真面目なわけではないが、活発な話し合いが行われない)



(写真)グループワークの様子

終了後のアンケートからは、内容面に関して94%参考になった(大いに+やや)という結果が出ていることから、教職員に対して、アクティブラーニングに関しての理解の深化と推進の一助となったように考えられます。今後も環境変化し続ける高等教育の動向を共有しながら、教育現場への貢献ができるよう企画立案していきたいと思っております。

(杉原 亨)

[Event Report 3]

第6回 KGU高等教育セミナー カリキュラムを可視化する方法 ～マップ、フローチャート、ナンバリング等の一体的理解へ～

第6回 高等教育セミナー

「カリキュラムを可視化する方法」

～マップ、フローチャート、ナンバリング等の一体的理解へ～

開催日 2015年11月14日(土)

時 間 13:00～16:30

場 所 金沢八景キャンパス フォーサイト21
10階大会議室

参加者 64名(主催者及び関係者を除く)

1. 開会の挨拶・主旨説明(13:00～13:10)

高等教育研究・開発センター長/副学長 出石 稔

2. 講演・ワークショップ(13:10～16:20)

大阪大学教育学習支援センター副センター長
佐藤 浩章氏

3. 閉会の挨拶(16:20～16:30)

教務部長 奥 聡一郎
司 会 高等教育研究開発センター専任講師
奈良 堂史

1. 開催の主旨と狙い

学内の皆様はすでにご存知の通り、本学では2013年に大学基準協会による認証評価「関東学院大学に対する大学評価(認証評価)結果」における指摘を契機として、カリキュラムマップの作成を検討してまいりました。

カリキュラムマップとは、端的に言えば「学位授与方針(学生に身に付けさせる能力)と教育課程(カリキュラム)との有機的つながりや関係性を明示した図」のことです。別のいい方をすれば「文章では複雑かつ難解な「教育課程の編成・実施方針(カリキュラムポリシー)」を可視化・図表化したもの」ということができます。

その役割は多様で、①在学中の学生にとっては、自らが学ぶ学問の体系的な履修順次性、複数の科目間の関連性や連続性の理解など、「メタ認知」としての学習効果があるといわれています。一方、②教職員にとっては、カリキュラムの現状と課題を把握するためのマネジメントツールであるとともに、受験生や保護者・高校の進路指導者に対するプレゼンに使用するマーケティングツールにもなり得るものです。

今回のセミナーでは、これらの課題に精通する第一人者であ



(写真1) 当日の会場内の様子

られる佐藤浩章先生(大阪大学准教授)をお迎えし、本学のカリキュラムマップ作成を進展すべく、講演と作業体験型のワークショップ(以下、適宜「WS」と略称する)を開催しました(写真1)。なお、佐藤先生は、第2回の高等教育セミナー(テーマは「3つのポリシーの策定」)でもご登壇いただいております。前回と今回(3ポリシーとマップ)の関連性を強調しつつ、WSを展開していただきました。

2. 講演・ワークショップの内容

WSでは、学科(又はコース)ごとにグループとなり、カリキュラムマップの作成が次のような手順で進められました。

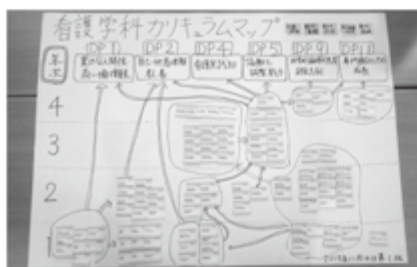
- ①学科が提供する全科目を宛名ラベル(シール)に印字する(今回は高等研にて事前準備。参加者諸氏の作業は②～⑤)。
- ②授業科目名の入った宛名ラベルを付箋に張る。
- ③模造紙上に科目を並べる。
- ④矢印や囲み、アイコンといった図解表現を用いて関係を示す。
- ⑤完成後にポスター発表を行い、他学科の教職員からのフィードバックを受ける。

全体を通じて3時間半(うちWSは約2時間)という限られた時間の中で、全学科が十分なマップを完成できたわけではありませんが、先生方の活発な議論と生き活きた雰囲気の中、あっという間に時間が過ぎていきました。各分野の専門家が集結してカリキュラムを議論するということは、基本的に楽しい作業であるということを再認識できた瞬間でもありました。多くの学科で「力作」と呼ぶにふさわしいマップが完成していきました(写真2)。

参加者アンケートからも、「カリキュラムを俯瞰する良い機会となった(理工学部)」「アナログ的な作業が意外と良かった(社会学部)」「カリキュラムマップ(フローチャート型)の作成手順が良くわかった。体験を通じて理解できた(法学部)」や「完成年度以降のカリキュラム改善に向けた課題と方向性がわかった(看護学部)」といった好意的なご感想をいただきました。一方、入試前日の土曜日という開催日程については、「もう少し考慮してほしい」といったお叱りの声や、「ワークショップの場合、事前課題の有無も予め告知してほしい」といったご指摘もいただきました。今後の企画立案に向けた反省点・改善点とさせていただきます。

また、佐藤先生のWSに対する講評・質疑応答の場面では、「関東学院大学は(佐藤先生が過去にWSを行った他大学と比較して)科目の数が多いがゆえに、DPと各科目のつながりや、専門科目と教養科目の有機的な関連の明示など、積極的にカリキュラムを可視化・図式化するツールを使っていくべきである」とのアドバイスをいただきました。

最後になりますが、当日のワークショップにて使用した「模造紙」「振り返りメモ」「科目名ラベルシール」「付箋」などは、貴重な学びの記録として現物・データともにご参加いただいた各



(写真2) ワークショップ成果物の一例(看護学科)

学科の皆様へ返却させていただきます。引き続き、カリキュラムマップの作成・検討に役立てていただければ幸いです。

(奈良堂史)

[KGUキャリアデザイン入門]

2015年度 1年生向けアセスメント「大学生基礎力レポート」結果について(要約版)

1. アセスメント概要と目的

実施時期：2015年4月6日(月)、8日(水) ※KGUキャリアデザイン入門 第1回授業内で実施

受検者数：受検者数合計2,574名 ※全国受検者数合計84,542名(5月末時点)

目的：(学生)KGUキャリアデザイン入門の教材、自己理解ツールとしての活用／(大学)大学生基礎力養成講座対象者の抽出／入学生の実態(ニーズやスキル)の把握／FDIR等の基礎データ など

設問項目：①能力的評価(基礎学力、批判的思考力) ②行動的评价(協調的問題解決力)

③アンケート(期待、学習習慣、進路意識等)

2015年度受検者数内訳 単位：人

学部		全学	経済	法学	人間環境	理工	建築環境	看護	社会	教育学	国際文化	栄養
合計		2,574	695	192	266	469	132	84	196	143	287	105
入試区分	一般	872	301	68	51	181	39	52	35	36	75	32
	推薦	960	219	60	110	127	42	27	121	67	139	48
	AO	472	109	37	92	79	32	0	23	31	48	20
	センター	230	50	25	9	77	18	4	14	7	21	5
	留学生	9	4	0	1	3	0	0	0	0	0	0
	その他	9	1	0	3	1	1	0	0	2	1	0

2. 結果の要約

※本アセスメントは設問が多岐に渡るため、今回は「大学の魅力」「学びへの意識」「協調的問題解決力」に絞って掲載します。

①大学の魅力…入学生は何を魅力と感じて入学しているのか、期待はどこにあるのか

※表中の数字は選択率％／全学平均上位6項目ずつを抜粋

		全国平均	全学平均	経済	法	人間環境	理工	建築環境	看護	社会	教育	国際文化	栄養
大学全体	自分が学びたい学問分野が学べる	49.4	49.8	38.6	45.3	47.4	56.1	74.2	51.2	55.1	52.4	55.1	51.4
	取りたい資格や免許が取得できる	24.2	26.3	16.0	26.0	19.2	19.0	26.5	35.7	35.7	68.5	22.6	72.4
	自宅から通える	12.9	17.8	19.7	16.1	18.4	20.3	8.3	20.2	23.0	7.7	16.4	14.3
	クラブ・サークル活動、部活動が盛んである	9.9	15.4	20.6	8.9	19.5	16.4	5.3	8.3	19.4	6.3	15.0	3.8
	キャンパス・学生の雰囲気がよい	13.9	14.6	15.3	23.4	19.9	11.7	10.6	21.4	9.2	14.0	8.4	21.9
	カリキュラムや学び方に魅力・特色がある	17.6	13.6	14.1	12.5	19.2	11.5	25.0	6.0	11.7	10.5	13.9	5.7
学問内容	学ぶことができる学問分野・領域に特色がある	39.2	35.9	34.1	27.1	44.0	38.6	53.0	25.0	46.9	21.0	31.0	30.5
	資格や免許取得の支援が充実している	28.8	27.2	23.2	20.8	18.4	20.3	24.2	32.1	35.7	58.0	27.5	60.0
	専門科目を低学年から学べる	12.5	18.6	17.8	11.5	22.9	23.0	23.5	15.5	15.8	24.5	12.5	15.2
	特にない・わからない	17.2	18.6	26.3	16.1	16.5	21.5	13.6	14.3	10.2	8.4	15.3	12.4
	教養教育が充実している	18.1	16.6	17.1	15.1	16.5	14.7	13.6	21.4	19.4	27.3	13.9	13.3
	専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる	14.7	15.6	16.5	29.2	13.2	19.6	28.0	4.8	11.2	9.8	7.0	4.8

(大学全体)

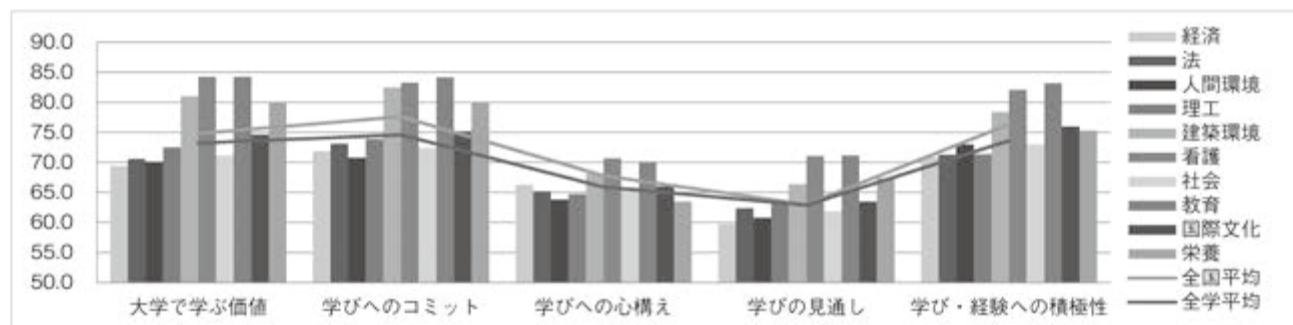
- ・全国と全学を比較すると「クラブ・サークル活動が盛ん」の回答が高く、15.4%の選択率。
- ・今年度新設の教育学部と栄養学部は、それぞれ約7割が「資格や免許を取得できる」を選択。資格への期待が強い。
- ・建築環境学部の「自分が学びたい学問分野を学べる」選択率が非常に高く、74.2%。
- ・今年度改組の国際文化学部の30%が「留学や国際交流が盛ん」を選択しており、これは英語文化学科(40.9%)が数字を引き上げている結果。※全学平均としては上位に挙がっていないので表への記載はありません。

(学問内容)

- ・全国と全学を比較すると、「専門科目を低学年から学べる」(18.6%・特に経済学部、人間環境学部、理工学部、建築環境学部、教育学部)、「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」(14.5%・特に法学部、看護学部、教育学部、栄養学部)が高い結果。
- ・建築環境学部の「学びの分野に特長がある」の選択率が高く53.0%。
- ・教育学部と栄養学部の「資格や免許取得支援の充実」の選択率が約6割。
- ・国際文化学部の「語学教育の充実」の選択率が53.3%(特に英文学科62.8%) ※全学平均としては上位に挙がっていないので表への記載はありません。

② 学びへの意識…大学教育を受ける「構え」はどのような状態なのか、どのような機会提供を行えば学生が成長するのか

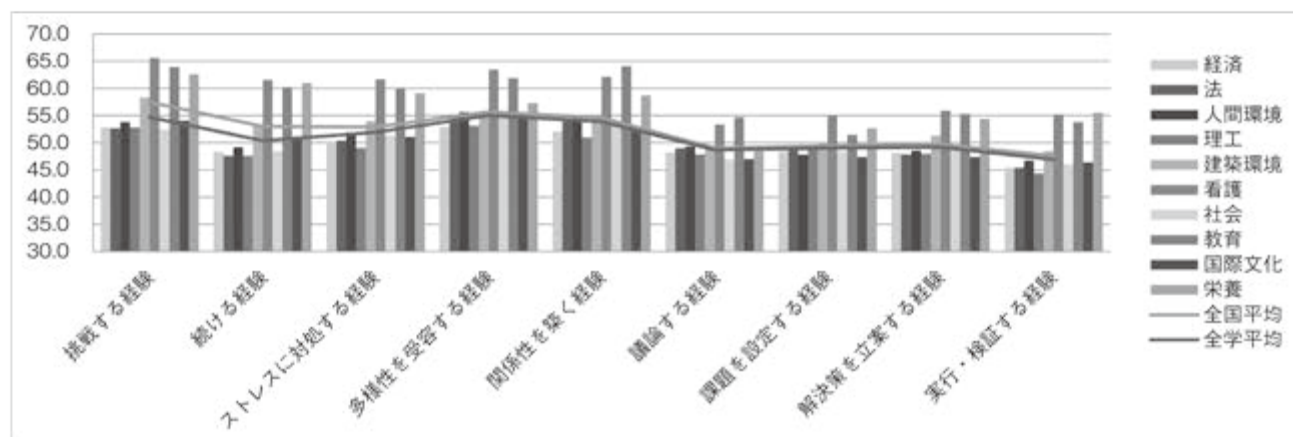
※グラフ中の数字は達成率(%)



- ・全学として相対的に高いのが「学び・経験への積極性」。設問としては、「新しいことを学ぶのは楽しい(全学肯定回答率88.0%)」「教員や仲間の中で積極的に意見を交換したい(全学肯定回答率83.0%)」など。学部としては、看護学部と教育学部が高い。
- ・全学として相対的に低いのが「学びの見通し」。設問としては「授業で求められるレベルはクリアできる(全学肯定回答率60.8%)」「卒業までに何を学んでいくのかイメージできる(全学肯定回答率67.9%)」などで、これは全国平均とも同様の傾向。

③ 協調的問題解決力…社会で求められる「チームで問題を解決する力(経験)」はどの程度備わっているのか

※グラフ中の数字は達成率(%)

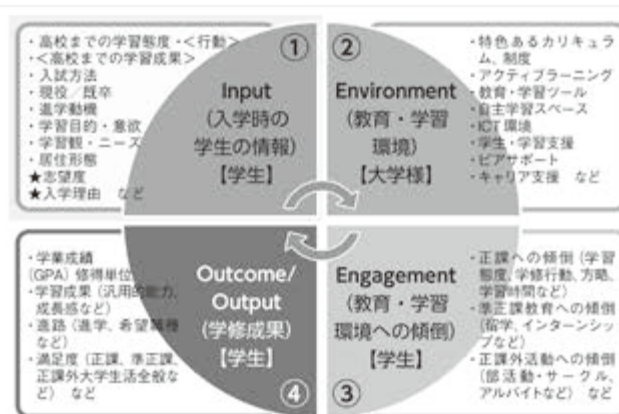


- ・全学平均と全国平均を比較して、少し差があるのが「挑戦する経験(全学平均達成率54.7%)」と「続ける経験(全学平均達成率50.4%)」。設問例は「目標を持ったなら実現のための計画を立てた」(全学肯定回答率32.3%)／「苦手なことでも続けられるように工夫をした」(全学肯定回答率30.3%)。

3. 今後に向けて

右の図は、「大学生基礎力レポート」の開発にご協力いただいた(株)ベネッセキャリアが提唱している「IEEOモデル」というものです。今回の1年生向けアセスメントは、図中の黄色で示される部分、すなわち「①」にあたるものです。

今後は、本学がすでに行っている各種学生調査やコンピテンシーテストなどの結果も踏まえつつ、「カリキュラムの中でどのような機会提供をしていくことが学生の成長につながるのか」「そのためにはどのような教授法が適切か」といった、図中②で示されるような具体的な教育改善に向けた議論を、さらに盛り上げていく必要があると思われます。今回の結果が、そのためのマイルストーンの1つとなれば幸いです。(奈良堂史)



※参考：学修成果に至る過程のデータ「IEEOモデル」

【学内におけるFD・SD活動紹介】

看護学教育におけるFDマザーマップの紹介

看護学部教務主任 平田明美

「FDマザーマップ」は千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（看護学教育研究共同利用拠点）の「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」によって開発されました。

看護系大学教員に求められる能力を行動レベルで示したマップを開発することで、FDの企画・実施・評価に関する大学間の交流の促進と、看護系大学の人的・物的資源を相互に活用し合う体制を構築しようとするものです。これを参考に大学独自のマップを作成することが意図されています。

FDマザーマップは、「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「運営」から構成され、それぞれの区分ごとに、看護系大学教員に求められる「能力」の要素が示されています。図1に区分の関係性と、区分に含まれる要素を示しました。

また、FDの対象となる教員の能力については、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大してできる」の3段階になっています。この能力の要素と細目を縦軸に、能力のレベルを横軸に配置した表で診断し、個人が発達段階のどこに位置しているか、課題は何かを見極めることができます。あるいは組織として、所属教員の強み・弱みを把握し、能力向上

のためのFD企画に役立てることもできます。

文字化され様々な活用が期待されるマップですが、限界も指摘されています。例えば「教育」マップには、看護学教育に特化した能力のみが示されており、専門分野を問わず大学教員として普遍的に求められる能力について言及されていません。このような限界を踏まえつつより有効な活用が現在も検討されています。



図1 看護学教育におけるFDマザーマップ全体構成

人間環境学部・栄養学部・教育学部合同教員研修会(9月9日(水)開催)報告

人間環境学部(4学科)教務主任 鈴木公基

人間環境学部改組後初めての教員研修会が9月9日(水)の14時より開催されました。改組に伴って、今年度は「人間環境学部・栄養学部・教育学部合同教員研修会」という形をとりました。

今年度のテーマは「新入生からの学生ケア～休退学の予防に向けた理解と実践」でありました。学生が日々の大学生活を充実して過ごし、自身の適性と能力を伸張させることは、大学教育における重要なテーマですが、さまざまな要因によって大学生活をうまく送ることができない学生も少なくありません。このような学生に対しても、適切な支援を提供し、充実した大学生活を実現させることは学生サービスの向上という点においてばかりでなく、中途退学及び休学の防止という点においても重要と考え、今回のテーマを設定しました。

研修会では、この問題に詳しい明星大学人文学部心理学科教授・日本学生相談学会理事の福田憲明先生からご講演をいただきました。講演では、学生に対するリスクアセスメントを具体

的な観点から解説していただきました。さらに、充実した学生生活のためには学生の自立性涵養がキーとなること、大学にできる対応の基本は、魅力ある学びのコンテンツおよびプロセスを提供していくこと、との示唆をいただきました。一人ひとりの教職員が意識しておくべきキーワードとして「受動passiveから能動active」を提示していただき、教職員の側から出向いて支援を与えていくことの重要性を指摘していただきました。質疑・応答では、それぞれの学部・学科の特性に応じた課題が提示され、それに応じた理解・支援のポイントについて丁寧なご助言をいただくことができました。

この研修会が、今後、教職員と学生とのよりよい関係性へとつながり、学生一人ひとりの大学生活が充実へとつながることを祈っております。最後に、ご講演をいただきました福田先生、また、ご参加いただきました教職員の皆様はこの場を借りて御礼申し上げます。

SD推進部会報告

この夏、SD推進部会員三名(荒井・佐野・眞山)は、本学就職支援センター主催(旭化成アミダス株式会社・神奈川新聞社共催)の「課題解決型インターンシップ」の社会人トレーナーとして「学修する学生(一～三年生約四十名)」を指導しました。

「課題解決型インターンシップ」は、夏期休業期間に行われる

正課外講座で、単位取得はできないため、言わば「やる気のある学生」が集まった形ですが、その中でも積極的に学ぼうとする姿勢を周囲にアピールできている学生と、学ぶ姿勢からは積極性が感じられないが何とかしようともがいている学生に、二極化していることに気づきました。

「今更気づいたのか」と思われるかもしれませんが、多くの職員はそのような学生の様子を実際目の当たりにしているのでしょうか。「誰かがそう言っていた」「今の学生はそういう感じだ」と他者の意見や感覚で学生をひと括りにしていないでしょうか。

職員は「授業」という学生と常に接する場を持ちませんが、教員よりも長時間学内にいる場合が多く、学生にとっては「いつも居る人」です。積極的な学生は、各窓口や支援室等「いつも居る」職員のところへ足を運び、色々な話をすることができますが、消極的な学生はなかなか行動に移せません。

本学は、学院ブランドデザイン「教育方針と目標」で「学生一人ひとりに向き合って、その個性と才能を育みます。」と表明しています。SD推進部会では、多くの職員が学生一人ひとりに向き合いその成長を支援できるよう、これからも積極的に活動して参ります。

SD推進部会

荒井修二(情報科学センター運用課)

佐野敬介(教務課)

眞山俊介(高等教育研究・開発センター企画課)

私の授業改善

法学部 道幸俊也

はじめまして、法学部にてキャリア教育を担当しています道幸俊也(みちゆきとしや)と申します。普段の授業で実施している取り組みを2つご紹介いたします。

まず1つは「カタルタ」を活用したロジカルシンキングのトレーニングです。毎回授業の終わりにリフレクションペーパーにお題を出して、自分の考えや意見をまとめて書いてもらいます(時間は10分)。その際、接続詞(順接・逆説など)や副詞が1枚ずつに表記されている「カタルタ」から学生の代表に2枚引いてもらい、その言葉を必ず入れて書くという方法を実施しています。どのような言葉が引かれるか、学生達もドキドキしていますが、引いた代表には恨みっこなしで取り組んでもらいます。これまではただ「書く」という作業だけにとどまっていたのですが、導入後は必死で考えないと論理がつかないため、隣と話をしながら等がなくなりました。こちらは今年私が京都大学の第4期MOSTフェロー(来年3月の第22回大学教育研究フォーラムでは「課外型PBLの成果物を活用した反転授業の試み」について発表予定)として関わっている「MOS宝」(<https://most-keep.jp/>)



treasure/mosttreasure/)にも掲載させていただいています。

次に、アクティブラーニングの方法としてジグソー法やポスターツアー法などがありますが、その中でもポスターツアー変則型をご紹介します。通常のポスターツアーは4人グループなどになり、それぞれ各人に背番号を割り当て、その背番号同士のグループを再編して、そのグループごとに時計回りに移動し、自分の作成したポスター(模造紙に付箋紙を活用して表現)に回ってきたら説明するという方法で主体性(発表)やチームワーク(共同作業)を醸成する取り組みですが、初学年や若い授業回ですと、学生たちも緊張感があり、消極的になってしまいます。そこで、通常の方法ではなく元のグループをA班とB班の2つに分けます。各グループのA班が先に他のグループへ説明を時間内に聴きに自由に回ります。B班は他のグループのA班が来たら端的に説明をする、という方法です。通常のポスターツアーは必ず全員が発表するので初期段階では抵抗感を抱く学生もいますが、まずはこの変則型で慣れてもらい、徐々に本来のポスターツアーへと移行するようにしています。この変則型でも共同作業によるチームワークを意識させるようにしています。以上、2つの取り組みを紹介させていただきました。もしよろしかったらお試しください。

告知 『高等教育研究・開発センター 年報』2号の原稿を募集します!

学内外の優れた教育実践の事例および学術研究の成果等を周知・共有化するため、高等研の『年報』を発行しております。本学の教員・職員・非常勤、各位の積極的なご投稿および外部有識者のご寄稿・ご推薦をお待ちしております。

【投稿要領 (略)】

- (1) 書式は、A4 版用紙を縦位置、横書きで使用し、ワープロ(PC)で作成。Wordによって読み取り可能な文書ファイル形式とする。
- (2) 分量は、40字×30行を1頁とし、研究論文は15頁以内、実践報告は10頁以内、文献紹介等は1頁以内とする。(図表、注および参考文献等を含む。)
- (3) 図表は、本文中の適切な箇所に自らレイアウトして記載する。
- (4) 注および参考文献等は、原稿末尾に一括して記載する。

※投稿締切：2015年5月末日、下記メール宛・添付。

※採否は高等研センター会議の審議により決定。

(詳細は、高等研までお気軽にお問い合わせ下さい!)

発行

関東学院大学高等教育研究・開発センター
TEL 045-786-7809 FAX 045-786-7852

〒236-8501 神奈川県横浜市金沢区六浦東 1-50-1
E-mail kotoken@kanto-gakuin.ac.jp

2015年12月10日発行

研究実績報告

Annual Report of Center for Research and Development of Higher Education, Kanto Gakuin University

1. 教育活動

(1) 本学における担当授業科目

授業科目名	2016年度方針・計画
キリスト教と現代社会 (B)	現代社会に横たわる主な倫理的諸問題について、キリスト教の基本的な人間観、世界観、自然観、倫理観から観察、理解、評価する。また、個人的見解を展開、発展させる。
キリスト教と現代思想 (B)	キリスト教の思想における人間観を学び、現代社会とその思想への関わりを調べる。更に、20世紀のキリスト教思想家、運動家等の例を取り上げ、その思想や生き方、現代社会に果たした役割を観察、理解、評価する。
キリスト教学 (聖書) [電気・スポーツ]	聖書、特に新約聖書におけるイエスキリストの生き方、教えを学ぶことの中から、現代に生きる我々の行動指針を見つけ出すこと。
キリスト教学 (技術者としての倫理) [電気・スポーツ]	現代社会に横たわる主な倫理的諸問題の問題性、課題、留意点、解決方法等についてキリスト教の基本的な人間観、世界観、自然観、倫理観から観察、理解、評価する。また、個人的見解を展開、発展させる。
キリスト教学 (聖書) [土木]	聖書、特に新約聖書におけるイエスキリストの生き方、教えを学ぶことの中から、現代に生きる我々の行動指針を見つけ出すこと。
キリスト教学 (技術者としての倫理) [土木]	現代社会に横たわる主な倫理的諸問題の問題性、課題、留意点、解決方法等についてキリスト教の基本的な人間観、世界観、自然観、倫理観から観察、理解、評価する。また、個人的見解を展開、発展させる。

(2) その他

授業以外の教育活動等	年月（西暦）	摘要
作成した教科書・教材・参考書		
アーツ英会話クラス 教材	2013年5月－2015年3月	幼児から成人のための英会話教材作成
関東学院小学校 5－6年生聖書科 教材	2014年4月－2015年3月	小学校 5－6年生聖書科用教材作成
関東学院六浦小学校 オリーブキッズ(課外英会話クラス) 教材	2014年4月－2014年7月	小学校1、2、5、6年生課外英会話クラス教材作成
関東学院六浦こども園 「英語で遊ぼう」クラス 教材	2014年4月－2014年7月	園児英会話クラス教材作成
第4回KGU 高等教育セミナー「外国語による教授法セミナー（入門編）」教材、資料	2015年8月	セミナー用資料作成
ACTS Seminarie 講義 教材	2013年5月－現在	オンライン授業用教材作成
関東学院小学校 父兄聖書クラス 教材	2014年5月－現在	聖書クラス教材作成

教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
第4回KGU 高等教育セミナー「外国語による教授法セミナー（入門編）」講師	2015年8月	外国語による教授方法について学内教員及び職員に解説

その他教育活動上特記すべき事項		
McMaster Divinity College ゲスト講義	2011年；2012年	講義名：Interdisciplinary Seminar, Women in Christian History, 及び Systematic Theology
Wilfrid Laurier University ゲスト講義	2011年3月	講義名：Interdisciplinary Survey on Environmental Issues
Trinity Western University ゲスト講義	2012年9月	講義名：Principles of Biology, 及び Introduction to Biology-Ecology and Biodiversity
アーツ英会話クラス講師	2013年5月－2015年3月	幼児から成人の英会話を指導
関東学院小学校 5-6年生聖書科講師	2014年4月－2015年3月	聖書科を担当
関東学院小学校 チャペル講話	2014年4月－2015年3月	チャペル(月2回程度)と特別礼拝の講和を担当(年4回程度)
関東学院六浦小学校 オリーブキッズ(課外英会話クラス) 講師	2014年4月－2014年7月	小学校1、2、5、6年生課外英会話クラス担当
関東学院六浦こども園 「英語で遊ぼう」クラス講師	2014年4月－2014年7月	3クラスの園児 「英語で遊ぼう」担当
関東学院六浦こども園 チャペル講話	2014年4月－現在	チャペルの講和（臨時）
関東学院小学校 父兄聖書クラス講師	2014年5月－現在	聖書クラス担当（月1回）

ACTS Seminaries 非常勤講師	2013年5月－現在	Women in Christian Historyの講義（2013年5月－8月）
-----------------------	------------	---

2. 研究活動

研究テーマ	研究概要	2016年度方針・計画
キリスト教教育	関東学院小学校 父母聖書クラス講師 (1回/月)	講義内容の充実、参加者との交流を図る。
キリスト教教育・宣教活動	関東学院大学 チャペル講話担当	春学期、秋学期に3キャンパスにおいてチャペルでの講話を行う。
キリスト教教育	道德教科化に向けた、本学聖書科の指導要領参考資料作成	原稿（コメント欄）作り、校正への参加、協力。
キリスト教教育	関東学院・大学出版物への執筆	『告知版』等の出版物への随時執筆。
キリスト教教育	「シグマ」（関東学院大学生サークル）顧問	月例会参加、活動への随時協力。
キリスト教教育・宣教活動	「かんらん」（関東学院大学生の聖書学習会）顧問	夏季活動（合宿）協力、月例食事会への住宅開放、賛美バンドへの参加。
女性の役割に関する神学	キリスト教の「男女の役割」とその聖書解釈法についての研究を継続する。	この研究でAmerican Academy of Religionに応募する。今年度の成果を来年春のAmerican Academy of Religionで発表する。

2011年度以降に発表した著書・論文等

著書・学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ）	該当頁
(著書)					
“Adam and Eve in Marriage and Ministry: a Christological and Irenaeus Reappraisal”	単著（博士論文）	2012年3月	McMaster Divinity College		
(学術論文)					
“Calvin, Nature, and Women”	単著	vol. 27 no. 2, 2013	Priscilla Papers (pen name: Sam Arts)		
「聖書を学ぶ意味：人間として成長すること」ということ	単著	vol. 368 May 2016	告知版		pp2-3
(学会発表)					
“Christology and Gender Roles”	単独発表	2012年2月14日	Theological Research Seminar, McMaster Divinity College		
“John Calvin’s View of Nature and the Role of Women”	単独発表	2012年3月15日	American Academy of Religion, Mid-Atlantic Region		
“Gender Roles and the Interpretative Method of the Creation Story”	単独発表	2012年5月5日	American Academy of Religion, Eastern International Region		

3. 社会活動等

テーマ	概要
地域貢献 ア	ヴァンクーバー ミャンマー バプテスト教会 牧師（ヴァンクーバー、カナダ）
大学教会連携 ウ	アメリカンバプテスト インターナショナルミニストリーズ 協力宣教師
地域貢献・連携 ア	キリスト教公開講座の講師（キリスト教といのちの問題について）

※テーマ記載にあたって、ア．地域貢献・連携 イ．産官学連携 ウ．大学間連携等に関する事項については、ア．イ．ウの記号をもって省略可

4. 管理運営等

名称等	期間（西暦）
関東学院第三号理事	2014年10月25日－現在
関東学院評議員	2014年5月24日－現在
関東学院協力宣教師	2014年4月1日－現在
関東学院大学宗教主事	2016年4月1日－現在

1. 教育活動

(1) 本学における担当授業科目

授業科目名	2016年度方針・計画
キャリアデザイン基礎Ⅰ	前半では、男女共同参画社会の意義と必要性、パートナーシップ、ロールモデルの必要性を学び、男女共同参画社会の形成と展開に関する理解を深める。また、卒業生たちが社会でどのような体験を重ねているかを知ること、社会の実情を理解し、自らの目指すべき道を考察する。 後半では、男女共同参画社会の実現に向けて、政策・法律上の整備が行われているかを学びながら、男女差だけではなく多様性（ダイバーシティ）の観点を踏まえ、自らのキャリア観を醸成し企業等進路を考察する。
キャリアデザイン基礎Ⅱ	座学で得た知識と実学で得た活きた情報から、これから社会に出てから「自分はどうありたいのか?」「どんな働き方をしていきたいのか?」を現実社会に即した観点で、自分のキャリアをデザインできるようになることが到達目標である。具体的には半期を通して、これからの学生生活の中で主体的に関わる「何か」を自ら見つけることができるようになり、そのことを通して自分なりに考えた課題を解決する行動計画を立て、その一歩を踏み出せるようになることを目標とする。

(2) 本学以外における非常勤講師担当科目

授業科目名	年月（西暦）	大学・その他教育機関等
論理コミュニケーションⅠ・Ⅱ	2012年～2014年	鈴鹿国際大学（現在、鈴鹿大学） 非常勤講師
キャリア実践Ⅰ	2014年	鈴鹿国際大学（現在、鈴鹿大学） 非常勤講師
ライフ・キャリア・デザインⅠ	2016年	青山学院女子短期大学 非常勤講師

(3) その他

授業以外の教育活動等	年月（西暦）	摘要
作成した教科書・教材・参考書		
コミュニケーションペーパーの作成・活用	2012年～現在	授業後にコミュニケーションペーパーを用いて、授業内容に関する感想や要望などを記述させ、コメントなどを返答することで授業改善に役立てた。
ディスカッションに活用するワークシートの作成	2012年～現在	文献や映像コンテンツを参考に、与えられたテーマ（IT技術はヒトの仕事を奪うか?等）について、ワークシート（意見と根拠を記述）に記入した後、小グループで議論する機会を設けた。これらを通じて、自分の意見を主張し、かつ人の意見を聴く態度を修得させることができた。
文献を活用した読解教材の作成	2012年～現在	論理的な読解、すなわち要約するために、様々な学問分野の文献から、意見と根拠に線を引きさせる問題と解説をした教材を作成した。
ループリックの作成と活用（ミニレポートや社会人インタビューなどの学習評価）	2015年～現在	キャリアデザイン基礎Ⅱで実施した社会人インタビューについて、レポートを評価するために、ループリックを作成し、学習成果の評価の精度を向上させた。
教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
鈴鹿短期大学 入学前準備講座 「大学基礎講座」 講師	2013年3月～2015年3月	短大入学前の学生を対象とした入学前教育プログラム。その中で論理的な文章の書き方や、レポートの書くための文献・資料の調べ方などの講義を行った。
慶應義塾大学SFC研究所プラットフォームデザインラボ シンポジウム「就職必須実践力の見える化技術とアジアの若者の人材力急成長」 パネリスト	2013年7月	大学の就職担当の教職員、及び企業採用・人事担当者を対象としたシンポジウム。パネリストとして、採用現場の現状報告及び、就職内定学生とコミュニケーション力との関係についての研究発表などを行った。
学校法人享栄学園 SD (Staff Development) 研修会 講師	2013年9月	学校法人享栄学園の職員を対象に実施した研修会。平成24年8月中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」についての講演と、今後の学園についてどのような施策をすべきかについて、ワークショップを行った。
鈴鹿国際大学 初年次教育「プレゼミナール」 ゲスト講師	2014年6月	1年生対象の必修科目「プレゼミナール」で、資料や論文の調べ方（CiNiiなど）をテーマにして、グループワークを実施した。

第8回 kotoken Coffee Hour「関東学院大学において望ましいActive Learningは何か？」講師	2015年6月	アクティブラーニングをテーマにしたワークショップを取り入れた講演を実施し、大学において望ましいアクティブラーニングに関して参加者各自が検討し、発表した。
鈴鹿大学（旧鈴鹿国際大学）初年次教育「プレゼミナール」ゲスト講師	2015年11月	1年生対象の必修科目「プレゼミナール」で、キャリア教育に関する授業を実施した。
3大学FD合同懇談会「キャリア教育におけるアクティブ・ラーニング」オーガナイザー	2015年12月	横浜3大学（神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大学）の合同懇親会で、「キャリア教育におけるアクティブ・ラーニング」に関して話題提供とグループワークのとりまとめを行った。
大学IR人材育成カリキュラム 京都集中講習会2016 講師	2016年1月	IR（Institutional Research）の手法の1つである学生調査についての実践と活用事例について講演とワークショップを行った。
第4回大学コンソーシアム石川FD・SD研修会 第1回MJIRワークショップ「大学をどのように測り、評価し、アピールするか」講師	2016年2月	ショートレクチャーとして、「文系学部または文系分野の本当の力」について、様々な調査結果の紹介と考察を行った。
鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部 FD研修会 講師	2016年2月	「鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部の魅力を伝えるデータ・エビデンスの活用法」をテーマに、IRの基礎的概念の講演と、ワークショップを実施した。
ヨコハマFDフォーラム16 学生の学びのモチベーションを高める大学教育 総司会	2016年2月	3大学における「FD活動の連携に関する包括協定」締結後、初めてのイベント「ヨコハマFDフォーラム16」で総司会を務めた。
2016年度関東学院大学 新任教職員研修「Active learning の理解と導入」講師	2016年4月	関東学院大学の新任教員を対象に、アクティブラーニングについて基礎的概念の講演と、アクティブラーニング型の授業を考えるワークショップを実施した。
FMICS 5月例会「キャリア教育におけるアクティブ・ラーニング」パネリスト	2016年5月	教育に関する研究集会FMICSで、「キャリア教育におけるアクティブ・ラーニング」について話題提供を行った。
2016年度関東学院大学 新任教職員研修「反転授業を活用したActive Learning実践講座」講師	2016年7月	関東学院大学の新任教員を対象に、反転授業について基礎的概念の講演と、反転授業の活用に関するワークショップを実施した。
2016年度関東学院大学 教員免許状更新講習 選択講習「主体的な学習を引き出すアクティブラーニング実践講座」講師	2016年8月	受講者が自身の担当する授業や教育活動にアクティブラーニングを導入できるようになることを目指し、対象者を全教員・全学校種（幼・小・中・高・養護・栄養教諭）で、アクティブラーニングの基礎理解と実践に向けたワークショップを行った。
2016年度関東学院六浦中学校・高等学校教員研修会「生徒の主体性をより引き出すアクティブラーニングの導入・実践とその評価」講師	2016年8月	関東学院六浦中学校・高等学校の全教員を対象とし、アクティブラーニングについて基礎的概念の講演と、アクティブラーニング型の授業を考えるワークショップを実施した。
第22回 kotoken Coffee Hour「大学スポーツの支援について」講師	2016年8月	近年の大学スポーツ振興についての政策動向を基に、関東学院大学のスポーツや体育会の支援について話題提供を行った。
その他教育活動上特記すべき事項		
高等教育研究・開発センター運営委員会委員	2015年～現在	全学を対象とした教学施策に関して検討する高等教育研究・開発センター運営委員会の委員として参画している。
高等教育研究・開発センター「キャリア教育部会」部会員	2015年～現在	高等教育研究・開発センター内に設置された「キャリア教育部会」にて、部会員として、全学的なキャリア教育の推進のための教育施策の企画・開発を行っている。
高等教育研究・開発センター「SD推進部会」部会員	2015年～現在	高等教育研究・開発センター内に設置された「SD推進部会」にて、部会員として、全学のSD推進のための企画・開発を行っている。
授業改善アンケートに関する検討と推進	2015年～現在	高等教育研究・開発センター内に設置された「FD推進部会」の部会長として、授業改善アンケートのWEB化及びアンケート項目、活用法に関して検討及び推進を行っている。
未来ビジョンWG（同窓会との連携強化）卒業生調査PJグループリーダー	2016年～現在	今後の関東学院大学の在り方を考える一つの方法として、卒業生から見た大学の魅力について明らかにするための調査設計を行った。

2. 研究活動

研究テーマ	研究概要	2016年度方針・計画
学生の成長要因に関する分析と教学施策の検討	大学生の成長に向かわせる要因を定量及び定性的な分析から明らかにした上で、教学施策について提言を行う。	ベネッセグループとの共同研究の枠組みで、関東学院大学の低学年を対象に、適性検査（アセスメント）やインタビューから、学生を成長に向かわせる要因を明らかにし、FDを始めとした教学の施策に関して検討を行う。
初回授業のモデル開発	初回授業の事例調査と検証を通じて、教育効果が高まる初回授業を開発する。	現状の初回授業の実態把握を行った上で、初回授業のグッドプラクティスを整理する。また初回のモデル授業を複数科目で実施し、その効果検証を行う。その上で、履修登録等の課題も視野に入れた望ましい初回授業のモデルについて検討する。
体育会学生の実態把握	体育会学生に関して学習面や進路意識などについて調査を行う。	体育会学生について質問紙調査を実施した結果を分析することで、学習面や進路意識などについての実態を明らかにし、教育プログラムについての検討を行う。
クラシック音楽の演奏に関するループリックの作成と検証	クラシック音楽の演奏に関するループリックを作成と検証を行う。	クラシック音楽の演奏に関するループリックを作成した上で、プロの音楽家が生徒に演奏課題を与える際に、ループリックを活用し、その効果を検証する。
大学における入学前教育の教育効果	大学の入学前教育に関するプログラムの実践と教育効果について研究する。	これまでに発表した研究成果を論文としてまとめていく。

2011年度以降に発表した著書・論文等

著書・学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ）	該当頁
(著書)					
生活コミュニケーション学を学ぶ（執筆担当「地方短期大学のキャリア教育、及び進路支援に関する一考察～鈴鹿短期大学の事例より～」）	共著	2014年2月	あるむ	編者：川又俊則、久保さつき。著者：川又俊則、久保さつき、杉原亨、他16名	59-75頁
(学術論文)					
鈴鹿短期大学卒業生調査からの分析と考察 ―3つの視点より―	単著	2013年8月	生活コミュニケーション学 第4号、鈴鹿短期大学 生活コミュニケーション学研究所年報		13-23頁
学生の主体的参加を高める短期大学入学準備プログラムの開発	共著	2014年3月	鈴鹿短期大学紀要34巻	渋谷郁子、岩田昌子、杉原亨、石川拓次、前澤いすず	19-30頁
地方私立大学における、入試形式別での学習動機と大学進学動機に関する一考察	単著	2014年7月	関西教育学会年報38巻		186-190頁
学習における消費者意識及び行動に関する一考察 ―マーケティングの視点より―	単著	2014年8月	生活コミュニケーション学 第5号、鈴鹿短期大学 生活コミュニケーション学研究所年報		1-11頁
短大入学生における生活習慣および身体症状と自尊感情および学習に対する印象の関連	共著	2015年3月	鈴鹿短期大学紀要35巻	石川拓次、渋谷郁子、前澤いすず、杉原亨、岩田昌子、松本亜香里	85-95頁
大学生の多文化共生志向に関する一考察	単著	2015年3月	鈴鹿国際大学紀要 No. 21. 2014		27-39頁
国際系地方大学における多文化共生志向について ―学生調査からの分析と考察―	単著	2015年7月	第4回大学情報・機関調査研究集会 論文集		52-57頁
入試形式別における大学生のコンピテンスに関する一考察 ―地方国際系大学の事例より―	単著	2015年8月	関西教育学会年報39巻		91-95頁
地方短期大学生のコミュニティ意識に関する一考察 ―卒業生調査からの分析―	単著	2015年9月	生活コミュニケーション学 第6号、鈴鹿短期大学 生活コミュニケーション学研究所年報		9-20頁
体育会学生の学習動機とキャリア観及び将来展望に関する一考察	共著	2015年10月	関東学院大学高等教育・研究開発センター年報第1号	杉原亨、奈良堂史	19-29頁

A study on the survey for actual condition of local junior college graduates in Japan (Journal査読論文)	単著	2016年4月	Information Engineering Express International Journal Volume2, Number1		33-43頁
初年次キャリアデザイン科目におけるアセスメントの実施と活用	単著	2016年7月	第5回大学情報・機関調査研究集会 論文集		86-90頁
(その他)					
(学会発表) 大学生のコンピテンス育成状況と自己効力との関係性	共著	2011年8月	日本教育学会 第70回大会	竹内正興、杉原亨	318-319頁
(学会発表) 高等学校新指導要綱に対応した論理的コミュニケーション授業への遠隔教育の導入	共著	2011年9月	日本教育工学会第27回大会	梅嶋真樹、杉原亨、仁藤亜里	819-820頁
(学会発表) 論理コミュニケーション力の主観評価と客観評価の乖離に関する研究	共著	2012年9月	日本教育工学会第28回大会	杉原亨、梅嶋真樹	483-484頁
(学会発表) 地方短期大学における学生の主体的参加を高める入学準備プログラムの開発	共著	2013年8月	日本リメディアル教育学会 第9回全国大会	渋谷郁子、杉原亨、石川拓次、前澤いすず、岩田昌子	104-105頁
(学会発表) 就職内定獲得学生のモデル化とコミュニケーション力の比較 (試論)	共著	2013年9月	日本教育工学会第29回大会	杉原亨、大島 禎、梅嶋真樹	553-554頁
(学会発表) 入試形式別における学習動機と大学進学動機に関する一考察 一般入試と推薦AO入試における比較	単著	2013年11月	関西教育学会第65回大会		50頁
(学会発表) 学習における消費者意識と学習成績との関係性について -地方短期大学の卒業生調査より	単著	2014年5月	大学教育学会第36回大会		262-263頁
(学会発表) 短期大学入学者における生活習慣が学習観および進学動機に及ぼす影響	共著	2014年9月	日本教育工学会第30回大会	石川拓次、渋谷郁子、前澤いすず、杉原亨、岩田昌子、松本亜香里	727-728頁
(学会発表) 大学生の多文化共生志向に関する一考察	単著	2014年9月	日本社会教育学会第61回研究大会		113頁
(学会発表) 入試形式別における大学生の資質能力に関する一考察 -地方国際系大学の事例より-	単著	2014年11月	関西教育学会第66回大会		35頁
(学会発表) 地方短期大学生のコミュニティ意識について -卒業生調査からの分析より-	単著	2015年6月	大学教育学会第37回大会		176-177頁
(国際学会ポスター発表) Examining the result of a survey conducted from five viewpoints with Junior College graduates	単著	2015年7月	2015 IIAI 4th International Congress on Advanced Applied Informatics IIAI-AAI 2015		50頁
(学会発表) 短期大学入学前に行う準備講座の有効性についての検討 (一仲間づくり・主体性を高めるプログラムの有効性を中心に)	共著	2015年8月	日本リメディアル教育学会 第11回全国大会	石川 拓次、渋谷郁子、前澤 いすず、杉原 亨、岩田 昌子	96-97頁
(学会発表) 体育会学生のキャリア観と将来展望に関する一考察	共著	2015年9月	日本教育工学会第31回大会	杉原亨、奈良堂史	103-104頁
(学会発表) 音楽による教育活動や社会貢献を試みる「kyoumei」の設立	共著	2015年9月	日本教育工学会第31回大会	杉原亨、柴田ゆき、柴田元広	317-318頁
(実践報告) 学院改革推進5カ年計画支援事業、自校史授業開講に向けて 1	共著	2015年10月	関東学院大学高等教育・研究開発センター年報第1号	山田昭子、杉原亨、千葉隆行	31-35頁

(学会発表) 大学生の多文化共生志向と学習動機 及びコンピテンスとの関係性	単著	2015年11月	関西教育学会第67回大会		27頁
(学会発表) 体育会学生の学習動機とキャリア形成 に関する調査研究ー支援プログラムの 開発を目指してー	共著	2015年12月	日本スポーツマネジメント学会第8回大会号	奈良堂史、杉原亨	48頁
(ラウンドテーブル：企画者、報告者) 学生の目を輝かせる大学教育の可能性Ⅷ	共著	2016年5月	大学教育学会第38回大会	高橋真義、中村拓昭、十河功一、菊池勇次、郷原正好、杉原亨、田尻慎太郎、米田敬子	46-47頁
(書評) 編者：中井俊樹「シリーズ 大学の 教授法3 アクティブラーニング」	単著	2016年5月	大学教育学会誌第38巻 第1号		183-185頁
(雑誌記事) 連載 大学IRの今第11回 地方短期 大学におけるIR～卒業生調査の実践 より～	単著	2016年6月	文部科学通信教育 No. 391 2016 7月11日 号		28-29頁
(国際学会ポスター発表) A study on the survey for consumer awareness and behaviors of local junior college graduates in Japan	単著	2016年7月	2016 IIAI 5th International Congress on Advanced Applied Informatics IIAI-AAI 2016		

3. 社会活動等

テーマ	概要
大学情報・機関調査研究集会 (MJIR. Meeting on Japanese Institutional Research) 運営 主幹事	大学情報・機関調査の事例紹介や研究発表を通じて、日本における機関調査を推進し、高等教育のみならず経営学や統計学、情報科学など、関連する分野の研究者や実務家、および大学の現場で活躍する教育者の方々を対象とした人的交流の促進とネットワーク形成を行っている。
DSIR2016 プログラム委員会委員 program committee (paper reviewer)	国際会議DSIR (Data Science and Institutional Research) のプログラム委員として paper reviewを行った。
横浜市内3大学におけるFD活動に 関する大学間連携	横浜市内に立地する3大学(横浜国立大学、神奈川大学、関東学院大学)の大学教育センター等の組織が連携して、「FD活動合同連絡会議」や各種セミナー等を開催・共催している。 また、ヨコハマFDフォーラム16では実行委員を務めた。
神奈川県ライフキャリア教育検討 委員	神奈川県が主催する若年層を対象としたライフキャリアに関して、特にアクティブラーニングを導入した教育内容に関する情報提供と議論を行っている。
音楽による教育活動や社会貢献を 軸に活動する任意団体「kyoumei」 首席研究員	2015年3月に設立した、音楽による教育活動や社会貢献を軸に活動する任意団体「kyoumei (きょうめい)」へ、教育施策、事業運営に関する調査研究を実施している。
日本論理コミュニケーション技術 振興センター 上席研究員	社会で求められる論理的なコミュニケーション力に関する測定技術などについて研究を実施している。
FM横浜「ヨコハマウォーカーラ ジオ」出演	FM横浜「ヨコハマウォーカーラジオ」(関東学院 提供) で、大学生のキャリアについて話題を提供した。(2016年2月6日放送)
高等教育専門誌Between記事掲載 (WEB版)	ベネッセグループの共同研究に関して、高等教育専門誌BetweenのWEB版で記事として掲載された。 http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2016/04/kyodokenkyu.html

4. 管理運営等

名称等	期間 (西暦)
高等教育研究・開発センター「FD 推進部会」 部会長	2015年4月～現在

職 名 専任講師
学 位 修士（経営学）

1. 教育活動

(1) 本学における担当授業科目

授業科目名	2016年度方針・計画
KGU かながわ学（スポーツ）	①地域社会とスポーツとの密接な関係を理解するとともに、本学が立地する「神奈川県」に対する理解を、スポーツを手がかりに深めることができる（知識・理解）。 ②スポーツ分野における地域問題について、グループワーク等を通じて議論、解決策を他者に向けて提案することができる（思考・判断・表現）。 ③スポーツの諸現象を、講義内で紹介される分析枠組みを通じて、整理・理解・統合する方法を習得している（技能）。 ④地域とスポーツの視点から自身のスポーツ活動を見直し、受講後の行動計画を立案し・発表することができる。（関心・意欲・態度）。
KGU キャリアデザイン基礎Ⅱ	座学で得た知識と実学で得た活きた情報から、これから社会に出てから「自分はどうありたいのか?」「どんな働き方をしていきたいのか?」を現実社会に即した観点で、自分のキャリアをデザインできるようになることが到達目標である。具体的には半期を通して、これからの学生生活の中で主体的に関わる「何か」を自ら見つけることができるようになり、そのことを通して自分なりに考えた課題を解決する行動計画を立て、その一步を踏み出せるようになることを目標とする。

(2) 本学以外における非常勤講師担当科目

授業科目名	年月（西暦）	大学・その他教育機関等
ライフ・キャリア・デザインⅠ、ライフ・キャリア・デザインⅢA、ライフ・キャリア・デザインⅢB、現代社会特講〔経営〕B	2012年4月～現在	青山学院女子短期大学 非常勤講師
キャリアデザイン発展〔体育部〕、経営特殊講義B（スポーツマネジメント）	2015年4月～現在	拓殖大学 商学部非常勤講師

(3) その他

授業以外の教育活動等	年月（西暦）	摘要
作成した教科書・教材・参考書		
KGU キャリアデザイン入門	2015年3月	関東学院大学と（株）ベネッセコーポレーションが共同して作成・発行した表題の科目のテキストである。筆者も、同テキストの内容の構成・編集を担当する「高等教育研究・開発センター」の一員として、作成に関わっている。

教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
関東学院大学「全学FD・SDフォーラム」	2013年9月	「教育・研究の質向上に向けて」と題して行われた全学教員研修会（FD・SDフォーラム）の中の「公開シンポジウム」のパネリストを担当した。テーマは、「主体的な学びについて」である。
教育工学会 第31回全国大会にて研究発表	2015年9月	杉原亨との共同報告。「体育会学生のキャリア観と将来展望」と題し、関東近県5大学の学生に向けて行った大学生活・学習に関する調査をもとに、体育会学生のキャリア志向の特徴について、非体育会学生との比較分析を通じて明らかにしている。
岐阜経済大学FD研修会	2016年3月	講演タイトルは、「大学の競争優位と教育力を高めるFDのあり方～自大学における教学改革の経験から～」とし、関東学院大学における教学マネジメントの改革例を中心に、3つのポリシーの見直しやカリキュラムマップ、ナンバリングといった教学上の諸施策を、当該大学のおかれた状況や文脈に沿って導入する意義とその具体的な方法について講演した。

その他教育活動上特記すべき事項		
高等教育研究・開発センター「キャリア教育部会」部会員	2013年4月～現在	高等教育研究・開発センター内に設置された「キャリア教育部会」にて、全学的なキャリア教育の推進のための教育施策の企画・開発を行っている。筆者は、部会員として、インターンシップ科目の全学共通化や事前指導科目の新設、評価のためのルーブリックの作成などに関わっている。

青山学院女子短期大学での講演「職種研究セミナー」	2013年10月 (全3回)	就職活動を直前に控えた短大1年生向けに就職活動における「職種研究」の必要性とその概要・方法について解説した（第1回「事務職編」、第2回「販売職編」、第3回「営業職編」）。
青山学院女子短期大学での講演「業界研究セミナー」	2014年10月	就職活動を直前に控えた短大1年生向けに就職活動における「業界研究」の必要性とその概要・方法について、経営学における企業研究の方法を踏まえ解説した。
杏林大学「キャリア開発論Ⅱ」にてゲスト講師を担当	2014年11月	グローバル化やICT技術の革新など、急速な社会の変化の中で、これからの時代に求められる人材像を提示しつつ、そのための学びの質的転換をキャリア・デザインの視点から学生に講義した（大学2年生向け）。

2. 研究活動

研究テーマ	研究概要	2015年度方針・計画
体育会学生のキャリア観と将来展望に関する研究	大学の公認体育会へ所属する学生（体育会学生）と非所属学生に対する調査を通じて、体育会学生のキャリア意識と学習・生活行動との関連を明らかにする。	①日本スポーツマネジメント学会第9回全国大会にて研究発表する（16年12月、近畿大学）。 ②研究論文を『関東学院大学高等教育研究・開発センター年報』へ投稿する。
学士課程における経営学教育の最新動向と質保証に関する研究	従来のケースメソッドやプロジェクト型演習に加え、近年大学教育全般に導入されつつあるアクティブラーニング等の経営学における導入状況を調査すると共に、経営学における教育の質保証の現状と課題を明らかにする。	2017年9月の日本経営学会での発表を目標に、年度内に研究論文を投稿し、17年3～4月の同学会の報告者募集（コール・フォー・ペーパー方式）に応募する。

2011年度以降に発表した著書・論文等

著書・学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ）	該当頁
(著書)					
スポーツビジネス概論	共著	2012年3月	叢文社	黒田次郎、遠藤利文編	43-53頁
日本の「いま」を見つめる 一制度・組織の視点から一	共著	2014年3月	南窓社	横浜商科大学公開講座委員会編	139-160頁
スポーツビジネス概論2	共著	2016年4月	叢文社	黒田次郎、石塚大輔、萩原悟一編	47-58頁

(学術論文)					
“講義はライブだ” 一田中信裕先生とファカルティ・ディベロップメント	単著	2014年7月	現代経営研究		20-22頁
体育会学生の学習動機とキャリア形成に関する一考察	共著	2015年10月	関東学院大学高等教育研究開発センター年報第1号	杉原亨、奈良堂史	19-29頁

(その他)					
学会発表 体育会学生のキャリア観と将来展望に関する一考察	共同	2015年9月	教育工学会第31回全国大会	杉原亨、奈良堂史	
学会発表 体育会学生の学習動機とキャリア形成に関する調査研究：支援プログラムの開発を目指して	共同	2015年12月	日本スポーツマネジメント学会第8回全国大会	杉原亨、奈良堂史	
ワーキングペーパー 他大学におけるファカルティ・ディベロップメントの実施状況に関する調査 一高等教育センター等の組織を有する私立大学を中心に一	単著	2013年1月	KGU 高等教育研究・開発センター（仮称）設置に関する検討を行なうワーキング・グループ		1-31頁
リメディアル教育（補習教育）に関する調査	単著	2013年3月	同上		1-14頁

3. 社会活動等

テーマ	概要
横浜市内3大学におけるFD活動に関する大学間連携	横浜市内に立地する3大学（横浜国立大学、神奈川大学、関東学院大学）の大学教育センター等の組織が連携して、「FD活動合同連絡会議」や各種セミナー等を開催・共催している。
横浜市中区企業の防災・減災に関するアンケート調査	横浜市中区と関東学院大学との共同調査に参加。25頁の調査報告書の執筆（共同）を担当した（2014年8月）。

※テーマ記載にあたって、ア．地域貢献・連携 イ．産官学連携 ウ．大学間連携等に関する事項については、ア．イ．ウの記号をもって省略可

4. 管理運営等

名称等	期間（西暦）
高等教育研究・開発センター「カリキュラムマップ部会」 部会長	2015年4月～現在

山田 昭子 Akiko Yamada

職 名 研究員
学 位 博士（文学）

1. 教育活動

(1) 本学以外における非常勤講師担当科目

授業科目名	年月（西暦）	大学・その他教育機関等
日本語表現	2010年9月～現在	東洋英和女学院大学学習サポートセンター（スタディコンサルタント）
古典	2011年9月～ 2011年3月	大西学園高等学校
文学	2015年9月～現在	浦和学院専門学校看護学科
日本文学研究7、8（IV）	2016年4月～現在	専修大学
初級クラス	2016年7月～8月	KCP 地球市民日本語学校

(2) その他

授業以外の教育活動等	年月（西暦）	摘要
作成した教科書・教材・参考書		
高等学校 新編国語総合 指導と研究（第一学習社）	2013年3月	8～33頁執筆
高等学校 標準現代文B 指導と研究（第一学習社）	2014年3月	132～162頁執筆
改訂版 標準国語総合 指導と研究（第一学習社）	2017年刊行予定	
「日本語表現マスター」（仮題）	2017年4月刊行予定	第一章執筆（予定）

教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
「文章表現講座～エントリーシート執筆を目指して」	2015年8～9月	東洋英和女学院大学において夏季特別講座の講師として「文章表現講座～エントリーシート執筆を目指して」を担当した（全3回）。

その他教育活動上特記すべき事項		
自校史テキストの作成	2015年4月～現在	自校史授業内で使用するテキストの作成

2. 研究活動

研究テーマ	研究概要	2016年度方針・計画
吉屋信子	学会、学会誌への発表、執筆	資料の収集を引き続き行うとともに、周辺作家・事項についても研究を進めていく。
大庭みな子	大庭みな子研究会刊行出版物への執筆	2017年刊行予定の『大庭みな子研究』（仮）への原稿執筆

著書・学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ）	該当頁
（著書）					
『円地文子事典』	共著	2011年4月	鼎書房	芸術至上主義文芸学会 企画・編	151～152、 250、365頁
『大庭みな子全集』第24巻 解題、資料・研究文献	共著	2011年4月	日本経済新聞出版社	大庭利雄監修	313～316、 642～679頁
『現代女性作家読本⑩宮部みゆき』	共著	2013年4月	鼎書房	現代女性作家読本刊行会	124～127頁
『現代女性作家読本⑨山本文緒』	共著	2015年1月	鼎書房	現代女性作家読本刊行会	90～93頁
『菊池寛現代通俗小説事典』	共著	2016年7月	八木書店	片山宏行	239～244、 65～70、 131～136頁
『吉川英治事典』	共著	2016年8月	勉誠出版	志村有弘	268～269
『大庭みな子研究』（仮）	共著	2017年刊行予定	未定	大庭みな子研究会編	「津田梅子－大庭利雄氏保管資料から」
（学術論文）					
「新しき」ボルネオ論	単著	2014年9月	「専修国文」第95号		65～83頁

吉屋信子『安宅家の人々』論 (その他)	共著	2015年1月	「専修国文」第96号	43～62頁	
(実践報告) 自校史授業開講へ向けて1	共著	2015年10月	「関東学院大学高等教育研究・開発センター年報第1号」	山田昭子、杉原亨、千葉隆行	31～35頁
(実践報告) 自校史授業開講へ向けて2	共著	2016年10月 刊行予定	「関東学院大学高等教育研究・開発センター年報第2号」	山田昭子、杉原亨、千葉隆行	
(口頭発表)「新しき」ボルネオ論	単独	2013年6月16日	第75回日本比較文学会全国大会（於名古屋大学）		
(口頭発表) 吉屋信子『安宅家の人々』論	単独	2013年12月14日	第53回昭和文学会研究集会（於専修大学）		
(口頭発表) 大庭みな子『津田梅子』一大庭利雄氏保管資料から	単独	2014年3月14日	第13回大庭みな子研究会（於東洋英和女学院大学）		
(口頭発表) 吉屋信子『良人の貞操』論	単独	2015年1月18日	第239回芸術至上主義文芸学会例会（於品川区立中小企業センター）		
(口頭発表) 少女小説に見る「顔」描写の考察	単独	2016年11月20日	第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（於香港大学）		
「関東学院大学高等教育研究・開発センター NEWS LETTER」編集、執筆		2015年8月～現在	関東学院大学高等教育研究・開発センター		
「関東学院大学高等教育研究・開発センター年報」編集、執筆		2015年4月～	関東学院大学高等教育研究・開発センター		

高等教育研究・開発センター活動報告、記録

Annual Report of Center for Research and Development of Higher Education, Kanto Gakuin University

【2015 年度 高等教育研究・開発センター 事業報告】

高等教育研究・開発センターの概要

高等教育研究・開発センターは、大学ユニバーサル化に伴う学生の学力格差の拡大、リメディアル教育や教育の質保証への対応、学生を主体的な学びへ誘うための学修支援強化など教学上の諸課題を、学部の枠を超えた学士課程における全学的課題として分析・対応するために、2013 年 4 月に設立された。また、2015 年 4 月には、3 名のセンター所属教員が着任し、体制が強化された。

主なセンターの活動は、FD・SD やキャリア教育も含め、高等教育の課題全般について戦略的な観点から調査・研究および全学的な諸施策の企画・開発、教育内容・教育技法の改善に向けた提案、全学教職員を対象としたセミナーやフォーラムの開催と多岐に渡っている。

活動報告

■調査・研究及び学外情報収集

センター所属教員、研究員、職員を中心に、学外セミナー・フォーラム等に参加し、幅広く情報収集を行った。収集された情報は、IR 推進室と協力の上、センターの企画立案、部会の検討資料、学部からの調査依頼等に活用された。

■教育手法・教育内容の改善及び FD・SD 推進

春・秋学期に実施している公開授業及び授業改善アンケートの内容や実施体制について、FD 推進部会を中心に検討を重ねた。公開授業については、2015 年度より、公開期間を 1 ヶ月から 2 週間に短縮したが、期間中の科目について、原則全科目公開とすることとし、より参観しやすい体制を整えた。また、授業改善アンケートについては、実施方法の変更を行うとともに、中間アンケートを試行実施することとした。

全学セミナー、フォーラムについては、4 月の新任教職員及び希望する教職員を対象とした「全学 FD・SD 講習会」、9 月の全学教員研修会内の「全学 FD・SD フォーラム」に加え、計 4 回の「高等教育セミナー」を開催した。

■全学的な教育及び学修支援プログラム

全学共通キャリア教育科目の見直しを行った。一般社団法人経営倫理実践研究センター寄附講座「KGU キャリアデザイン応用 I」を新設するとともに、「KGU キャリアデザイン基礎 I」を、神奈川県との連携による「男女共同参画」を踏まえた授業内容に変更した。インターンシップについては、2015 年度から全学共通科目「KGU インターンシップ実習」を設置した。

リメディアル教育を行う仕組みの大幅な見直しを行い、正課外の大学生基礎力養成講座に、e ラーニングシステム「KANTO れ」を用いた、学生の習熟度に合わせた学びのしくみを取り入れた。

また、地域志向科目についての検討を行い、2016 年度より、全学地域志向科目「KGU かながわ学」を開設することとした。

■3つのポリシー再策定およびカリキュラムマップの作成

再策定された 3 ポリシー（ディプロマ、カリキュラム、アドミッション）の見直しに続いて、ポリシーの検証ツールであるカリキュラムマップの作成に向けて、部会を中心に検討を進め、2 種類のマップ（チェックリスト型、フローチャート型）の整備を行う提案を行った。

また、11 月には、佐藤浩章氏（大阪大学教育学習支援センター・副センター長）氏を迎え、カリキュラムマップについてのセミナーを開催した。

■3 大学（神奈川大学、関東学院大学、横浜国立大学）の FD・SD 活動の連携

神奈川大学教育支援センター、横浜国立大学大学教育総合センターと FD 活動についての連携協定を締結し、合同のセミナーや、3 センター共催による「ヨコハマ FD フォーラム '16」を開催した。この他にも、各センター主催の FD 行事の相互開放や、SD 活動についての連携を行った。

■教材開発及びセンター刊行物の編集・発行

ニューズレターを 2 回発行した。また、2013～2014 年度の活動をまとめた「年報」の発行を行った。

■部会活動

多様な課題に対応するために部会を設置し、センター員以外の教職員も活動に参画している。2015 年度は、FD 推進・キャリア教育・カリキュラムマップ・SD 推進の 4 部会を設置した。

高等教育研究・開発センター運営委員会開催記録

2015 年度

運営委員会構成員

議長	出石 稔	副学長（教学担当）／法学部	2014/ 4/ 1～2016/ 3/31
	奥 聡一郎	教務部長／建築・環境学部	2014/ 4/ 1～2016/ 3/31
	井上 和人	国際文化学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	細田 聡	社会学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	伊藤 明己	経済学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	高橋 恵	法学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	前田 直樹	理工学部／工学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	古賀 紀江	建築・環境学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	鈴木 公基	教育学部／人間環境学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	施 桂栄	人間環境学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	小林 靖	栄養学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	平田 明美	看護学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	宮崎 雄吾	教務課長	
	出石 稔	センター長／法学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	杉原 亨	センター所属教員	
	千葉 隆行	センター企画課長	

第 1 回 運営委員会

日時 2015 年 4 月 29 日（水） 9 時 30 分～10 時 32 分

場所 2 号館 2 階 第 4 会議室

I 確認事項

1. 2015 年度高等教育研究・開発センター運営委員会構成員の確認
2. 2014 年度第 11 回高等教育研究・開発センター運営委員会議事録の確認

II 報告事項

1. 2015 年度事業の取り組み方針について

III 審議事項

1. 2015 年度部会の構成について
2. 2015 年度部会員について
3. 2015 年度センター員について

IV その他

第2回 運営委員会

日時 2015年6月24日(水) 17時30分～18時55分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第1回高等教育研究・開発センター運営委員会議事録の確認について

II 報告事項

1. JPFF(全国私立大学FD連携フォーラム)総会報告
2. FDネットワーク“つばさ”総会報告
3. 大学生基礎力レポート(「KGUキャリアデザイン入門」内実施)結果報告
4. 各学部等報告

III 審議事項

1. 授業改善アンケート 春学期中間アンケート実施結果アンケートについて
2. 2015年度FD・SDフォーラムについて
3. 外国語での教授法に関するセミナーについて

IV その他

1. 授業改善アンケートの活用状況について(調査依頼)

第3回 運営委員会

日時 2015年7月22日(水) 18時00分～18時20分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第2回高等教育研究・開発センター運営委員会議事録の確認について

II 報告事項

1. 公開授業月間(2015年6月)の実施結果報告について
2. 2015年度KGU学修状況調査の実施について
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. 2015年度全学FD・SDフォーラムについて(追認)
2. 第5回KGU高等教育セミナーについて
3. 第6回KGU高等教育セミナーについて

IV その他

第4回 運営委員会

日時 2015年9月30日(水) 16時30分～18時30分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第3回高等教育研究・開発センター運営委員会議事録の確認について

II 報告事項

1. 第4回 KGU 高等教育セミナー(2015年8月6日)開催報告
2. 第5回 KGU 高等教育セミナー(2015年8月19日)開催報告
3. 全学 FD・SD フォーラム(2015年9月2日)開催報告
4. 第6回 KGU 高等教育セミナー(2015年11月14日)開催について
5. 「KGU キャリアデザイン入門」実施報告
6. 各学部等報告

III 審議事項

1. 地域を志向する全学科目「KGU かながわ学」の設置について
2. KGU インターンシップ事前指導の開講年度の変更について
3. 2016年度 授業改善アンケート実施方法について
4. 2015年度上半期自己点検・評価について
5. 神奈川大学 FD 研修会の後援について

IV その他

第5回 運営委員会

日時 2015年10月28日(水) 18時30分～19時30分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第4回高等教育研究・開発センター運営委員会議事録の確認について

II 報告事項

1. 学院改革推進5カ年計画支援事業「自校史教育プログラム」中間報告
2. 第6回 KGU 高等教育セミナーについて
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. 2016年度レアップランについて
2. KGU インターンシップ実習の単位認定基準について
3. 神奈川県主催「ライフキャリア道場」の本学開催について

IV その他

第6回 運営委員会

日時 2015年11月25日(水) 17時30分～18時55分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第5回高等教育研究・開発センター運営委員会 議事録の確認

II 報告事項

1. KGU 新任教員研修プログラム案について
2. 3大学合同FD懇談会について
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. 非常勤講師の採用について
2. 機関等に所属する教員の人事委員会の委員の選出について
3. 2016年度レアプランについて
4. 2016年度他学部開講科目担当者推薦依頼について
5. 2017年度他学部開講科目担当者推薦依頼について
6. 神奈川大学、関東学院大学及び横浜国立大学における

FD活動の連携に関する包括協定書の締結について

7. 2016年度事業計画について
8. SD推進部会員の公募について

IV その他

第7回 運営委員会

日時 2016年1月27日(水) 18時05分～20時30分

場所 2号館2階 第4会議室

I 確認事項

1. 2015年度第6回高等教育研究・開発センター運営委員会 議事録の確認

II 報告事項

1. 2015年度秋学期「公開授業」の参観者について
2. 2016年度全学共通科目のレアプランについて
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. KGU キャリアデザイン入門プログラムの変更について
2. KGU キャリアデザイン入門における配点の見直しについて

3. 大学生基礎力養成講座の廃止等について
4. 「2016 年度の学生による授業改善アンケート」の中止について
5. SD 推進部会員追加について
6. 第 7 回 KGU 高等教育セミナー開催について
7. 全学 FD・SD 講習会および新任教員研修の実施について
8. ヨコハマ FD フォーラム' 16 の開催について

IV その他

第 8 回 運営委員会

日時 2016 年 2 月 24 日（水） 17 時 55 分～20 時 40 分

場所 2 号館 2 階 第 4 会議室

I 確認事項

1. 2015 年度第 7 回高等教育研究・開発センター運営委員会 議事録の確認

II 報告事項

1. KGU キャリアデザイン入門について
2. 全学 FD・SD 講習会および新任教員研修の実施について
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. 2016 年度 学生による授業改善アンケートの実施方法について
2. カリキュラムマップの作成について

IV その他

第 9 回 運営委員会

日時 2016 年 3 月 23 日（水） 14 時 00 分～15 時 00 分

場所 2 号館 2 階 第 4 会議室

I 確認事項

1. 2015 年度第 8 回高等教育研究・開発センター運営委員会 議事録の確認

II 報告事項

1. センター次長について
2. 2015 年度の公開授業について
3. 各学部等報告

III 審議事項

1. 2016 年度部会員について
2. 2016 年度センター員について

3. 2016 年度 学生による授業改善アンケート実施方法について
4. 2016 年度 学生による授業改善アンケートおよび中間アンケートの実施日について
5. 2015 年度事業報告について
6. 2015 年度自己点検・評価について

IV その他

高等教育研究・開発センター員会議開催記録

2015 年度

構成員

議長	出石 稔	センター長／法学部	2015/ 4/ 1～2016/ 3/31
	富田 茂美	センター所属教員	
	杉原 亨	センター所属教員	
	奈良 堂史	センター所属教員	
	野中 康生	経済学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	松下 倫子	人間環境学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	百瀬 幸子	情報科学センター運用課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	千葉 隆行	センター企画課長	

第 1 回センター員会議

日時 2015 年 10 月 7 日（木）15 時 00 分～16 時 00 分

場所 1 号館 4 階 第 2 会議室

I 確認事項

1. 2015 年度 高等教育研究・開発センター員会議 構成員の確認
2. 2014 年度 第 4 回高等教育研究・開発センター員会議 議事録の確認

II 報告・審議事項

1. 高等教育研究・開発センター年報について

III その他

高等教育研究・開発センター作業部会開催記録

2015 年度

1. FD推進部会

構成員

部会長	杉原 亨	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	奥 聡一郎	建築・環境学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	藤田潤一郎	法学部	2014/ 4/ 1～2016/ 3/31
	富岡 千博	学生支援室	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	奈良 堂史	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	山田 昭子	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	千葉 隆行	高等教育研究・開発センター企画課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	眞山 俊介	高等教育研究・開発センター企画課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31

開催日

2015 年 5 月 21 日 (水)、7 月 30 日 (木) 10 月 8 日 (木)、11 月 5 日 (木)、
12 月 3 日 (木)、2016 年 1 月 7 日 (木)、2 月 8 日 (月)、3 月 4 日 (金)

2. キャリア教育部会

構成員

部会長	野中 康生	経済学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	道幸 俊也	法学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	山口 恵美	工学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	上畠 亜希乃	教務課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	岸間 大輔	就職支援課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	細貝 康太	総合研究推進機構運営課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	杉原 亨	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	奈良 堂史	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	千葉 隆行	高等教育研究・開発センター企画課	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31

開催日

2015 年 5 月 28 日 (木)、7 月 28 日 (火)、10 月 1 日 (木)、11 月 12 日 (木)、
2016 年 1 月 14 日 (木)

3. カリキュラムマップ部会

構成員

部会長	奈良 堂史	高等教育研究・開発センター	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31
	井田 瑞江	文学部	2015/ 4/ 1～2017/ 3/31

山本 勝造	経済学部	2015/4/1～2017/3/31
関野 晃一	理工学部	2015/4/1～2017/3/31
廣瀬 春土	I R 推進室	2015/4/1～2017/3/31
滝口 宣明	自己点検・評価室	2015/4/1～2017/3/31
山田 昭子	高等教育研究・開発センター	2015/4/1～2017/3/31
眞山 俊介	高等教育研究・開発センター企画課	2015/4/1～2017/3/31

開催日

2015 年 6 月 2 日（火）、7 月 21 日（火）、9 月 29 日（火）、10 月 20 日（火）、
11 月 17 日（火）、2016 年 1 月 19 日（火）、3 月 29 日（火）

4. S D 推進部会

構成員

部会長	松下 倫子	人間環境学部	2014/4/1～2016/3/31
	東 卓治	教育学部	2014/5/28～2016/3/31
	松谷 秀祐	法学部	2014/4/1～2016/3/31
	山田裕美子	入試課	2014/4/1～2016/3/31
	川出 直紀	教務第二課	2014/4/1～2016/3/31
	清水 歩	人事課	2014/4/1～2016/3/31
	荒井 修二	情報科学センター運用課	2014/4/1～2016/3/31
	菊池 友子	学長事務室	2014/4/1～2016/3/31
	佐野 裕介	教務課	2014/4/1～2016/3/31
	濱田 清華	I R 推進室	2014/5/28～2016/3/31
	杉原 亨	高等教育研究・開発センター	2015/4/1～2017/3/31
	眞山 俊介	高等教育研究・開発センター企画課	2014/4/1～2016/3/31

開催日

2015 年 6 月 24 日（水）、7 月 13 日（月）、9 月 29 日（木）、11 月 5 日（木）、
11 月 30 日（月）、2016 年 1 月 18 日（月）、2 月 15 日（月）、3 月 15 日（火）

Kotoken Coffee Hour

2015 年度

第 6 回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 4 月 30 日（木） 17 時 30 分～19 時 00 分
場 所 2 号館 2 階 教職員ホール
テーマ 第 4 回政策レビューを受けて

第 7 回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 5 月 28 日（木） 17 時 30 分～19 時 00 分
場 所 2 号館 2 階 教職員ホール
テーマ 「2014 年度学生意識調査」について

第 8 回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 1 月 8 日（木） 17 時 30 分～19 時 00 分
場 所 2 号館 2 階 教職員ホール
テーマ 「Active Learning」について

第 9 回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 7 月 9 日（木） 17 時 30 分～19 時 00 分
場 所 2 号館 2 階 教職員ホール
テーマ 「自校史教育」について語り合う

第 10 回 Kotoken Coffee Hour

神奈川大学教育支援センター、横浜国立大学大学教育総合センターとの共催で、第 5 回 KGU 高等教育セミナーとして開催。

日 時 2015 年 8 月 19 日（水） 14 時 00 分～17 時 00 分
場 所 5 号館 1 階 5 号館 101 ホール
テーマ 高大接続を考えるー魅力ある大学に必要な SD 活動とはー

第 11 回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 9 月 24 日（木） 17 時 30 分～19 時 00 分
場 所 5 号館 2 階 第 5 会議室
テーマ 新しい授業時間帯と学年暦について語り合う

第12回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 10 月 29 日 (木) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 5 号館 2 階 第 5 会議室

テーマ 4 期 (クォーター) 制について語り合う

第13回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 11 月 19 日 (木) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 5 号館 2 階 第 5 会議室

テーマ 4 期 (クォーター) 制について語り合う -その 2-

第14回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2015 年 12 月 17 日 (木) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 5 号館 2 階 第 5 会議室

テーマ クリスマスにちなんだ話題

第15回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2016 年 1 月 28 日 (木) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 5 号館 2 階 第 5 会議室

テーマ キャリア (ライフ) デザインについて語り合う -その 1-

第16回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2016 年 2 月 18 日 (木) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 フォーサイト 21 7 階 F-701 教室

テーマ キャリア (ライフ) デザインについて語り合う -その 2-

第17回 Kotoken Coffee Hour

日 時 2016 年 3 月 16 日 (水) 17 時 30 分～19 時 00 分

場 所 フォーサイト 21 7 階 F-701 教室

テーマ 2016 年度に向けて

高等教育研究・開発センター 構成員

2015 年度

高等教育研究・開発センター

センター長 ○出石 稔（法学部）

センター次長 （欠 員）

センター所属教員

准教授 富田 茂美

専任講師 ○杉原 亨

専任講師 ○奈良 堂史

研究員 ○山田 昭子

センター員 野中 康生（経済学部）

松下 倫子（人間環境学部）

百瀬 幸子（情報科学センター企画課）

高等教育研究・開発センター企画課

企画課長 ○千葉 隆行

企画係長 ○眞山 俊介

派遣職員 淡路 治子

臨時職員 土井由紀子

鈴木 芳恵

大西 慧

今野 志保

○ 定例会（原則毎週木曜日開催）構成員

関東学院大学高等教育研究・開発センター規程

(2012年12月20日制定)

(設置)

第1条 本学の教育理念及び教育目標を実現するため、本学に関東学院大学高等教育研究・開発センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、全学的な教育支援体制に係る諸施策の企画及び開発をするとともに、組織的かつ継続的に教育内容及び教育技法の改善を支援することによって、本学の教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 高等教育に係る調査及び研究に関すること
- (2) 高等教育に係るリファレンスに関すること
- (3) 全学的な教育及び学習支援プログラムの企画及び開発に関すること
- (4) 全学的な教授内容及び教育手法の改善並びにファカルティ・ディベロップメント（FD）及びスタッフ・ディベロップメント（SD）に関すること
- (5) 全学的な教育効果の測定及び評価方法に関すること
- (6) センター刊行物の編集及び発行に関すること
- (7) その他、センターの目的達成のために必要な事業に関すること

(組織)

第4条 センターに、次の各号の教職員を置く。

- | | | |
|-----|----------|-----|
| (1) | センター長 | 1名 |
| (2) | センター次長 | 1名 |
| (3) | センター員 | 若干名 |
| (4) | 部会員 | 若干名 |
| (5) | センター企画課長 | 1名 |
| (6) | 事務職員 | 若干名 |

(センター長)

第5条 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。

2 センター長が欠けたときは、速やかに補充するものとする。

(センター次長)

第6条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代理する。

2 前条第2項の規定は、センター次長について準用する。

(センター員)

第7条 センター員は、本学の専任教職員の中からセンター長の推薦によりセンター運営委員会の議を経て、学長が委嘱する。

2 センター員は、第3条に定めるセンターの事業に関する業務に従事する。

3 センター員に欠員を生じたときは、必要に応じて補充することができる。

(部会員)

第8条 部会員は、本学の専任教職員の中からセンター長の推薦によりセンター運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

2 部会員は、部会の検討課題及び取り扱う業務に従事する。

3 前条第3項の規定は、部会員について準用する。

(任期)

第9条 第4条第1号から第4号までに定める者の任期は、それぞれ2年とし、再任を妨げない。ただし、第5条第3項、第6条第3項、第7条第3項又は前条第3項の規定に基づき補充された者の任期は、前任者の残任期間とし、設置期限を設けた部会に属する部会員の任期は、その設置期間とする。

(専任教員)

第9条の2 センターに、専任教員を置くことができる。

2 専任教員の選考については、別に定めるところによる。

(委託研究員)

第10条 センターに、委託研究員を置くことができる。

2 委託研究員の職務、勤務条件、報酬等は、別に定める。
(非常勤講師)

第11条 センターに、非常勤講師を置くことができる。

2 非常勤講師の採用及び選考については、関東学院大学非常勤講師採用規程（平成元年11月16日制定）及び非常勤講師選考基準（昭和57年2月3日制定）による。

3 非常勤講師の給与及び通勤手当は、関東学院大学非常勤講師及びティーチング・アシスタント給与支給規程（昭和63年4月1日制定）により支給する。
(運営委員会)

第12条 センターに、運営委員会を置く。

2 運営委員会は、次の各号の委員で構成する。

- (1) 副学長の中から学長が指名した者1名
- (2) 教務部長
- (3) 教務主任
- (4) 事務局次長の中から学長が指名した者1名
- (5) 教務課長
- (6) センター長
- (7) センター次長
- (8) センター長が指名したセンターの専任教員（専任教員を置いた場合に限る。）
- (9) センター企画課長

3 運営委員会に委員長を置き、前項第1号の委員をもって充てる。

4 委員長は、委員会を招集し、議長となる。

5 運営委員会は、構成員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席者の過半数をもって議決する。

6 運営委員会は、次の事項を審議し、学長に意見を述べるものとする。

- (1) センターの運営に関する基本方針
- (2) 第3条に定めるセンターの事業に関する事項
- (3) センターの予算及び人事に関する事項
- (4) センターの事業に係る自己点検・評価並びに改善及び改革に関する事項
- (5) その他、センターの運営上必要な事項

7 運営委員会に議事録を作成するため書記を置き、委員長が指名する。

8 議事録は、センター企画課長が保管する。

9 運営委員会は、委員長が必要と認めた場合は、構成員以外の者を出席させることができる。
(センター員会議)

第13条 センターに、センター員会議を置く。

2 センター員会議は、次の各号の委員で構成する。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) センターの専任教員（専任教員を置いた場合に限る。）
- (4) センター員
- (5) センター企画課長

3 センター員会議は、センター長が招集し、議長となる。

4 センター員会議は、次の事項を協議する。

- (1) 第3条に定める事業に関する事項
- (2) センター内及び部会間の連絡及び調整に関する事項
- (3) その他、センターの運営上必要な事項

5 前条第9項の規定は、センター員会議について準用する。
(部会)

第14条 センターに、第3条に定めるセンターの事業を専門的に検討するため、必要な部会を置く。

2 部会の構成員は部会員及び委託研究員（置かれた場合に限る。）とする。

3 部会長は、部会員（センター員である者に限る。）の中から運営委員会の議を経て、センター長が任命する。

4 部会長は、部会を統括する。

5 部会の設置及び廃止については、運営委員会の議を経て行う。

(事務の所管)

第15条 センターに関する事務の所管は、センター企画課とする。

(規程の改廃)

第16条 この規程の改廃は、学部長会議の議を経て、学長が行う。

附 則

1 この規程は、2013年4月1日から施行する。

2 この規程は、センターの運用状況、実施効果等を勘案し、第2条の目的の達成状況を評価した上で、この規程施行後3年以内に見直しを行うものとする。

附 則

この規程は、2013年7月8日から改正施行する。

附 則

この規程は、2014年3月19日から改正施行する。

附 則

この規程は、2014年6月13日から改正施行する。

附 則

この規程は、2014年7月12日から改正施行する。ただし、第12条第2項第3号の改正規定は、2015年4月1日から改正施行する。

附 則

この規程は、2015年3月19日に改正し、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2016年4月14日から改正施行する。

関東学院大学高等教育研究・開発センター年報 第2号

発行 2016年10月31日

発行者 関東学院大学高等教育研究・開発センター

〒236-8501 神奈川県横浜市金沢区六浦東 1-50-1

TEL 045-786-7809 FAX 045-786-7852

E-mail kotoken@kanto-gakuin.ac.jp
